

茨城県教育財団文化財調査報告第198集

市ノ台屋敷遺跡

一般国道6号牛久土浦バイパス改築
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第198集

いち の だい や しき
市ノ台屋敷遺跡

一般国道6号牛久土浦バイパス改築
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

一般国道6号は、首都東京と仙台を結ぶ幹線道路であり、産業、経済活動を支える主要な路線であります。

しかし、近年県内においてはJR牛久駅や荒川沖駅周辺の市街地化により、慢性的な渋滞が生じています。国土交通省は、この問題を解決するために、牛久土浦バイパスの建設を進めています。また、この道路が首都圏中央連絡自動車道（圏央道）へのアクセス道路として機能することにより、沿線地域の活性化にもつながります。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である市ノ台屋敷遺跡をはじめ多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成12年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「一般国道6号牛久土浦バイパス改築工事地内埋蔵文化財報告書1 稲岡遺跡」として刊行しております。

本書は平成13年度から平成14年度に調査を実施した市ノ台屋敷遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所から賜りました多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成13・14年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字市野台に所在する市ノ台屋敷遺跡^{いちのだいやしき}の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成13年4月1日～平成13年7月31日、平成13年9月1日～9月30日
平成14年4月1日～平成14年5月15日
整理 平成14年9月1日～平成15年1月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、平成13年度の調査を調査第一課第2班長川津法伸、主任調査員島田和宏、同 近藤恒重が、平成14年度の調査を調査第一課第2班長川津法伸、主任調査員綿引英樹、調査員小林健太郎が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、主任調査員島田和宏が担当した。
- 5 発掘調査及び整理作業に際し御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X=+2,440\text{m}$ 、 $Y=+27,160\text{m}$ の交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c・・・j、西から東へ1、2、3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠して、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付けて併記した。

3 本文・実測図・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡—SI 掘立柱建物跡—SB 土坑—SK ピット—P

土層 攪乱—K

4 土層と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・赤彩



炉・被熱痕



黒色処理



繊維土器



土器 ●

土製品 ○

石器・石製品 □

鉄製品 △

硬化面 - - - - -

7 遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(3) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

8 「主軸」は、炉を持つ竪穴住居跡については炉を通る軸線とし、他の遺構については、長軸(長径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E)

9 遺構一覧表における計測値は、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	いちのだいやしきいせき							
書名	市ノ台屋敷遺跡							
副書名	一般国道6号牛久土浦バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第198集							
著者名	島田 和宏							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
いちの 市ノ だいや しき 敷 い 遺 跡	いばら 茨城県 つくば し おお あぎ いち の だ い 野台 あぎ やし き 字屋敷 90番地 の5ほか	08220 455	36度 01分 15秒 (36度 01分 26秒)	140度 08分 08秒 (140度 07分 56秒)	18 } 20m	20010401 } 20010731 20010901 } 20010930 20020401 } 20020515	7,279.01㎡	一般国道6号 牛久土浦バイ パス改築工事 に伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市ノ台屋敷 遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡	10軒	土師器(坏・椀・高坏・埴・甕), 土製品(球状土錘), 石製品(砥石)	古墳時代中期の集落跡及び中・近世の掘立柱建物跡・井戸跡が検出されている。		
			土坑	1基				
		中・近世	掘立柱建物跡	1棟			陶磁器(碗・皿・德利), 土師質土器(小皿, 焙烙), 古銭(寛永通寶)	
	方形竪穴遺構		1基					
その他	旧石器	井戸跡	2基	角錐状石器				
		縄文			縄文土器(深鉢)			
	不明	方形竪穴遺構	2基	陶磁器(碗・皿), 土師質土器(焙烙, 火舎)				
		土坑	64基					

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土坑	35
2 中・近世の遺構と遺物	36
(1) 掘立柱建物跡	36
(2) 方形竪穴遺構	37
(3) 井戸跡	38
3 その他の遺構と遺物	41
(1) 方形竪穴遺構	41
(2) 土坑	42
(3) 遺構外出土遺物	48
第4節 まとめ	51

写真図版

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

市ノ台屋敷遺跡は、茨城県つくば市大字市野台字屋敷90番地の5ほかに所在し、小野川右岸の筑波・稲敷台地と呼ばれる台地上に立地している。

この台地は、北側を八溝山地の南端に位置する筑波山を中心とする筑波山塊と接し、東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と西側を南流する小貝川によって挟まれた、標高20～25mほどの平坦な台地である。台地は花室川、蓮沼川、小野川などの中小河川の開析により、浅い谷津が数多く形成されている。地質的には、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3～5.0m）、褐色の関東ローム層（0.5～2.5m）が連続して堆積し、最上部は腐食土層となっている¹⁾。

当遺跡は、小野川の開析によって形成された台地縁辺部に立地し、台地の標高は18～21mである。台地は主に宅地・畑地・平地林として利用され、小野川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は、宅地・畑地・山林であった。

第2節 歴史的環境

市ノ台屋敷遺跡の所在する地域は、牛久沼周辺や小野川、稲荷川水系によって開析された台地上に位置し、数多くの遺跡が所在している（第2図）。ここでは、主に小野川、稲荷川流域の遺跡について述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、小野川、稲荷川を望む台地縁辺部に点在している。下大井遺跡〈2〉からは、ナイフ形石器、剥片が出土しており、石器製作跡の可能性が指摘されている²⁾。五十塚古墳群〈3〉は、小野川右岸に位置する古墳群であり、第5号墳の前方部周溝内から刃器が出土している³⁾。また、乙戸川と小野川に挟まれた台地上のヤツノ上遺跡⁴⁾〈4〉からは角錐状石器や搔器が、中久喜遺跡⁵⁾〈5〉からは、ナイフ形石器、剥片などが出土している。

縄文時代には、小野川・稲荷川流域の台地上に集落が形成されるようになる。小野川沿いでは、下大井遺跡、大井遺跡〈6〉、牛久市の馬場遺跡〈7〉、東山遺跡〈8〉などが所在する。稲荷川沿いの小茎貝塚〈9〉、天寶喜遺跡〈10〉は中期の大遺跡である⁶⁾。

弥生時代の遺跡は、当遺跡周辺では極めて少なく、高見原番外遺跡〈11〉、天寶喜C遺跡が確認されているだけである。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。当遺跡周辺の古墳時代の集落跡としては、小野川左岸に、東山遺跡、馬場遺跡、行人田遺跡〈12〉などが所在する。行人田遺跡は前期⁷⁾、東山遺跡は中期⁸⁾、馬場遺跡は中期から後期⁹⁾にかけての集落跡である。当遺跡の南方には、平成11・13年度に当財団により調査された下大井遺跡が所在し、中期から後期にかけての集落跡であることが確認されている¹⁰⁾。また、小野川・稲荷川両河川沿い及びその周辺には多くの古墳群が確認されている。当遺跡の南方には、下大井古墳群〈13〉、五十塚古墳群があり、五十塚古墳群は前方後円墳2基、円墳9基以上から形成されていることが確認されている¹¹⁾。さらに小野



第2図 周辺遺跡位置図 (国土地理院「谷田部」・「土浦」・「藤代」・「牛久」)

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
1	市ノ台屋敷遺跡	○			○		○	○	36	北中島遺跡		○		○			
2	下大井遺跡	○	○		○	○	○	○	37	北中島明神下遺跡		○					
3	五十塚古墳群				○				38	中山鹿島遺跡	○	○		○	○	○	○
4	ヤツノ上遺跡	○	○		○	○	○		39	菅間遺跡		○		○	○	○	
5	中久喜遺跡	○			○	○			40	郷中塚古墳群				○			
6	大井遺跡	○	○		○	○	○	○	41	稲荷山古墳群		○		○			○
7	馬場遺跡		○		○	○			42	孝学院遺跡		○				○	
8	東山遺跡		○		○	○			43	高見原A遺跡		○					○
9	小荃貝塚	○	○			○	○	○	44	小荃北遺跡		○		○		○	○
10	天宝喜C遺跡	○	○	○	○		○	○	45	天宝喜貝塚		○				○	○
11	高見原番外遺跡		○	○	○				46	高見原B遺跡		○		○			
12	行人田遺跡				○	○		○	47	小荃南遺跡		○		○	○	○	○
13	下大井古墳群				○				48	天宝喜西遺跡		○					
14	下横場古墳群				○				49	大久保遺跡				○			
15	赤塚駒形古墳群				○				50	細谷原遺跡		○		○			
16	梶内向山遺跡		○		○	○	○	○	51	坂本遺跡		○					
17	樋の沢久保遺跡	○	○		○		○	○	52	山際A遺跡		○					
18	稲岡遺跡	○					○	○	53	道山古墳群				○			
19	高崎城跡				○	○	○	○	54	守子橋遺跡	○						
20	館野久保遺跡				○			○	55	宮坂古墳				○			
21	赤塚八木遺跡				○				56	道山下遺跡				○			
22	赤塚末山遺跡				○			○	57	山際B遺跡		○					
23	赤塚駒形遺跡				○				58	稲荷下遺跡				○			
24	赤塚前口遺跡				○				59	古屋敷遺跡				○			
25	梶内遺跡				○				60	塚原山古墳群				○			
26	赤塚原前遺跡						○	○	61	中宿遺跡				○			
27	榎戸大境遺跡								62	根柄遺跡		○		○			
28	南中妻門遺跡								63	小屋前遺跡				○			
29	南中妻新田後遺跡								64	ヤツノ上古墳				○			
30	新牧田遺跡				○				65	中下根遺跡	○	○		○	○		
31	下横場遺跡				○				66	愛宕脇古墳				○			
32	下横場西谷津遺跡		○						67	梨ノ木遺跡				○			
33	稲岡八方塚群						○	○	68	宮ノ台遺跡		○		○			
34	下横場山王前遺跡		○					○	69	琴塚古墳				○			
35	市ノ台葉ノ木台遺跡				○				70	水落下遺跡				○			

川の上流域には、^{しもよこば}下横場古墳群〈14〉、^{あかつかこまがた}赤塚駒形古墳群〈15〉があり、平成12・13年度に当財団の調査により、^{かじうちむこうやま}二重の堀を持つ居館が確認された梶内向山遺跡〈16〉との関連が想起される。

奈良・平安時代の遺跡は、近年の発掘調査の増加にもかかわらず、古墳時代に比べると少なく、小野川流域では、下大井遺跡、大井遺跡、梶内向山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡などが確認されているだけである。

中世以降で確認されている遺跡の大部分は、城館跡または縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であり、それらは小野川や稲荷川沿いの台地の縁辺部に位置している。下大井遺跡からは、中世の塚と土壙墓が1基ずつ検出され、陶器・土師質土器・古銭などが出土している¹²⁾。樋の^ひ沢久保遺跡〈17〉・^{いなおか}稲岡遺跡〈18〉は平成12年度に当財団により発掘調査された結果、樋の沢久保遺跡は近世を中心とした屋敷跡と考えられており¹³⁾、稲岡遺跡は中世末期から近世初期にかけての墓域であることが確認されている¹⁴⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』 共立出版 1986年10月
- 2) 川津法伸「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集 茨城県教育財団 2001年3月
- 3) 荃崎町史編さん委員会『荃崎町史』 荃崎町 1994年3月
- 4) 小高五十二「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ） ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 茨城県教育財団 1993年3月
- 5) 荒井保雄「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ） 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 茨城県教育財団 1993年9月
- 6) 註3)に同じ
- 7) 白田正子「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ） 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集 茨城県教育財団 1996年3月
- 8) 松浦 敏「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ） 東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集 茨城県教育財団 1995年9月
- 9) 註7)に同じ
- 10) 註2)に同じ
- 11) 註3)に同じ
- 12) 註2)に同じ
- 13) 茂木悦男「樋の沢久保遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第186集 茨城県教育財団 2002年3月
- 14) 茂木悦男「稲岡遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第187集 茨城県教育財団 2002年3月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編）』茨城県教育委員会 平成13年3月
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地図編）』茨城県教育委員会 平成13年3月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

市ノ台屋敷遺跡は、小野川右岸の標高18~20mの台地上に位置している。平成13・14年度の調査面積は7,279.01㎡で、古墳時代の竪穴住居跡10軒、土坑1基、中・近世の掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構1基、井戸跡2基、時期不明の方形竪穴遺構2基、土坑64基が検出された。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に26箱出土している。出土した遺物の大部分は、竪穴住居跡から出土した土師器（坏・椀・甕・甑）である。また、井戸跡からは陶磁器（碗・皿・徳利）、土師質土器（小皿・焙烙）が出土している。その他の遺物として、角錐状石器、縄文土器片、砥石、陶磁器、古銭などが出土している。

第2節 基本層序

調査区内（C2 a5区）にテストピットを設定し、深さ約2.5mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した（第3図）。

第1層は、暗褐色の表土層で、粘性は弱く、しまりは弱い。層厚は30~43cmである。

第2層は、褐色のローム層で、粘性は弱く、しまりは強い。層厚は25~45cmである。

第3層は、褐色のローム層で、粘性は普通で、しまりは強い。層厚は26~42cmである。

第4層は、褐色のローム層で、粘性・しまりとも強い。層厚は10~18cmである。

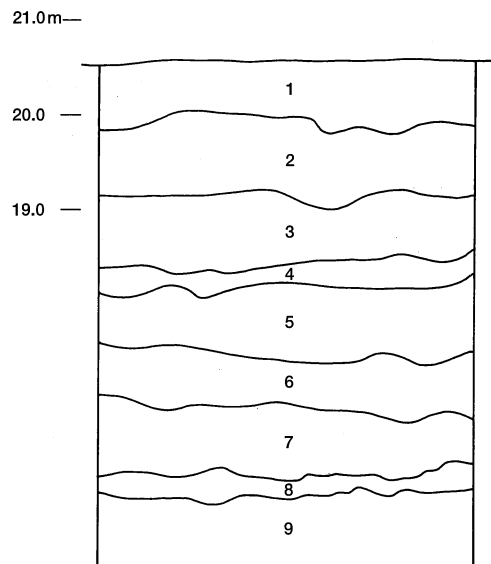
第5層は、明褐色のローム層で、粘性・しまりとも強く、光沢がある。層厚は27~42cmである。

第6層は、褐色のローム層で、粘性・しまりとも強く、緻密である。層厚は23~34cmである。

第7層は、褐色のローム層で、粘性・しまりとも強く、非常に緻密である。層厚は22~40cmである。

第8層は、褐色の粘土層への漸移層で、粘性・しまりとも極めて強く、鉄分を微量含んでいる。層厚は6~20cmである。

第9層は、にぶい黄褐色の粘土層で、粘性・しまりとも極めて強い。遺構は、第2層上面で確認され、第2層から第3層にかけて掘り込まれている。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡10軒、土坑1基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第4～6図）

位置 調査区東部のB4a2区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 東部が調査区域外に位置する。

規模と形状 長軸4.37m、短軸3.50mほどの長方形で、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は23cmほどで、ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。確認できた範囲内では、西コーナー部を除いて踏み固められている。また、断面U字形の壁溝が壁下を巡っている。なお、壁際からは焼土塊が検出されている。

焼土塊土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 5 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

炉 3か所。炉1・2は住居のほぼ中央部に付設されている。炉1は長径60cm、短径45cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸とほぼ直交している。炉2は長径65cm、短径50cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸と近似している。炉3は北西壁寄りに付設されている。長径70cm、短径55cmの楕円形で、長径方向は住居の主軸とほぼ一致している。いずれの炉も地床炉であり、炉床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。また、いずれの炉床面とも、床として使用された痕跡は確認されていない。

炉土層解説（炉1～3共通）

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 極暗褐色 焼土ブロック中量 | 4 褐色 被熱したロームの硬化層 |
| 2 赤褐色 ロームの赤変硬化層 | 5 暗褐色 焼土粒子少量 |
| 3 明赤褐色 ロームの赤変硬化層 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量 |

ピット 3か所。P1～P3は深さ60～70cmで、規模と配置から主柱穴である。東コーナー部に想定される主柱穴は、調査区域外に位置していると考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

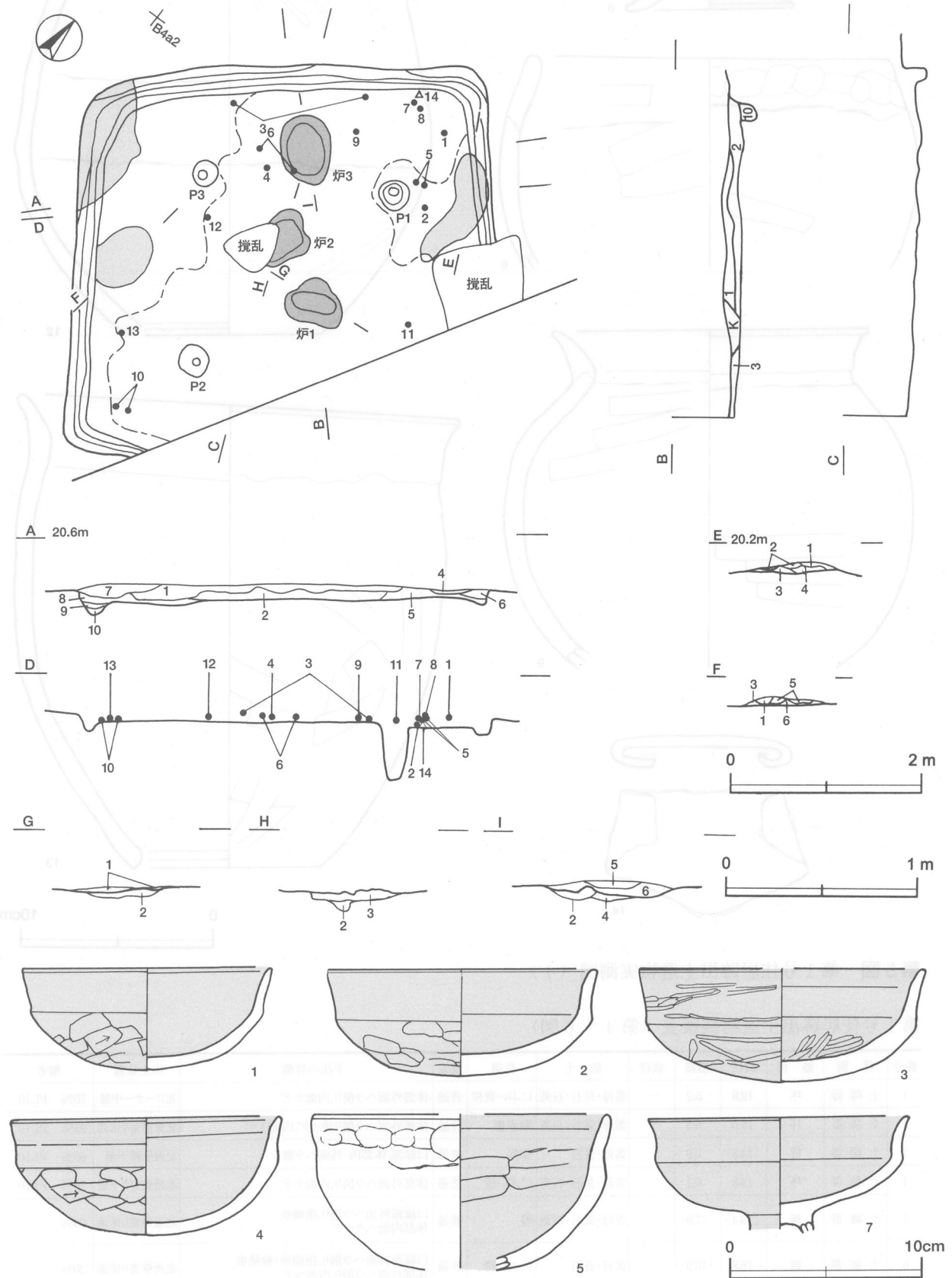
土層解説

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子中量 | 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 ロームブロック中量 | 10 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

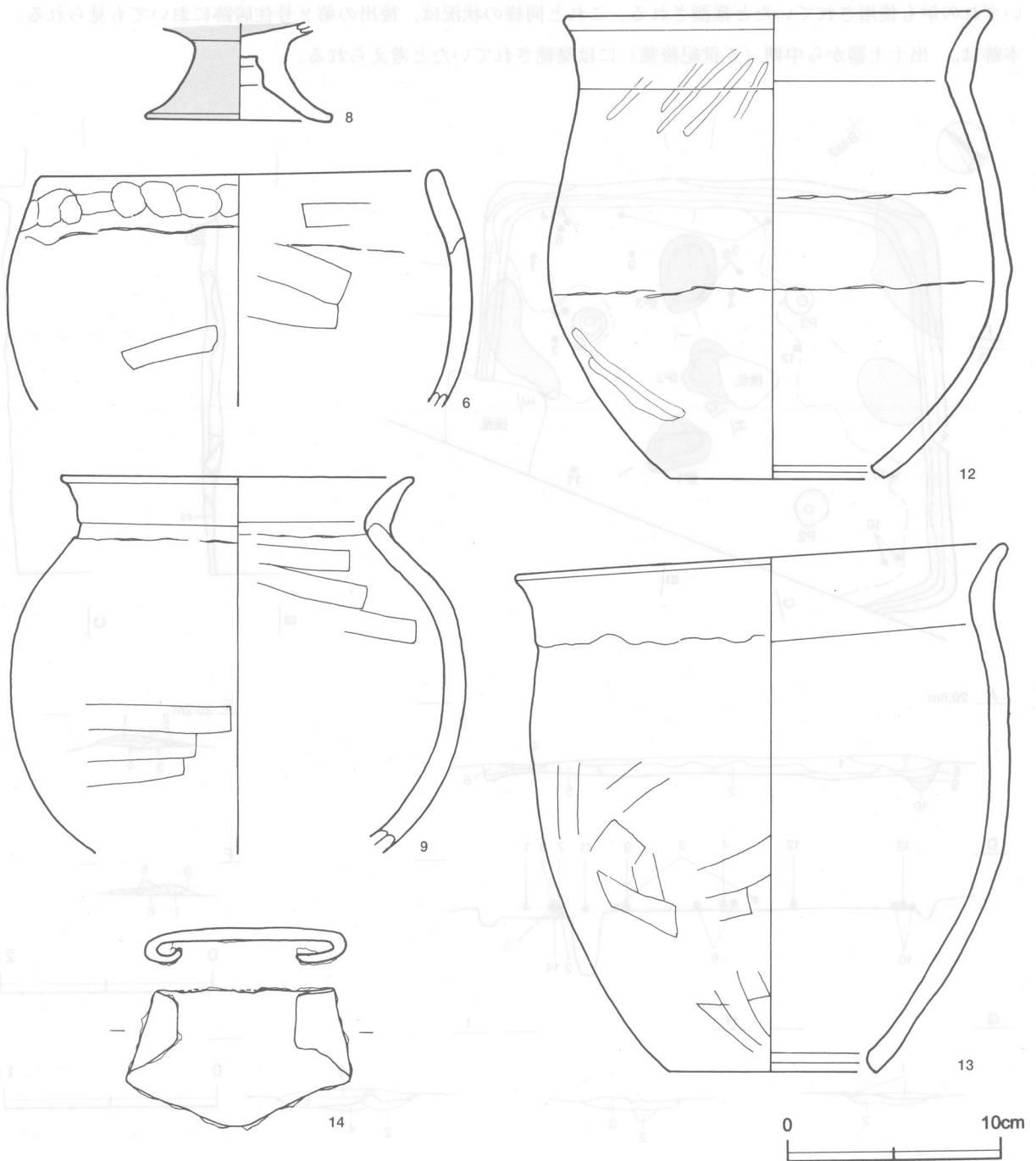
遺物出土状況 土師器片1102点（坏・椀類321、甕・甑類781）、鉄器1点（鋤先）が出土している。土器の底部もしくは口縁部の破片から推定される個体数は、坏・椀類9点、高坏2点、甕・甑類8点である。これらは、北コーナー部付近の床面直上から破碎された状況でまとまって出土しており、本跡の廃絶後、間もない時期に投棄されたと考えられる。

所見 覆土中や床面からは炭化材が検出されていないが、壁際から焼土塊が検出されている状況は、本住居が焼失した可能性を示している。また本住居には、複数の炉が付設されている。その検出状況から、廃絶時には

いずれの炉も使用されていたと推測される。これと同様の状況は、後出の第2号住居跡においても見られる。
 本跡は、出土土器から中期（5世紀後葉）には廃絶されていたと考えられる。



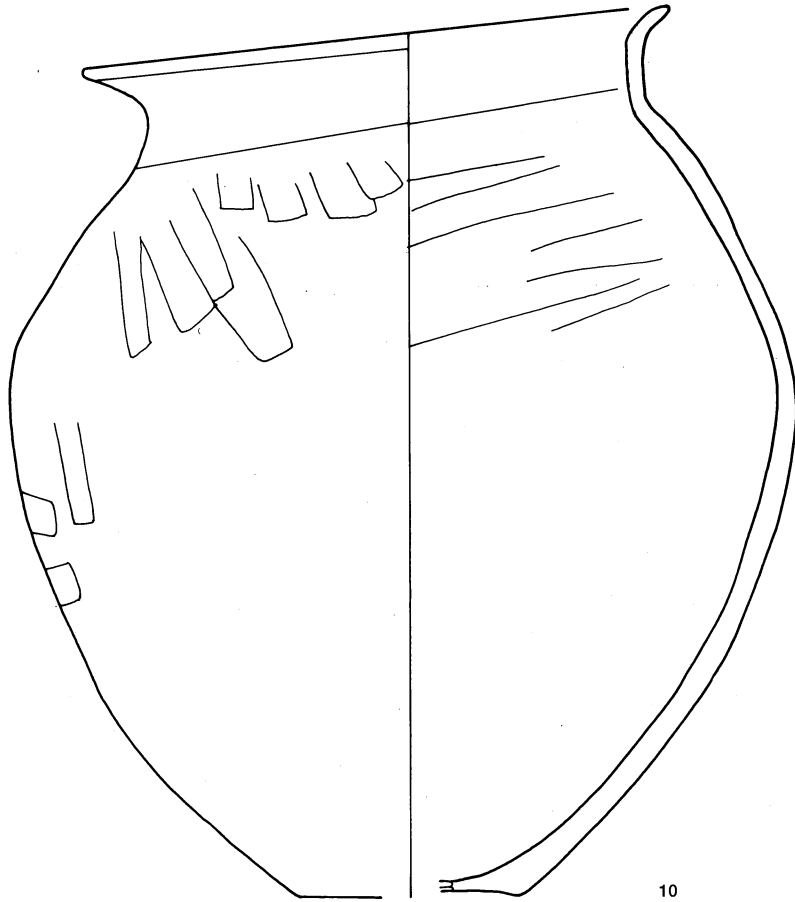
第4図 第1号住居跡・出土遺物実測図



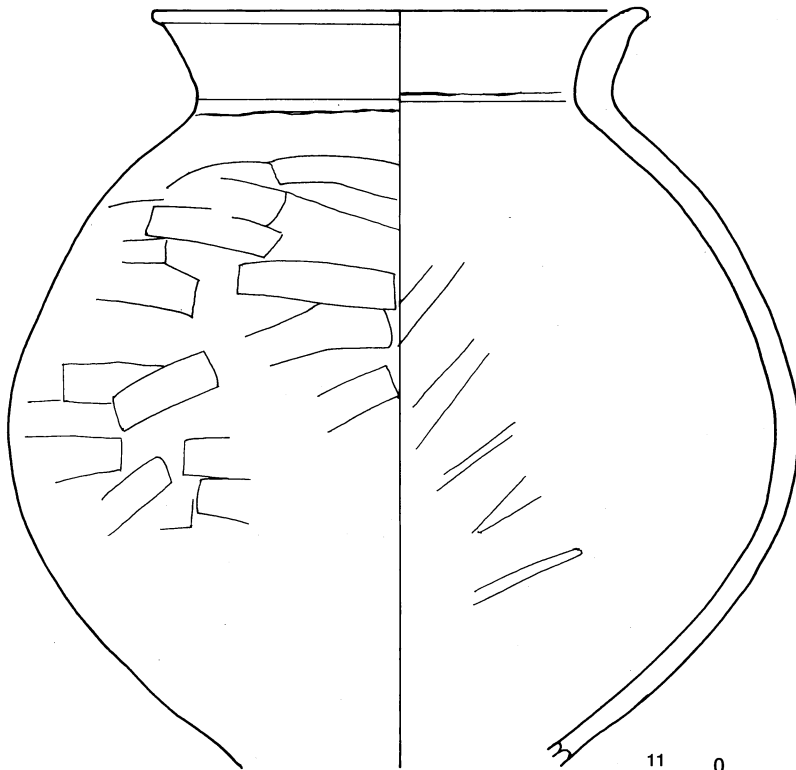
第5図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

第1号住居跡出土遺物観察表(第4~6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.8	5.2	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ	北コーナー中層	70% PL10
2	土師器	坏	14.0	5.5	—	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ	北東壁寄り床面	95% PL10
3	土師器	坏	[14.8]	5.9	—	雲母・長石	赤褐	普通	口縁部,体部内・外面ヘラ磨き	北西壁際下層	60% PL10
4	土師器	坏	13.8	6.1	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ	北西壁寄り下層	90% PL10
5	土師器	椀	[15.4]	(7.9)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部外面ヘラ削り,指頭痕 体部内面ヘラナデ	北東壁寄り床面	20%
6	土師器	鉢	18.8	(10.9)	—	雲母・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ削り,指頭痕・輪積痕 体部外面ヘラ削り,内面ナデ	北西壁寄り床面	20%
7	土師器	高坏	13.6	(5.7)	—	雲母・長石	橙	普通	坏部・脚部磨耗のため調整不明	北コーナー下層	60%



10



11



第6图 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	高坏	—	(4.6)	8.6	雲母・長石・石英	橙	普通	脚部外面ナデ	北コーナー床面	40%
9	土師器	甕	16.8	(17.7)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ	北西壁寄り下層	60%
10	土師器	甕	23.0	35.4	[8.5]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ	南コーナー床面	95% PL10
11	土師器	甕	19.6	(30.0)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	北東壁寄り床面	60% 二次焼成
12	土師器	甌	19.6	21.9	9.6	雲母・長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き,内面輪積み痕	中央部下層	70% PL10
13	土師器	甌	22.6	24.7	9.6	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明	南西壁際床面	95% PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	鋤先	(6.0)	(10.2)	0.2	(65.3)	鉄	刃先「V」字状 着柄部両端折り曲げ	北コーナー床面	PL14

第2号住居跡 (第7・8図)

位置 調査区東部のB3 c6区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.30m, 短軸4.10mの長方形で、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は25cmほどで、ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としており、中央部が踏み固められている。また、断面U字形の壁溝が、北西壁及び南東壁の一部を除いて壁下を巡っている。

炉 2か所。炉1は、北西壁寄りに付設されている。長径95cm, 短径85cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸と斜交している。炉2は、住居のほぼ中央部に付設されている。長径80cm, 短径70cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸とほぼ直交している。炉1・2ともに地床炉であり、その炉床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。また、いずれの炉床面とも、床として使用された痕跡は確認されていない。

炉土層解説 (炉1・2共通)

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 赤褐色 ロームの赤変硬化層 | 2 褐色 被熱したロームの硬化層 |
|-----------------|------------------|

ピット 検出されなかった。

貯蔵穴 長径80cm, 短径60cmの楕円形で、深さは20cmほどで、北コーナー部に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

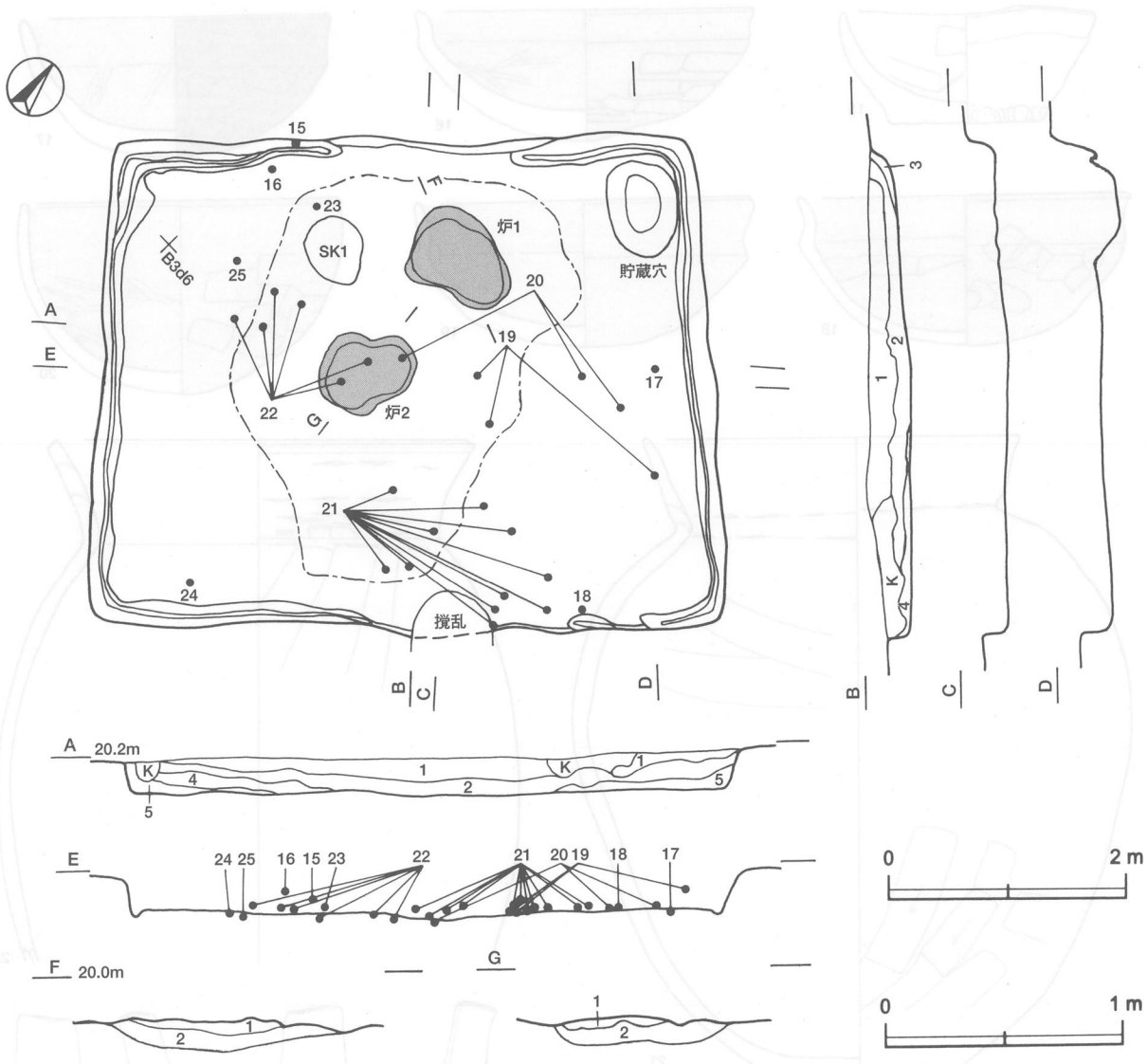
覆土 5層に分層される。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片666点(坏・椀類199, 甕・甌類467), 石器3(砥石3)が出土している。土器の底部もしくは口縁部の破片から推定される個体数は、坏・椀類7点, 甕・甌類5点である。図示したものの中で、破片で出土しているものは、床面近くから出土しており、19~23が該当する。また、ほぼ完形で出土している15・16は、壁際の覆土土層図の第5層中から斜位の状態で出土している。これらは本跡の廃絶後、間もない時期に廃棄されたと考えられる。

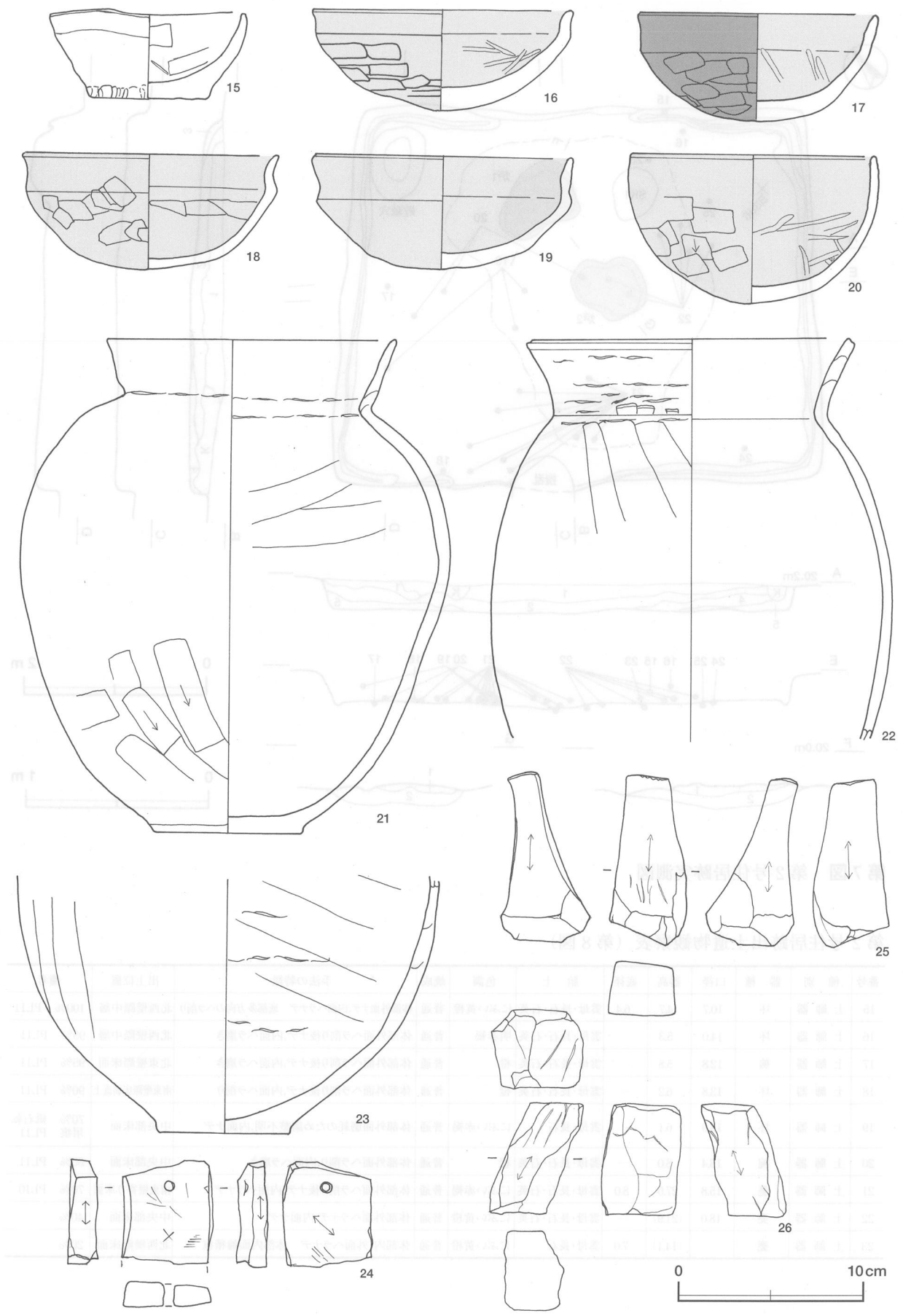
所見 本住居には複数の炉が付設されており、その検出状況から廃絶時には、いずれの炉も使用されていたと推測される。これと同様の状況は、前出の第1号住居跡においても見られる。時期は、出土土器から中期(5世紀後葉)と考えられる。



第7図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	10.7	4.7	6.4	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ナデ,内面ヘラナデ 底部多方向のヘラ削り	北西壁際中層	100% PL11
16	土師器	坏	14.0	5.3	—	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ磨き	北西壁際中層	95% PL11
17	土師器	椀	12.8	5.8	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ磨き	北東壁際床面	95% PL11
18	土師器	坏	13.8	6.2	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ削り	南東壁際床面直上	90% PL11
19	土師器	坏	13.9	6.1	—	雲母・長石	にぶい赤褐	普通	体部外面磨耗のため調整不明,内面ナデ	中央部床面	70% 砥石転用痕 PL11
20	土師器	椀	13.4	8.0	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラ磨き	中央部床面	80% PL11
21	土師器	甕	15.8	27.0	8.0	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ	南東壁寄り床面	70% PL10
22	土師器	甕	18.0	(21.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナデ,内面ナデ	中央部床面	40%
23	土師器	甕	—	(14.1)	7.0	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラナデ 体部内面輪積痕	北西壁際床面	20%



第8图 第2号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	砥石	(5.7)	5.0	1.7	(80.0)	凝灰岩	砥面4面 孔径0.5cm	南コーナー床面	PL14
25	砥石	(9.1)	5.0	4.2	(184.6)	凝灰岩	砥面4面	西部床面	
26	砥石	6.0	(5.1)	4.2	(140.6)	凝灰岩	砥面2面	東部確認面	

第3号住居跡（第9・10図）

位置 調査区東部のB3 d9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸5.60m，短軸4.60mの長方形で，主軸方向はN-53°-Wである。壁高は55～60cmほどで，ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としており，P5から炉の周辺にかけての中央部が踏み固められている。P5の周辺には，高さ5cmほどの馬蹄形状の高まりがみられる。また，断面U字形の壁溝が，西コーナー部を除いて壁下を巡っている。壁際からは，焼土塊が検出されている。

焼土塊土層解説

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量，焼土ブロック微量 | 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック少量 | |

炉 P1とP4を結ぶ線よりも，北西壁寄りに付設されている。長径90cm，短径50cmの不整楕円形で，長径方向は住居の主軸と一致している。床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉で，炉床面は火熱を受けて赤変硬化し，凹凸が著しい。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------|
| 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | 3 赤褐色 ロームの赤変硬化層 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 褐色 被熱したロームの硬化層 |

ピット 5か所。P1～P4は，深さ75～80cmで，規模と配置から支柱穴である。P5は南東壁寄りの中央に位置しており，出入口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 長軸95cm，短軸60cmの隅丸長方形で，深さは25cmほどで，東コーナー部に位置している。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色 ロームブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |

覆土 10層に分層される。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており，自然堆積である。

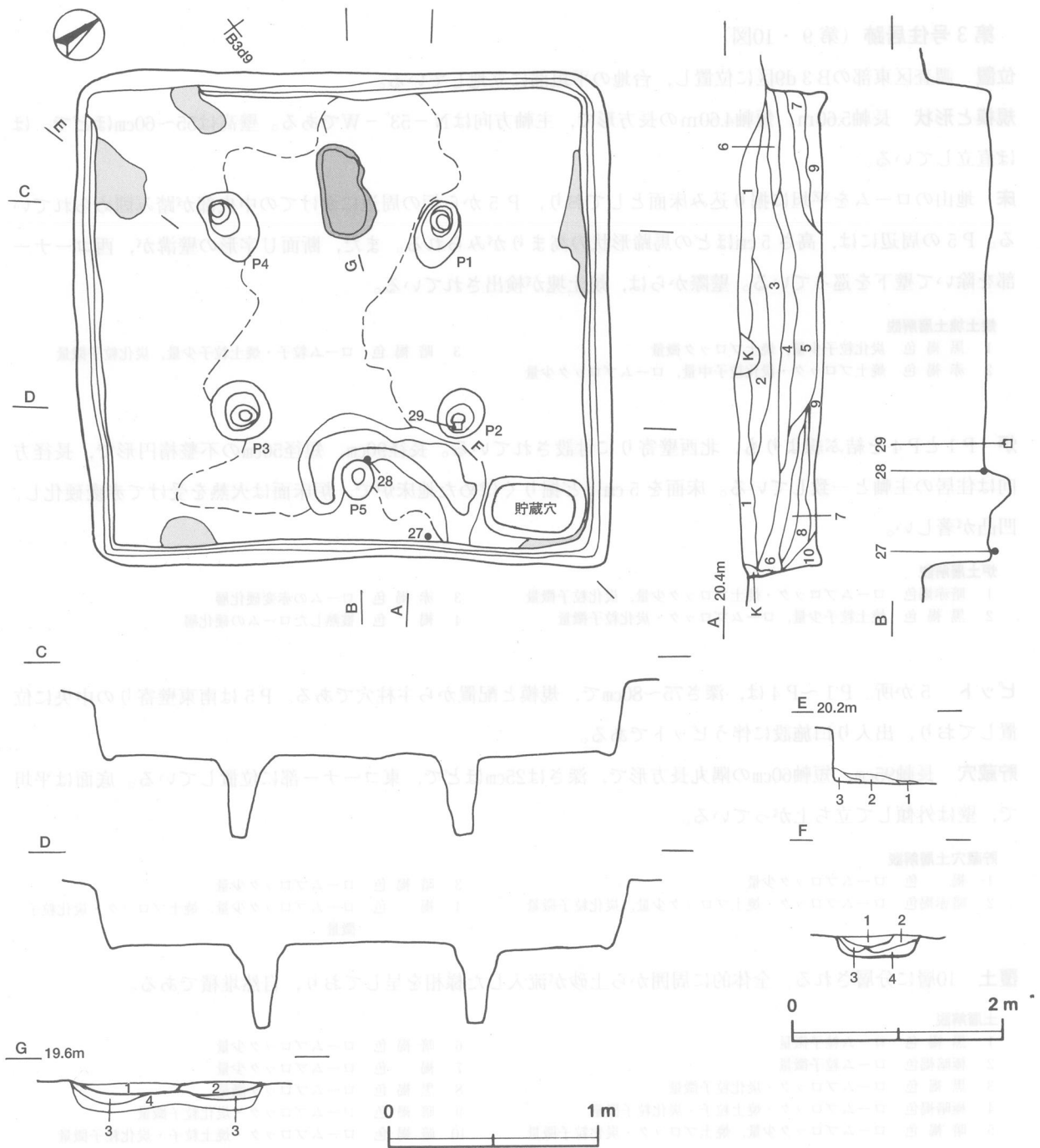
土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子微量 | 7 褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

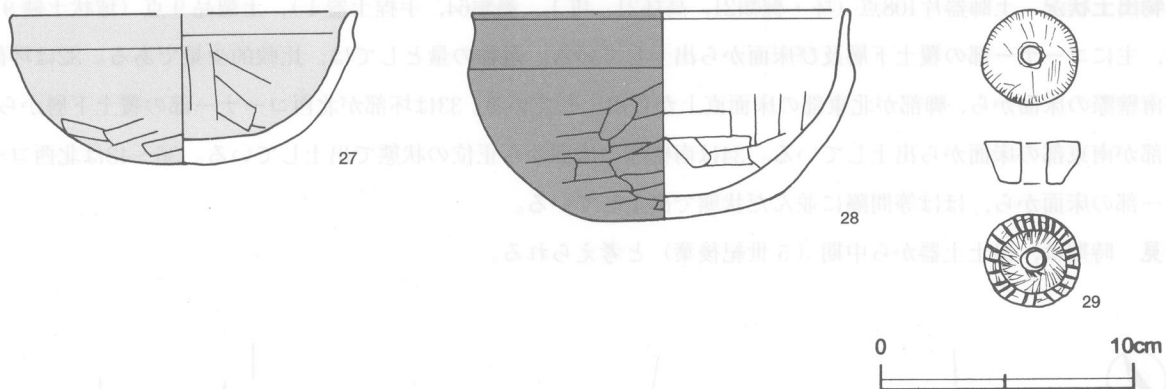
遺物出土状況 土師器片148点（坏・椀類35，甕・甑類113），石器1（紡錘車）が，南東壁寄りの覆土下層を中心として出土している。遺物の量としては，比較的少量である。27・28はともに，床面から正位の状態出土している。

所見 壁際から焼土塊が検出されている状況は，本住居が焼失した可能性を示している。しかし検出された焼土塊の下の土層中及び貯蔵穴の覆土下層には，焼土粒子や炭化粒子が微量しか含まれておらず，本住居が廃絶

時に焼失したとは言い難い。また本跡は、出入口施設の一部と考えられる、馬蹄形状の高まりを持つ住居跡である。これと同様の形状は、後出の第8号住居跡においても見られる。時期は、出土土器から中期（5世紀後葉）と考えられる。



第9図 第3号住居跡実測図



第10図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
27	土師器	椀	[13.8]	6.0	—	雲母・長石	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ	南東壁際床面	80%
28	土師器	椀	15.0	8.2	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	南東壁寄り床面	100% PL11

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
29	紡錘車	3.8	1.6	0.7	29.8	滑石	側面に放射状の線刻 上・下面に微細な線刻	P 2 覆土中	PL14

第4号住居跡（第11・12図）

位置 調査区中央部のB2 d0区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.40m，短軸5.00mの方形で，主軸方向はN-20°-Wである。壁高は40cmほどで，ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としており，壁際を除いてよく踏み固められている。また，断面U字形の壁溝が，北西コーナー部を除いて壁下を巡っている。

炉 中央部の北壁寄りに付設されている。長径60cm，短径45cmの楕円形で，長径方向は住居の主軸とほぼ一致している。床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉で，炉床面は火熱を受けて赤変硬化し，凹凸が著しい。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量

2 赤褐色 ロームの赤変硬化層

ピット 4か所。P1～P3は，深さは31～59cmと均一ではないが，配置から支柱穴である。北西部に想定される支柱穴は，攪乱のため残存していない。P4は北西コーナー部に位置している。補助柱穴の可能性が考えられるが，他の支柱穴には補助柱穴が検出されていないため，性格は不明である。

覆土 12層に分層される。ブロック状に堆積している土層が見られることや，場所により堆積の順序が逆転している土層が見られるため，人為堆積である。

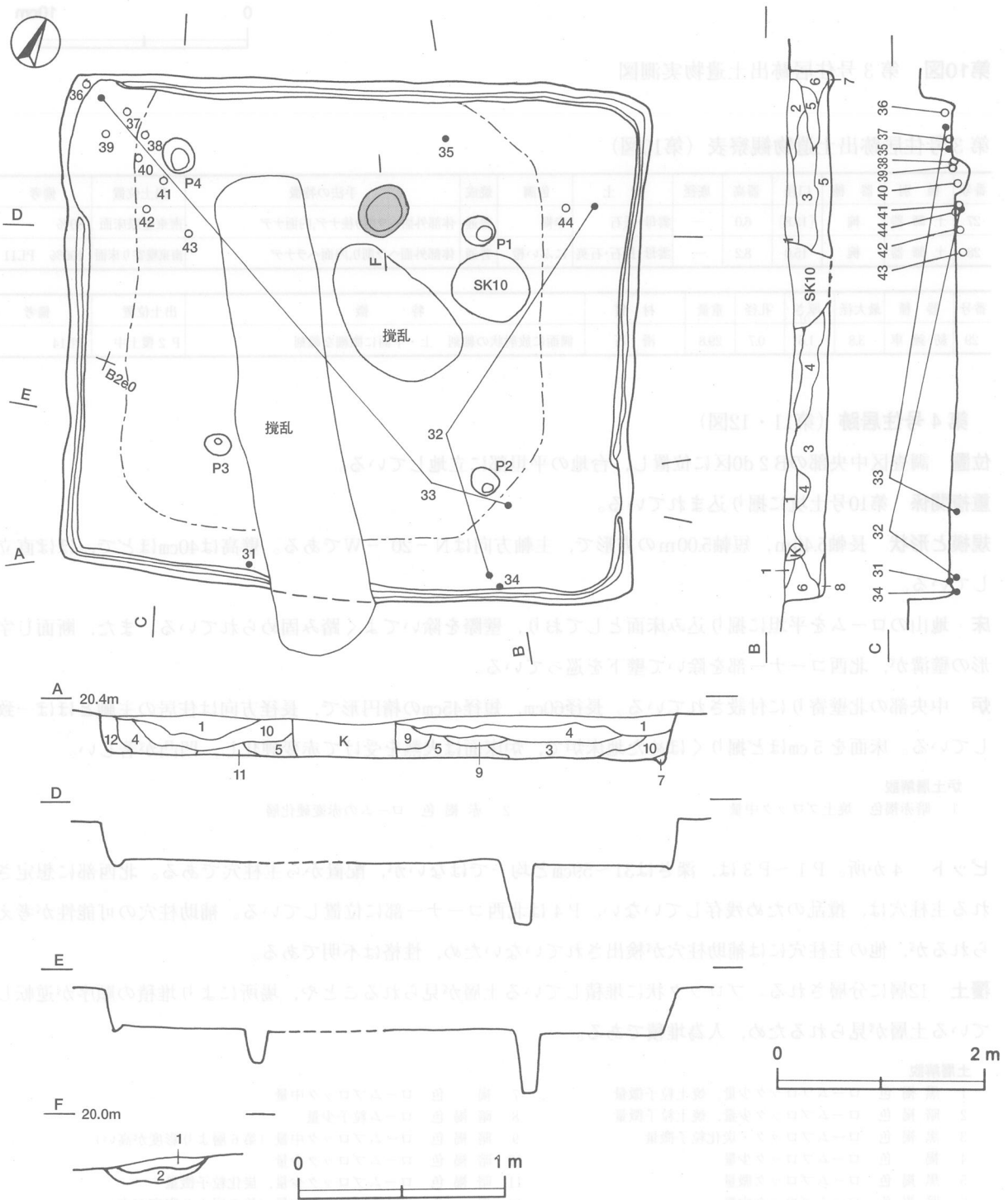
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量

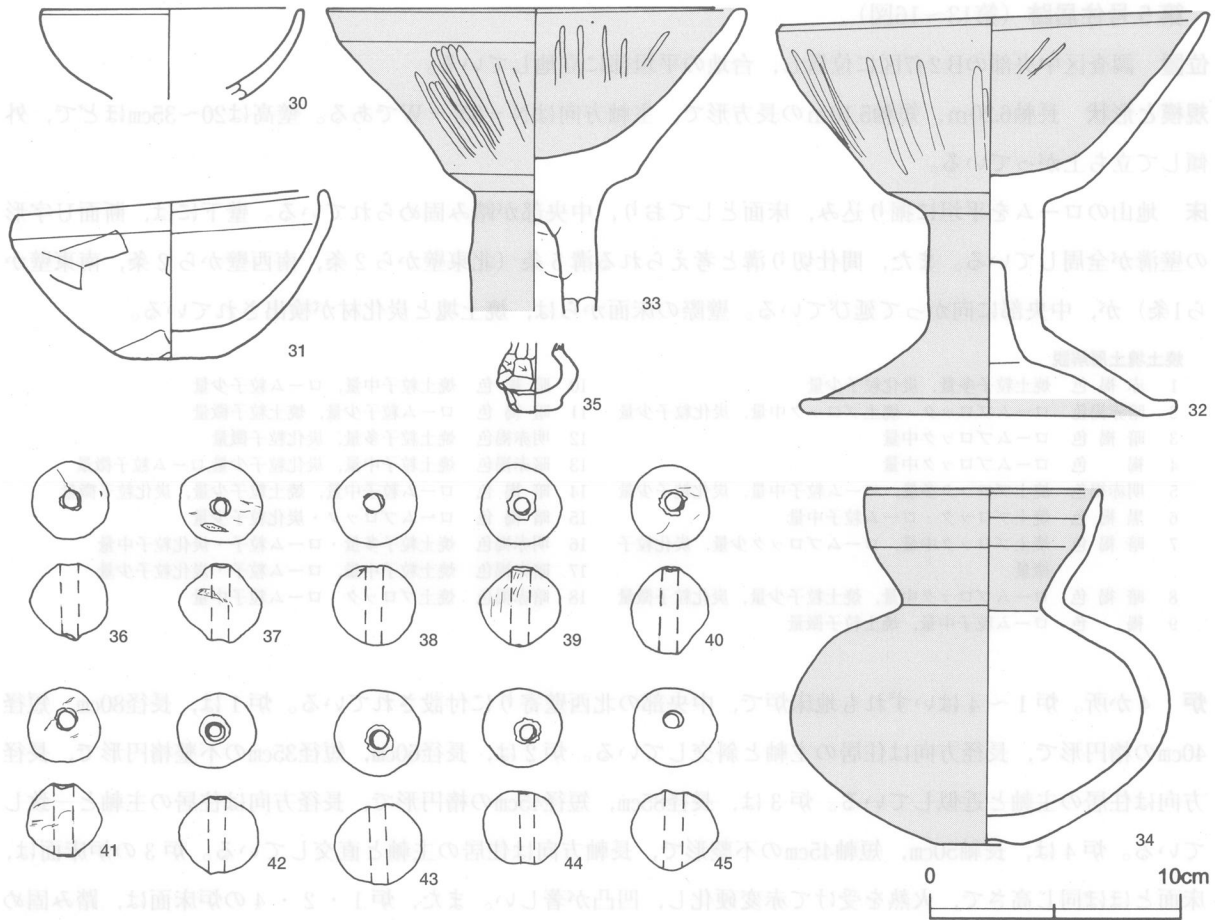
- 7 褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量（第6層より彩度が高い）
- 10 暗褐色 ロームブロック少量
- 11 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 12 褐色 ロームブロック中量（第7層より彩度が高い）

遺物出土状況 土師器片108点(坏・碗類21, 高坏21, 埴1, 甕類64, 手捏土器1), 土製品9点(球状土錘9)が, 主にコーナー部の覆土下層及び床面から出土している。遺物の量としては, 比較的少量である。32は坏部が南壁際の床面から, 脚部が北東部の床面直上から出土している。33は坏部が北西コーナー部の覆土下層から, 脚部が南東部の床面から出土している。34は南壁際の床面から正位の状態出土している。36~43は北西コーナー部の床面から, ほぼ等間隔に並んだ状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期(5世紀後葉)と考えられる。



第11図 第4号住居跡実測図



第12図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土師器	椀	10.4	(3.6)	—	雲母・長石	灰黄褐	普通	体部内・外面ナデ	南東部中層	50%
31	土師器	椀	12.2	6.6	3.8	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面剥離底部ヘラ削り	南壁際床面	100% PL11
32	土師器	高坏	16.7	16.0	15.0	雲母・長石・石英	橙	普通	坏部内・外面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ	北東部・南東部床面	95% PL12
33	土師器	高坏	16.6	(12.0)	—	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	坏部内・外面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ	北西コーナー下層・南東部床面	70%
34	土師器	罎	9.3	14.0	3.6	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ 底部ヘラ削り	南壁際床面	100% PL12
35	土師器	手捏土器	—	(2.8)	2.2	長石・石英	暗灰黄	普通	体部外面ヘラ削り	北壁際下層	80%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
36	球状土錘	3.1	3.0	0.6	22.0	土製	ナデ, 片面穿孔	北西角下層	
37	球状土錘	3.2	3.1	0.5	25.0	土製	ナデ, 片面穿孔	北西角床面直上	
38	球状土錘	3.2	3.2	0.7	28.2	土製	ナデ, 片面穿孔	北西角床面直上	
39	球状土錘	3.1	3.2	0.7	28.7	土製	ナデ, 片面穿孔	北西角床面	
40	球状土錘	3.1	3.4	0.7	30.8	土製	ナデ, 片面穿孔	北西角床面	
41	球状土錘	2.9	2.8	0.7	22.8	土製	ナデ, 片面穿孔	北西部床面	
42	球状土錘	3.2	3.1	0.7	24.8	土製	ナデ, 片面穿孔	北西部床面	
43	球状土錘	3.4	3.2	0.7	34.2	土製	ナデ, 片面穿孔	北西部床面	
44	球状土錘	3.1	2.9	0.7	27.1	土製	ナデ, 片面穿孔	北東部床面	
45	球状土錘	3.4	2.9	0.7	29.9	土製	ナデ, 片面穿孔	確認面	

第5号住居跡（第13～16図）

位置 調査区中央部のB2f7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸6.20m、短軸5.10mの長方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は20～35cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 地山のロームを平坦に掘り込み、床面としており、中央部が踏み固められている。壁下には、断面U字形の壁溝が全周している。また、間仕切り溝と考えられる溝5条（北東壁から2条、南西壁から2条、南東壁から1条）が、中央部に向かって伸びている。壁際の床面からは、焼土塊と炭化材が検出されている。

焼土塊土層解説

1 赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量	10 暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	12 明赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量	13 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
5 明赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量	14 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量	15 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	16 明赤褐色	焼土粒子多量・ローム粒子・炭化粒子中量
8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	17 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
9 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	18 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量

炉 4か所。炉1～4はいずれも地床炉で、中央部の北西壁寄りに付設されている。炉1は、長径80cm、短径40cmの楕円形で、長径方向は住居の主軸と斜交している。炉2は、長径60cm、短径35cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸と近似している。炉3は、長径85cm、短径45cmの楕円形で、長径方向は住居の主軸と一致している。炉4は、長軸50cm、短軸45cmの不整形で、長軸方向は住居の主軸と直交している。炉3の炉床面は、床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。また、炉1・2・4の炉床面は、踏み固められて鈍い光沢があり、床面として使用された痕跡が認められる。その状況から、廃絶時には炉3が使用されていたと推測される。

炉土層解説（炉1～4共通）

1 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	4 赤褐色	ロームの赤変硬化層
2 褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量	5 明褐色	被熱したロームの硬化層
3 にぶい赤褐色	ロームの赤変硬化層		

ピット 6か所。P1～P4は、深さ30～40cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は南東壁寄りに位置しており、出入口施設に伴うピットである。P6は、間仕切り溝の端部に位置しているため、それに伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 径60cmほどの円形で、深さは60cmほどで、南コーナー部に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 黒褐色	炭化物中量、ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量	6 赤褐色	焼土粒子多量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	7 黒褐色	炭化物・焼土粒子少量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量		

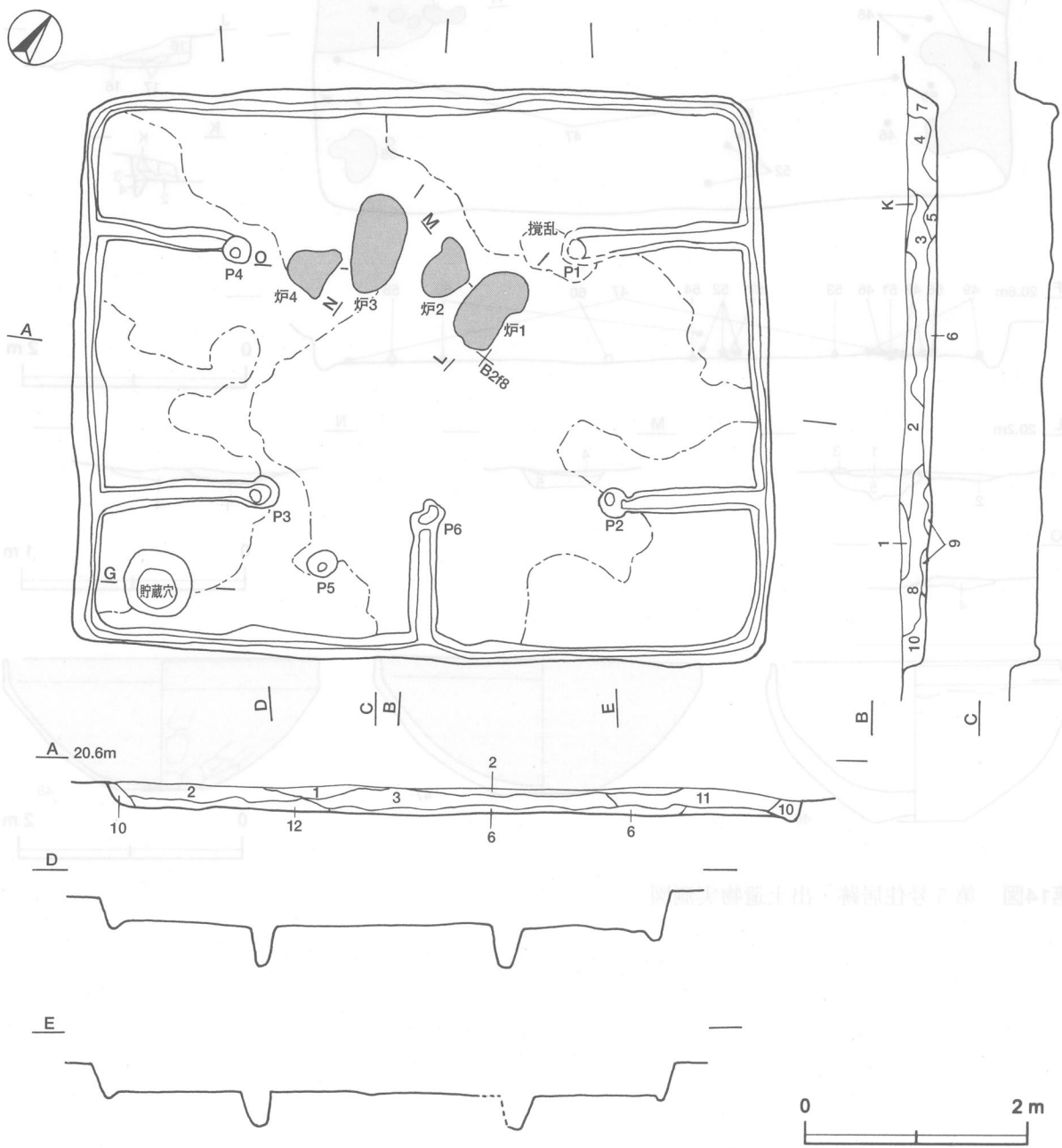
覆土 12層に分層される。ブロック状に堆積している土層が見られることや、場所により堆積の順序が逆転している土層が見られるため、人為堆積である。

土層解説

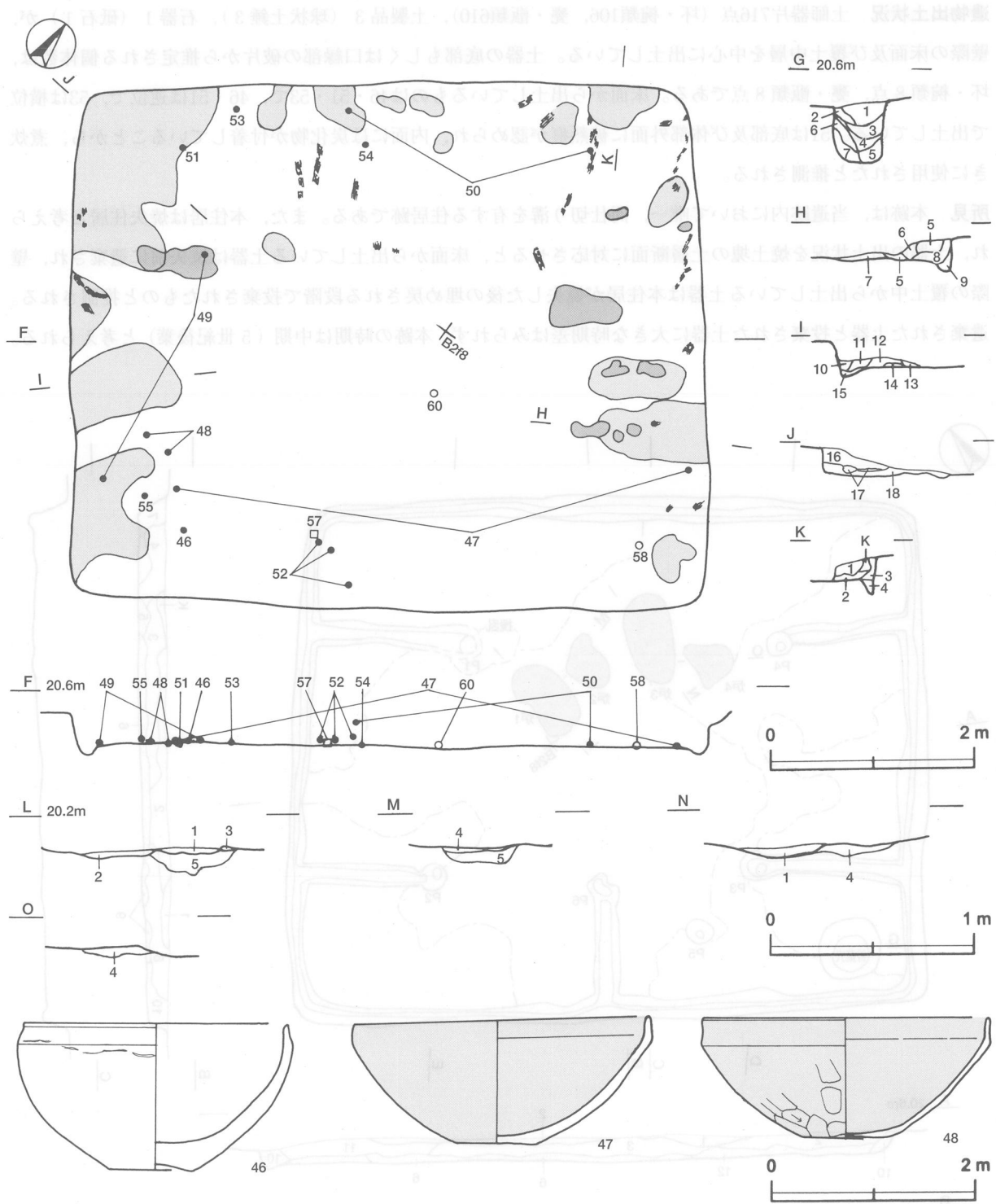
1 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	8 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	9 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片716点（坏・椀類106, 甕・甑類610）, 土製品3（球状土錘3）, 石器1（砥石1）が, 壁際の床面及び覆土中層を中心に出土している。土器の底部もしくは口縁部の破片から推定される個体数は, 坏・椀類8点, 甕・甑類8点である。床面から出土しているものは46・51・53で, 46・51は逆位で, 53は横位で出土している。51は底部及び体部外面に被熱痕が認められ, 内面には炭化物が付着していることから, 煮炊きに使用されたと推測される。

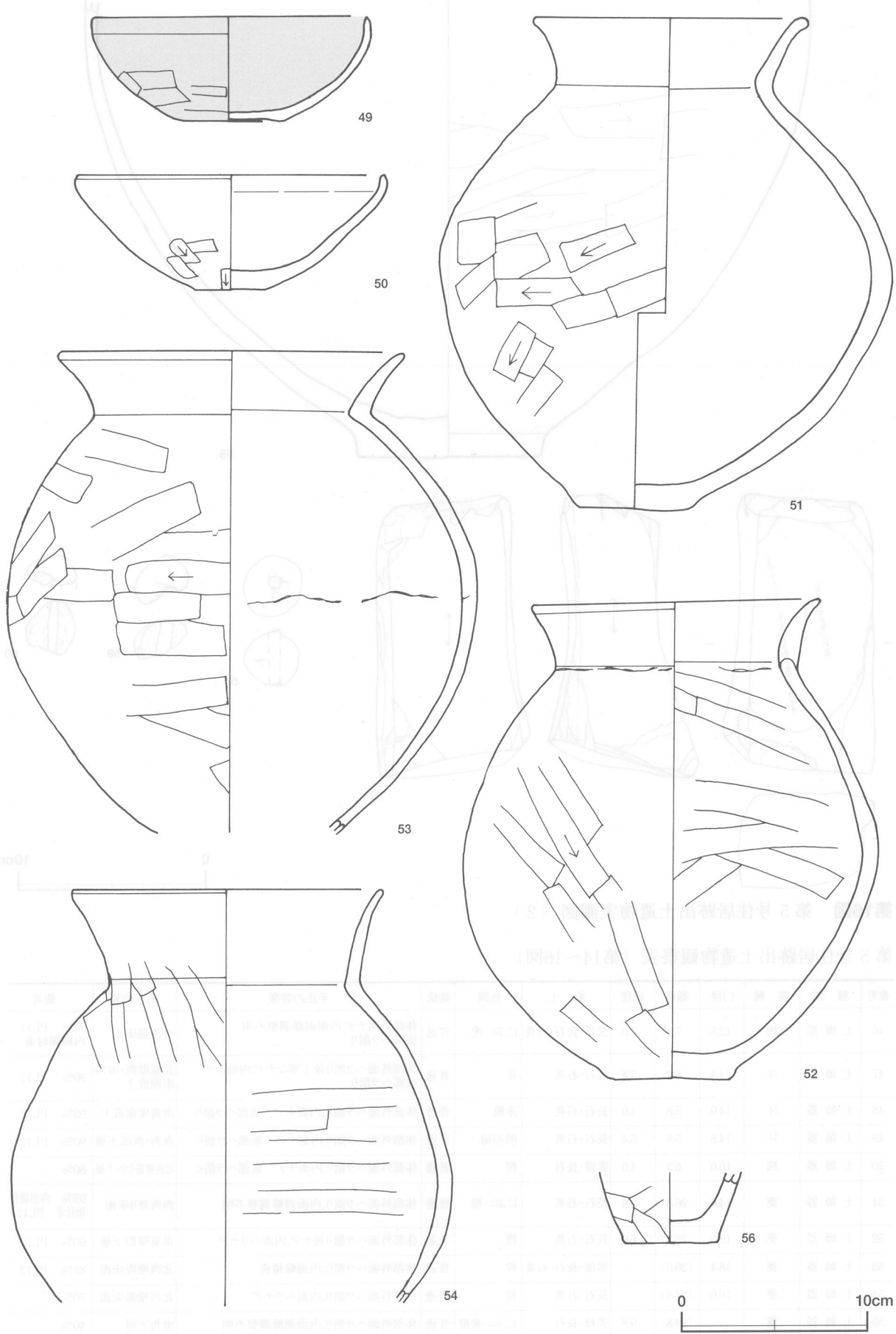
所見 本跡は, 当遺跡内において唯一, 間仕切り溝を有する住居跡である。また, 本住居は焼失住居と考えられ, 土器の出土状況を焼土塊の土層断面に対応させると, 床面から出土している土器は焼失前に遺棄され, 壁際の覆土中から出土している土器は本住居が焼失した後の埋め戻される段階で投棄されたものと推測される。遺棄された土器と投棄された土器に大きな時期差はみられず, 本跡の時期は中期（5世紀後葉）と考えられる。



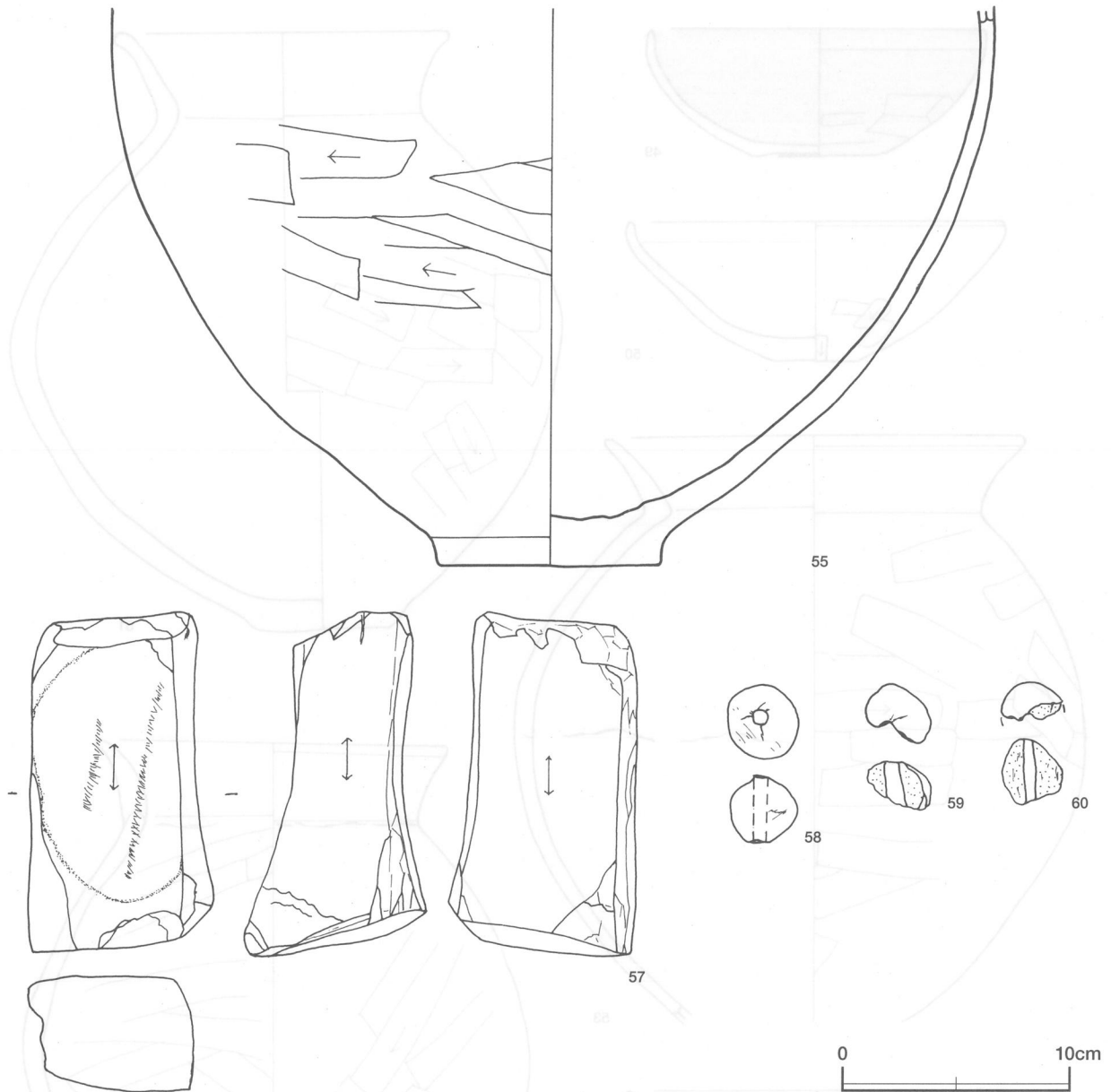
第13図 第5号住居跡実測図



第14図 第5号住居跡・出土遺物実測図



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

第5号住居跡出土遺物観察表(第14~16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
46	土師器	椀	12.8	7.1	4.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ナデ,内面剥離調整不明 底部ヘラ削り	南角部床面	95% PL11 内面煤付着
47	土師器	坏	14.4	6.2	3.8	長石・石英	赤	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ナデ 底部ヘラ削り	北東壁際・南角 床面直上	90% PL11
48	土師器	坏	14.0	5.8	4.0	長石・石英	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ 底部ヘラ削り	南角床面直上	95% PL12
49	土師器	坏	14.8	5.6	5.4	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ 底部ヘラ削り	南角・西部下層	90% PL12
50	土師器	椀	16.6	6.2	4.0	雲母・長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ 底部ヘラ削り	北西壁寄り中・下層	80%
51	土師器	甕	14.6	26.6	5.6	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明	西角寄り床面	95% 内面炭化物付着 PL12
52	土師器	甕	15.6	25.8	6.0	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ	南東壁際下層	90% PL12
53	土師器	甕	18.4	(26.0)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面輪積痕	北西壁際床面	85% PL13
54	土師器	甕	16.6	(21.5)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	北西壁際床面	70%
55	土師器	甕	—	(24.8)	9.8	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明	南角下層	40%
56	土師器	手捏土器	—	(3.8)	4.8	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ナデ	東部覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
57	砥石	(15.2)	8.3	5.1	(1180)	凝灰岩	砥石3面	南東壁寄り下層	PL14

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
58	球状土錘	3.3	3.0	0.6	25.9	土製	ナデ, 片面穿孔	東角下層	
59	球状土錘	(2.8)	(2.0)	[0.6]	(8.4)	土製	ナデ, 片面穿孔 1/4残存	南部中層	
60	球状土錘	(2.7)	(2.9)	[0.5]	(11.0)	土製	ナデ, 片面穿孔 1/2残存	中央部床面	

第6号住居跡 (第17図)

位置 調査区東部のB3b0区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.60m, 短軸2.40mの方形で、主軸方向はN-19°-Wである。壁高は24cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。壁際を除いてよく踏み固められている。また、壁溝は検出されていない。

炉 中央部の北壁寄りに付設された地床炉である。長径60cm, 短径45cmの楕円形で、長径方向は住居の主軸と斜交している。炉床面は、床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。

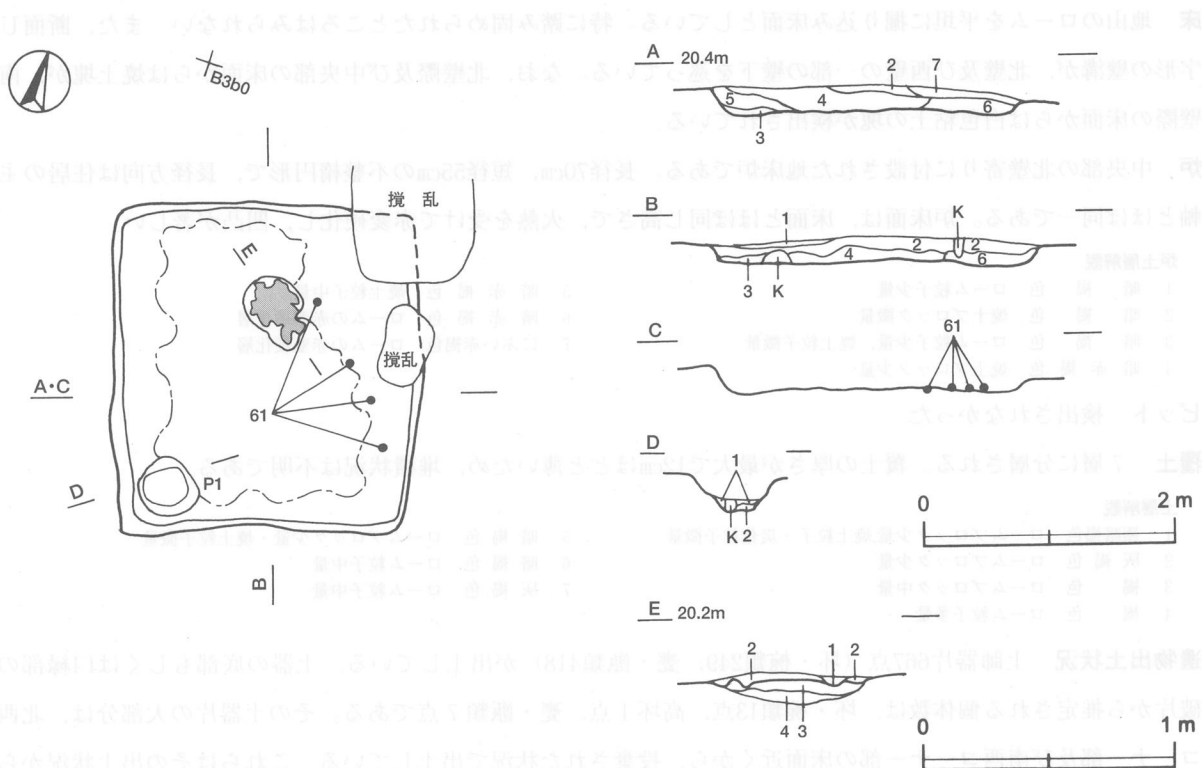
炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量
- 3 赤褐色 ロームの赤変硬化層
- 4 褐色 被熱したロームの硬化層

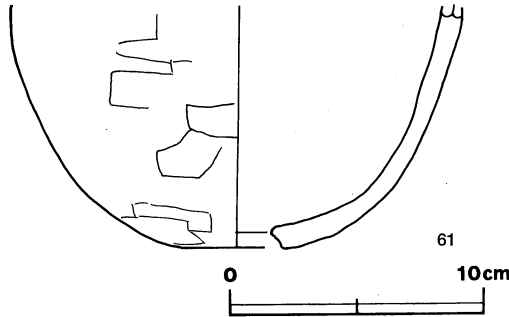
ピット 1か所。P1は径50cmほどの円形、深さ25cmほどで、南西コーナー部に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。位置及び形状から、貯蔵穴の可能性はある。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 炭化粒子微量



第17図 第6号住居跡実測図



覆土 7層に分層される。ロームブロックが各層に不規則に含まれており、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 極暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第18図 第6号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片211点(坏・椀類76, 甕・甑類134, 手捏土器1)が出土している。細片は全域から出土しているが、比較的大形の破片は東部の覆土下層及び床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期(5世紀後葉)と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
61	土師器	甑	—	(6.1)	3.6	雲母・長石	橙	普通	体部外面へら削り,内面剥離調整不明	東壁寄り下層	30%

第7号住居跡(第19・20図)

位置 調査区東部のB3g7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 東部の大部分が攪乱を受けている。

規模と形状 長軸7.80m, 短軸7.40mの方形で、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は12cmほどで、ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。特に踏み固められたところはみられない。また、断面U字形の壁溝が、北壁及び西壁の一部の壁下を巡っている。なお、北壁際及び中央部の床面からは焼土塊が、南壁際の床面からは白色粘土の塊が検出されている。

炉 中央部の北壁寄りに付設された地床炉である。長径70cm, 短径55cmの不整楕円形で、長径方向は住居の主軸とほぼ同一である。炉床面は、床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量
- 6 暗赤褐色 ロームの赤変硬化層
- 7 におい赤褐色 ロームの赤変硬化層

ピット 検出されなかった。

覆土 7層に分層される。覆土の厚さが最大で12cmほどと薄いので、堆積状況は不明である。

土層解説

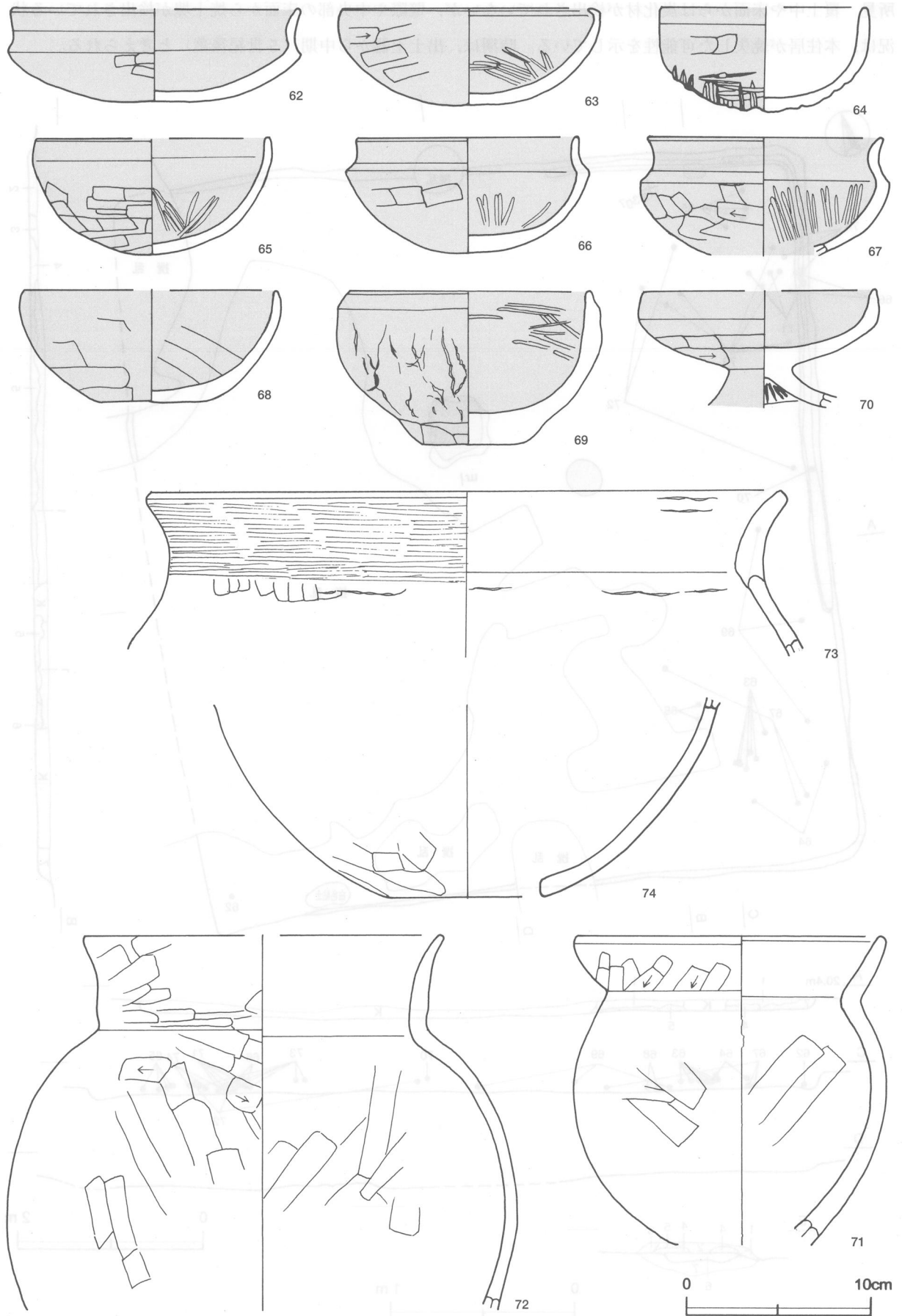
- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量
- 7 灰褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片667点(坏・椀類249, 甕・甑類418)が出土している。土器の底部もしくは口縁部の破片から推定される個体数は、坏・椀類13点, 高坏1点, 甕・甑類7点である。その土器片の大部分は、北西コーナー部及び南西コーナー部の床面近くから、投棄された状況で出土している。これらはその出土状況から本住居の廃絶後、間もない時期に投棄されたと考えられる。

所見 覆土中や床面からは炭化材が検出されていないが、壁際や中央部の床面から焼土塊が検出されている状況は、本住居が焼失した可能性を示している。時期は、出土土器から中期（5世紀後葉）と考えられる。



第19図 第7号住居跡実測図



第20图 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師器	坏	[15.4]	5.0	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ	南西角床面直上	20%
63	土師器	坏	13.6	5.2	—	長石	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ヘラ磨き	南西角下層	85% PL12
64	土師器	椀	11.0	5.7	—	長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明	南西角下層	40% 砥石転用痕
65	土師器	椀	12.4	6.2	—	長石・石英	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ磨き	北西角下層	70% PL12
66	土師器	坏	12.0	6.3	—	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ヘラ磨き	北西角床面直上	60% PL13
67	土師器	坏	12.6	(6.3)	—	長石	赤	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラ磨き	南西角床面	60% PL13
68	土師器	椀	[13.8]	6.0	5.4	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ 底部ヘラ削り	南西部床面直上	40%
69	土師器	椀	13.0	8.2	5.2	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ナデ,亀裂あり 内面ヘラ磨き 底部ヘラ削り	西壁際下層	70% PL13
70	土師器	高坏	[12.4]	(6.4)	—	長石・石英		普通	坏部外面ヘラ削り 脚部内面ヘラナデ	西壁際下層	30%
71	土師器	甕	16.5	(16.1)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	頸部・体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラナデ	北西角下層	60% 二次焼成 PL13
72	土師器	甕	[19.2]	(20.2)	—	雲母・長石・石英	灰褐	普通	口縁部・頸部・体部外面ヘラ削り 体部内面 ヘラナデ	西壁際・北西部 下層	30%
73	土師器	甕	34.0	(8.9)	—	雲母・長石	浅黄橙	普通	頸部外面ヘラ削り,輪積痕	北西部下層	5%
74	土師器	甗	—	(5.5)	8.2	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明	北西部下層	10%

第8号住居跡（第21・22図）

位置 調査区東部のC3 a5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸7.90m、短軸7.80mの方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は30～42cmほどで、ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としており、中央部がよく踏み固められている。P3の周辺には、出入り口施設に伴う、高さ5cmほどの馬蹄形状の高まりがみられる。また、壁際の床面近くからは、多量の焼土塊が検出されている。なお、壁溝は検出されていない。

焼土塊土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------------|----------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 | 焼土粒子多量, ロームブロック・炭化粒子微量 |

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径120cm、短径60cmの楕円形で、長径方向は住居の主軸と一致している。床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は火熱を受けて赤変硬化し、凹凸が著しい。

炉土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|--------|-----------|
| 1 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量 |
| | | 3 暗赤褐色 | ロームの赤変硬化層 |

ピット 4か所。P1・P2は、深さ90cmほどで、規模と配置から支柱穴である。P3は南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P4は中央部の西壁寄りに位置し、規模と配置から補助柱穴の可能性はあるが、対応する東壁寄りの位置では検出されていない。

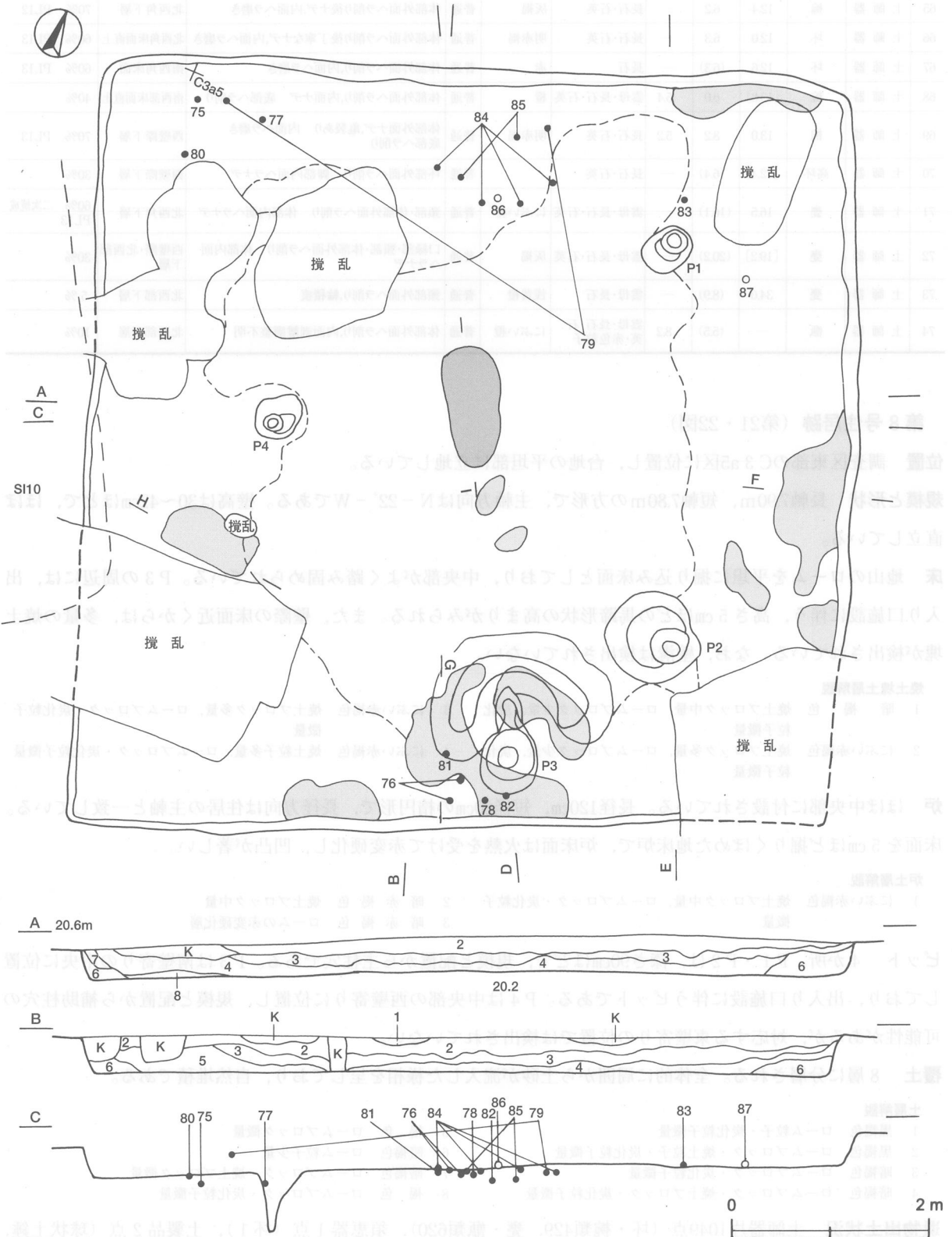
覆土 8層に分層される。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

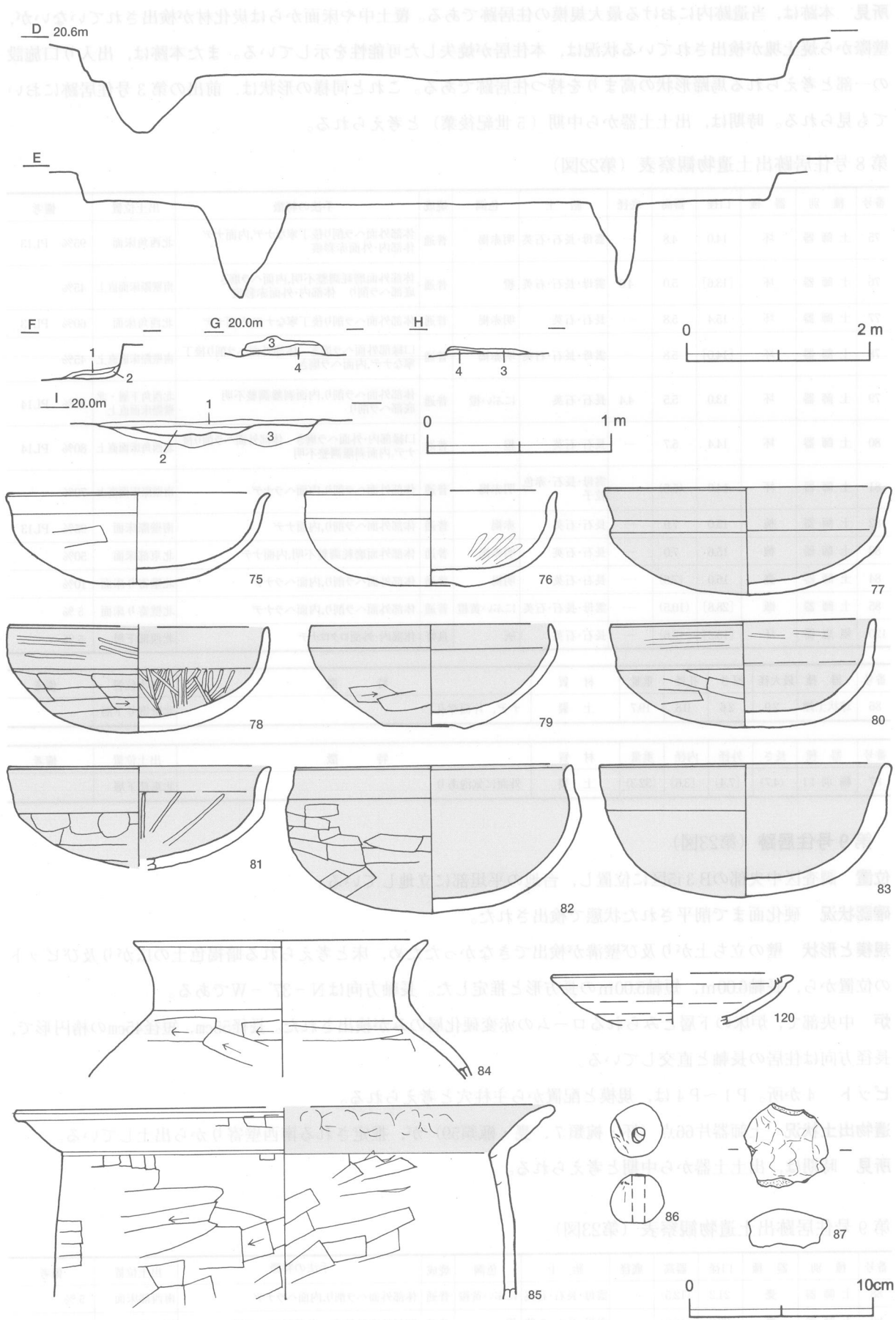
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1049点（坏・椀類429, 甕・甗類620）, 須恵器1点（坏1）, 土製品2点（球状土錘, 輪羽口）, 自然遺物（アカニシ）が出土している。土器の底部もしくは口縁部の破片から推定される個体数は、

坏・椀類17点、甕・甗類7点である。壁際の覆土第3・4・6層を中心として廃棄された状態で出土している。本跡から出土している遺物のうち、ほぼ完形のもののは斜位で出土しているものが多い。これらは本住居の廃絶後、間もない時期に廃棄されたと考えられる。また、120は北西部の覆土下層から出土している。なお、アカニシは、逆位で出土している82の中から検出されている。76は混入の可能性が高い。



第21図 第8号住居跡実測図



第22図 第8号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は、当遺跡内における最大規模の住居跡である。覆土中や床面からは炭化材が検出されていないが、壁際から焼土塊が検出されている状況は、本住居が焼失した可能性を示している。また本跡は、出入口施設の一部と考えられる馬蹄形状の高まりを持つ住居跡である。これと同様の形状は、前出の第3号住居跡においても見られる。時期は、出土土器から中期（5世紀後葉）と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
75	土師器	坏	14.0	4.8	—	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ナデ 体部内・外面赤彩痕	北西角床面	95% PL13
76	土師器	坏	[13.6]	5.0	4.0	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面磨耗調整不明,内面ヘラ磨き 底部ヘラ削り 体部内・外面赤彩痕	南壁際床面直上	45%
77	土師器	坏	15.4	5.8	—	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ナデ	北西角床面	60% PL13
78	土師器	坏	[14.0]	5.8	—	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後丁寧なナデ,内面ヘラ磨き	南壁際床面直上	45%
79	土師器	坏	13.0	5.5	4.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面剥離調整不明 底部ヘラ削り	北西角下層・北壁際床面直上	85% PL14
80	土師器	坏	14.4	5.7	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後ナデ,内面剥離調整不明	北西角床面直上	80% PL14
81	土師器	坏	14.0	(5.5)	—	雲母・長石・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	南壁際床面直上	70%
82	土師器	椀	15.0	7.9	—	長石・石英	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ナデ	南壁際床面	95% PL13
83	土師器	椀	15.6	7.0	—	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面磨耗調整不明,内面ナデ	北東部床面	50%
84	土師器	甕	16.0	(7.6)	—	長石・石英	明褐	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	北壁寄り床面	10%
85	土師器	甗	[28.8]	(10.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	北壁寄り床面	5%
120	須恵器	坏	[13.2]	(2.6)	—	長石・石英	灰	良好	体部内・外面ロクロナデ	北西部下層	5%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
86	球状土錘	2.9	2.6	0.8	19.7	土製	ナデ, 片面穿孔	北壁寄り下層	

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
87	輪羽口	(4.7)	[7.4]	[3.6]	(32.3)	土製	外面に気泡あり	北東部下層	

第9号住居跡（第23図）

位置 調査区中央部のB3i5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 硬化面まで削平された状態で検出された。

規模と形状 壁の立ち上がり及び壁溝が検出できなかったため、床と考えられる暗褐色土の広がり及びピットの位置から、長軸6.00m、短軸5.00mの長方形と推定した。長軸方向はN-37°-Wである。

炉 中央部で、炉床の下層とみられるロームの赤変硬化層のみが検出された。長径55cm、短径45cmの楕円形で、長径方向は住居の長軸と直交している。

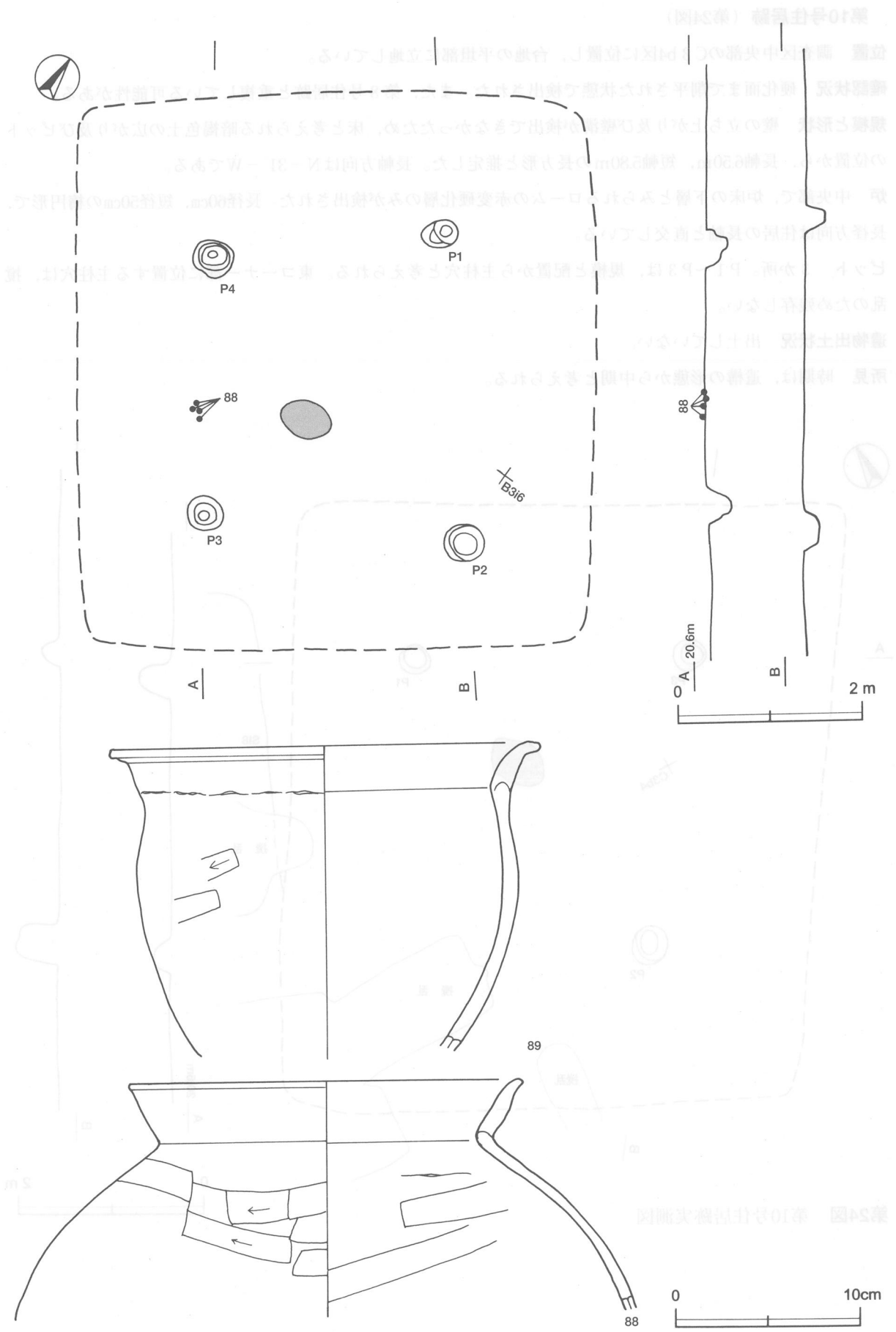
ピット 4か所。P1～P4は、規模と配置から支柱穴と考えられる。

遺物出土状況 土師器片66点（坏・椀類7、甕・甗類59）が、推定される南西壁寄りから出土している。

所見 時期は、出土土器から中期と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
88	土師器	甕	21.2	(12.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	南西部床面	5%
89	土師器	甕	23.0	(16.6)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	頸部外面輪積痕 体部外面ヘラ削り	確認面	5%



第23図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡（第24図）

位置 調査区中央部のC3b4区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 硬化面まで削平された状態で検出された。また、第8号住居跡と重複している可能性がある。

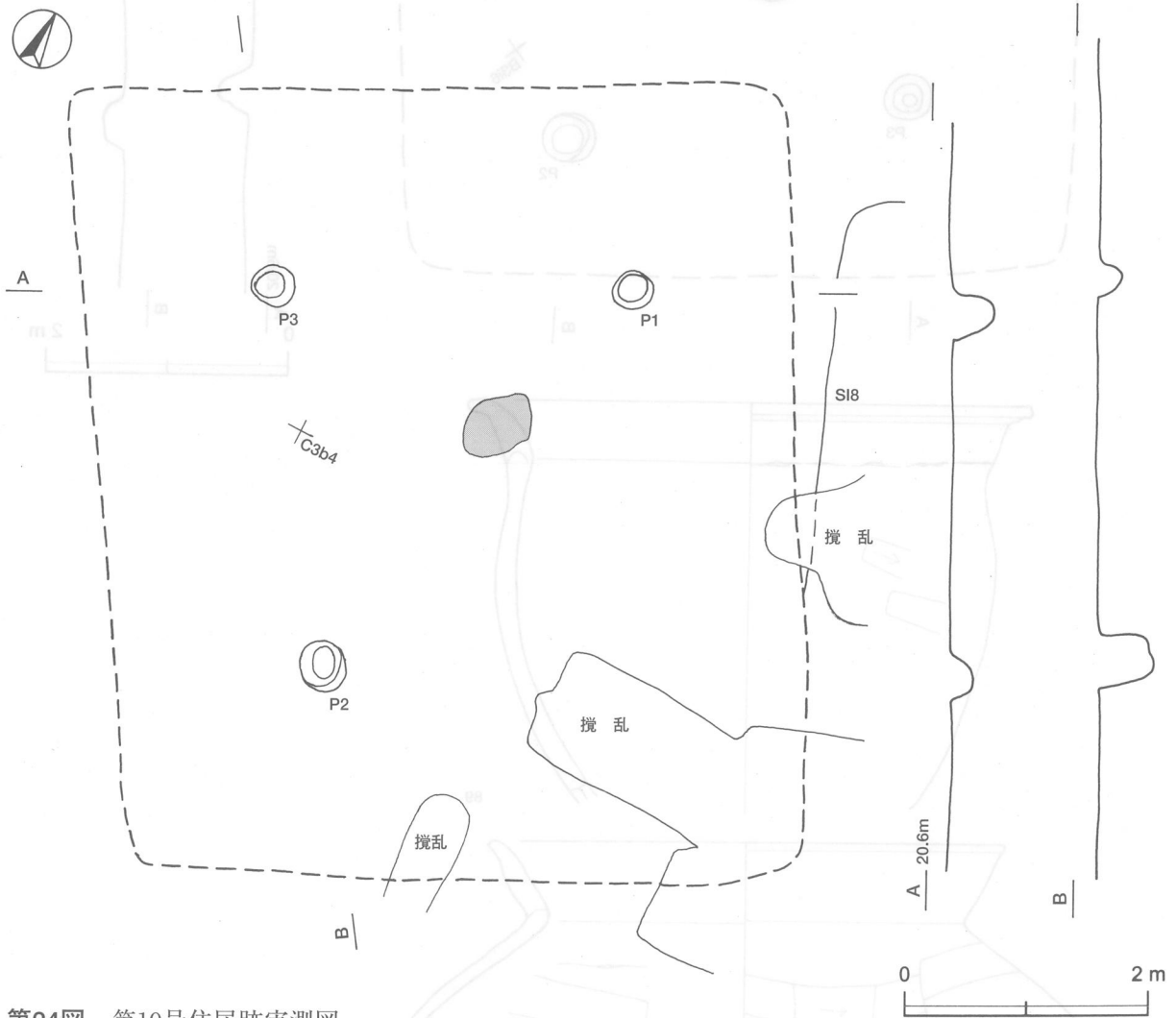
規模と形状 壁の立ち上がり及び壁溝が検出できなかったため、床と考えられる暗褐色土の広がり及びピットの位置から、長軸6.50m、短軸5.80mの長方形と推定した。長軸方向はN-31°-Wである。

炉 中央部で、炉床の下層とみられるロームの赤変硬化層のみが検出された。長径60cm、短径50cmの楕円形で、長径方向は住居の長軸と直交している。

ピット 3か所。P1～P3は、規模と配置から主柱穴と考えられる。東コーナー部に位置する主柱穴は、攪乱のため残存しない。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から中期と考えられる。



第24図 第10号住居跡実測図

(2) 土坑

第46号土坑 (第25・26図)

位置 調査区中央部のB3e8区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.40mほど、短軸1.80mほどの隅丸長方形で、長軸方向はN-75°-Eである。底面はほぼ平坦で、深さは25cmほどである。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。第2・3層とも壁際に三角状堆積が見られないことから、人為堆積である。

土層解説

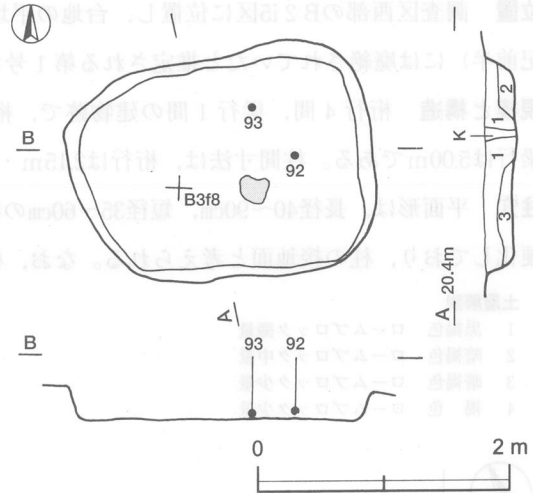
- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片100点 (坏・椀類21, 甕類79)

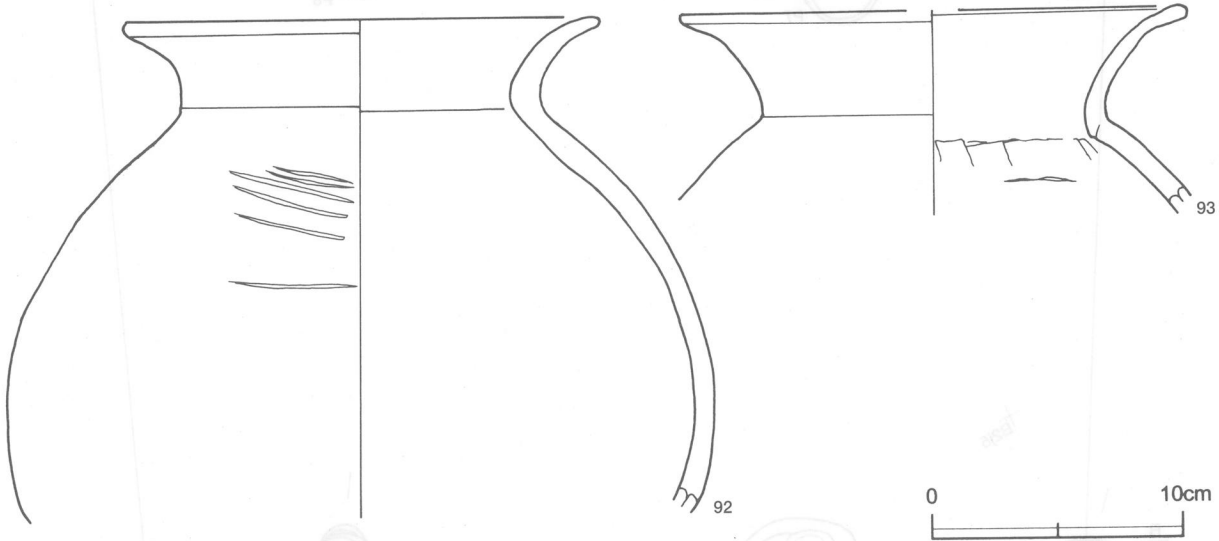
が出土している。92・93はともに底面近くから、92は横位、93は正位で出土している。いずれも口縁部から体部上半部のみであり、底部片は全く出土していない。

また、中央部で少量の焼土塊が検出されている。

所見 時期は、出土土器から中期 (5世紀後葉) と考えられる。性格は不明である。



第25図 第46号土坑実測図



第26図 第46号土坑出土遺物実測図

第46号土坑出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
92	土師器	甕	18.6	(19.8)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面ナデ	底面直上	40% 体部外面 紙石転用痕
93	土師器	甕	[20.0]	(8.1)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ, 輪積痕	底面直上	20%

2 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構としては、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構1基、井戸跡2基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記載する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第27・28図)

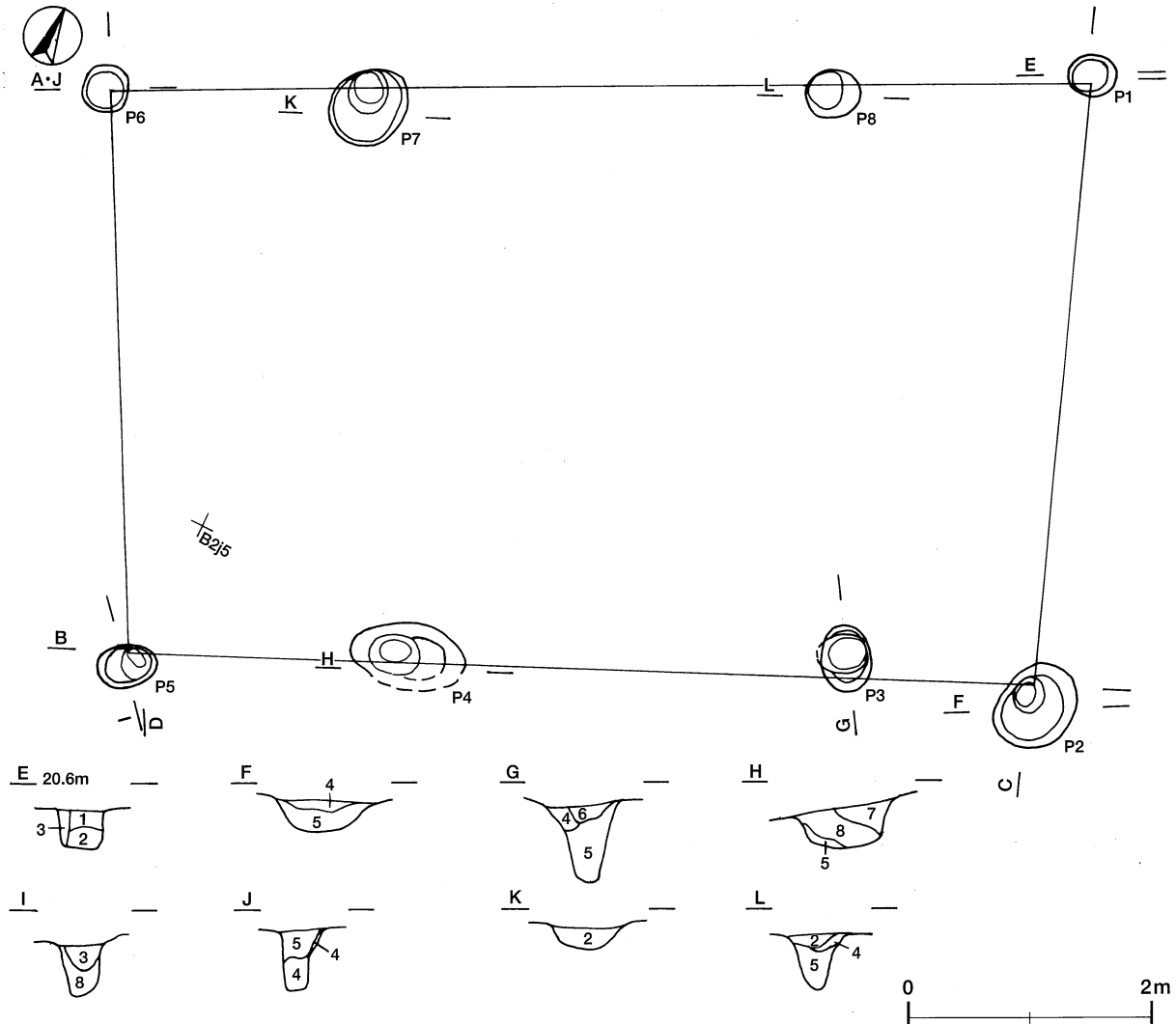
位置 調査区西部のB2i5区に位置し、台地の平坦部に立地している。本跡の北4mの位置には、近世(18世紀前半)には廃絶されていたと推定される第1号井戸跡が位置している。

規模と構造 桁行4間、梁行1間の建物跡で、桁行方向をN-70°-Eとする東西棟である。桁行は7.30m、梁行は5.00mである。柱間寸法は、桁行は2.15m・3.70mを基本とし、梁行は5.00mである。

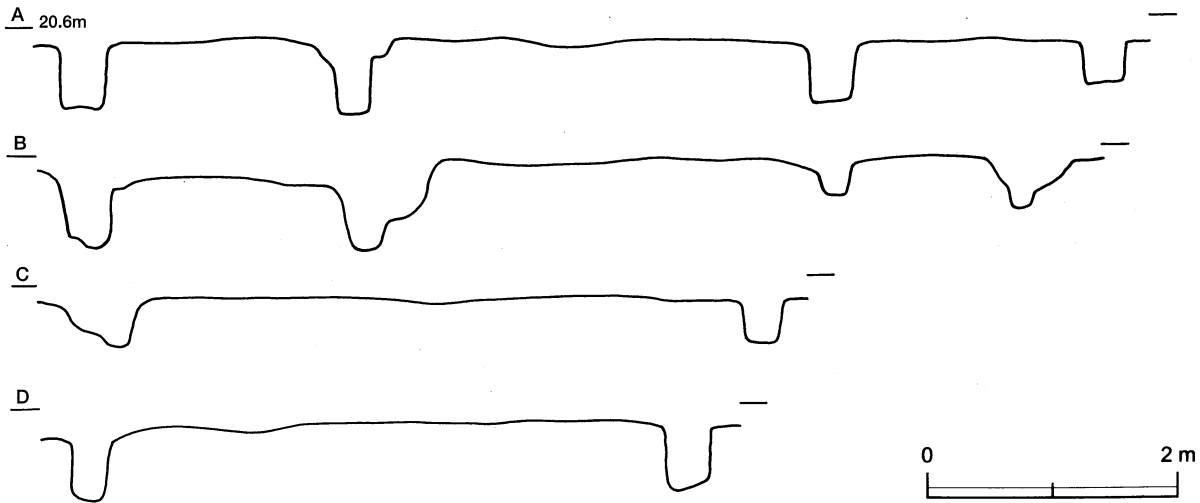
柱穴 平面形は、長径40~90cm、短径35~60cmの楕円形で、深さは30~60cmである。P1・P6・P7の底面は硬化しており、柱の接地面と考えられる。なお、柱痕は確認できなかった。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量(第2層よりしまり弱い) |



第27図 第1号掘立柱建物跡実測図(1)



第28図 第1号掘立柱建物跡実測図(2)

遺物出土状況 出土していない。

所見 柱穴の規模や覆土の状況からみて、時期は中世以降と考えられ、北側に位置する第1号井戸跡との関連が想定される。

(2) 方形竪穴遺構

第2号方形竪穴遺構(第29・30図)

位置 調査区西部のC1b8区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 西部が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認できた東西軸は2.70m、南北軸は2.20mである。平面形は長方形と推定され、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は70~120cmほどで、ほぼ直立している。

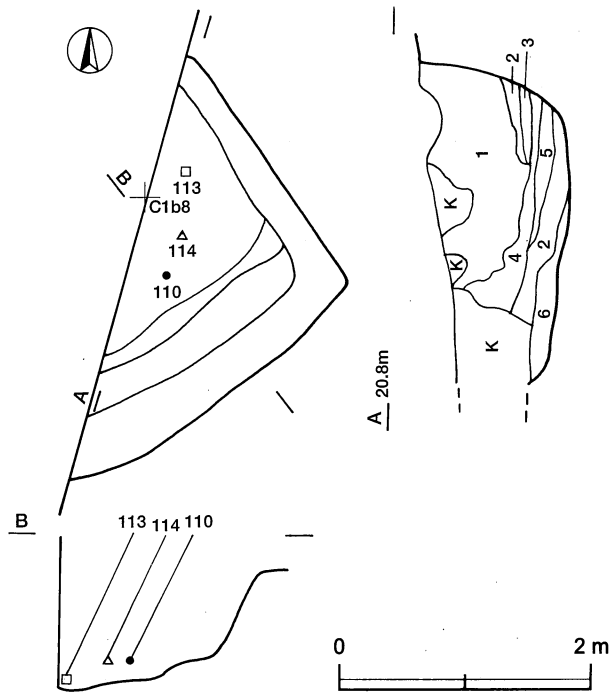
床 ほぼ平坦で、北に向かって緩やかに傾斜している。

確認できた範囲内では、硬化面は検出されていない。

覆土 6層に分層される。各層ともしまりは弱く、ほぼ水平に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

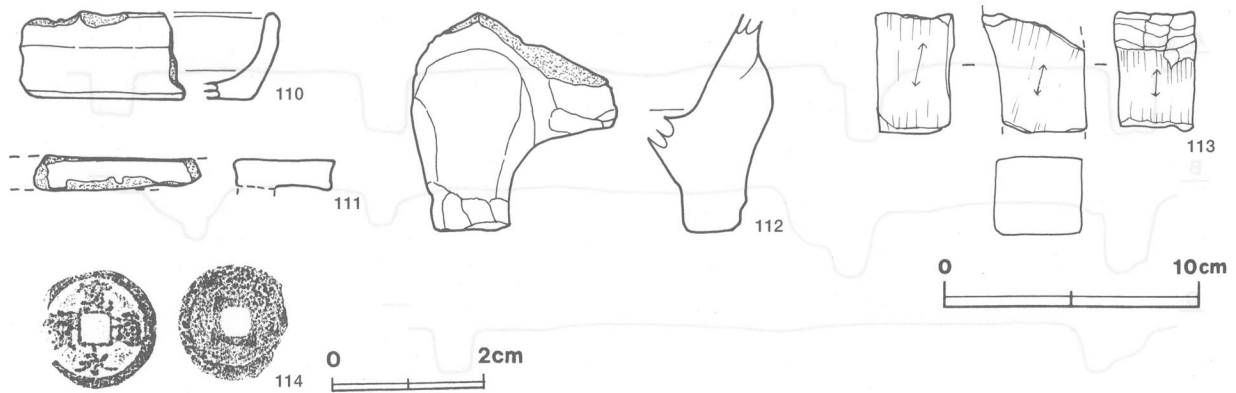
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量



第29図 第2号方形竪穴遺構実測図

遺物出土状況 土師器片1点、土師質土器片17点、陶器片4点、磁器片1点、砥石1点、古銭2(寛永通寶2)が主に覆土下層から出土している。

所見 出土した古銭は寛永通寶で、覆土下層から出土している。時期は近世以降と考えられる。



第30図 第2号方形竪穴遺構出土遺物実測図

第2号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第30図)

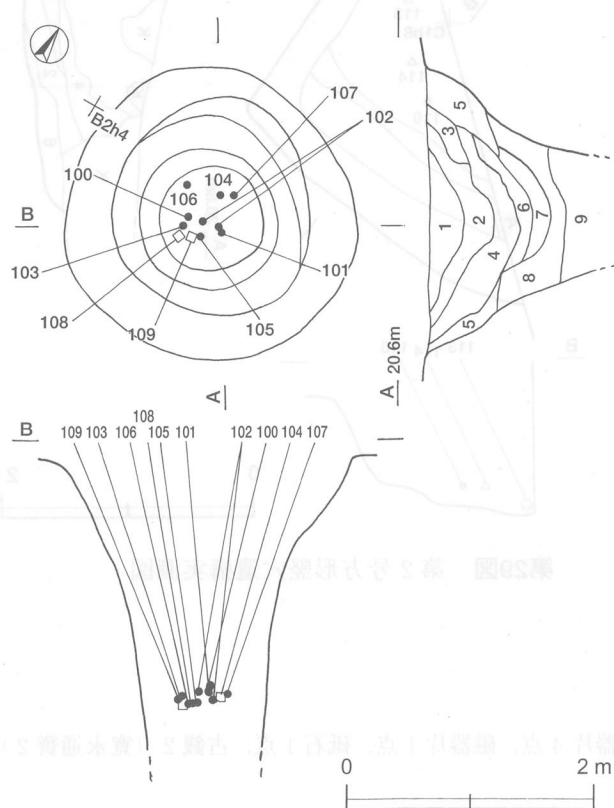
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
110	土師質土器	焙烙	—	3.4	—	雲母・長石	暗灰黄	普通	体部内・外面横ナデ	覆土下層	5%
111	土師質土器	竈罎	[37.4]	(1.4)	—	雲母・長石	灰褐	普通	両面ナデ 推定内径29.4cm	覆土中	5% 上面煤付着
112	土師質土器	火舎	—	(8.6)	—	雲母・長石	明赤褐	普通	脚部ナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
113	砥石	(4.7)	(4.2)	(3.2)	(89.8)	凝灰岩	砥面3面	底面直上	

番号	銭名	銭径	銭孔	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
114	寛永通寶	2.4	0.5×0.5	0.1	(2.1)	銅	古寛永 背文なし 初鑄寛永14年(1637年)	覆土下層	

(3) 井戸跡

第1号井戸跡 (第31・32図)



第31図 第1号井戸跡実測図

位置 調査区西部のB2h4区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 確認面での平面形は、径2.30mほどの円形である。確認面から1.50mまでは漏斗状、それ以下は径1.00mほどの円筒状である。2.60mまで掘り下げた時点で、崩落の恐れがあり以後の調査を中止した。ローム層を掘り抜き、粘土層を掘り込んでいることが確認された。

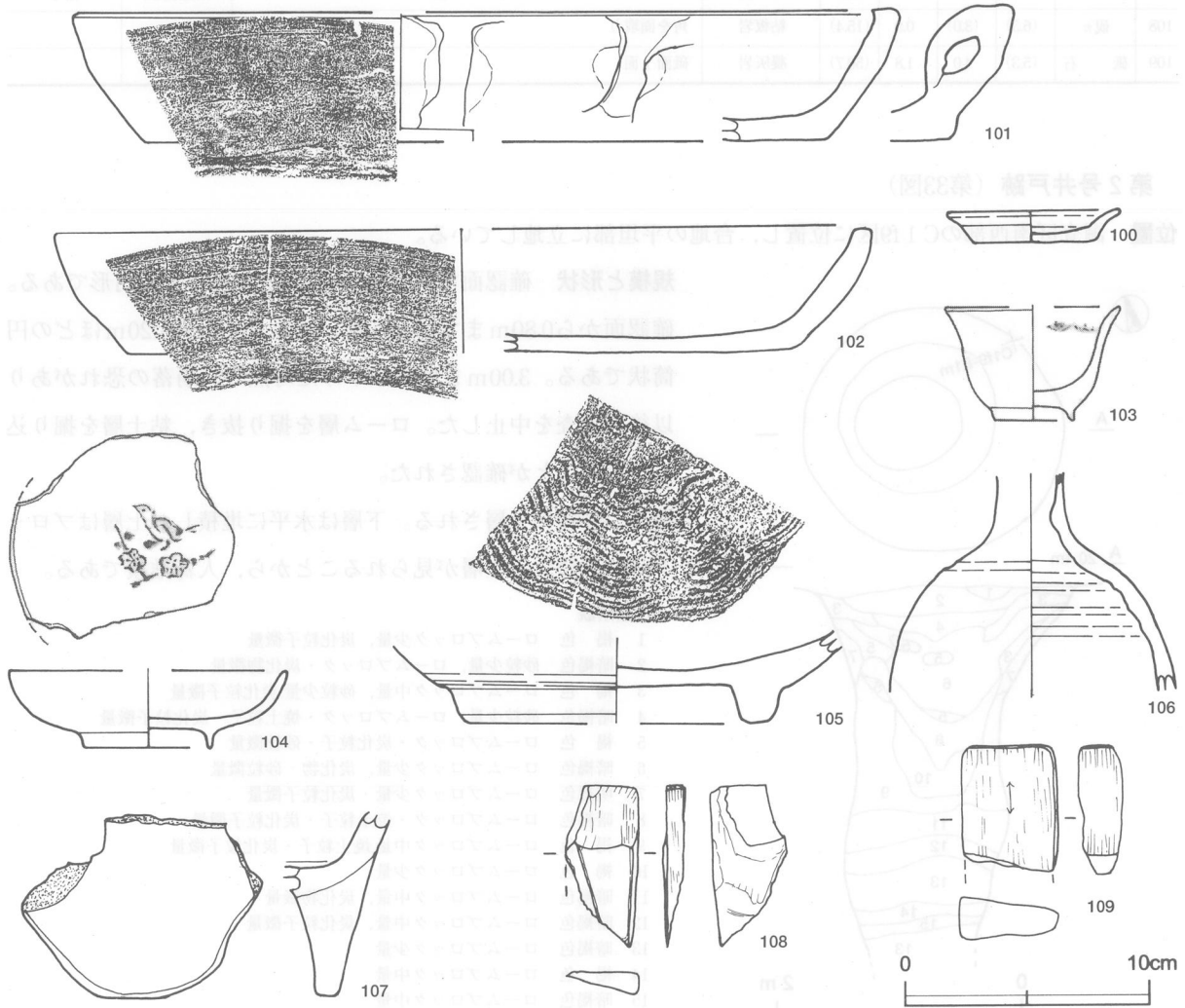
覆土 9層に分層される。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。第8・9層にロームブロックが比較的多く含まれているのは、壁が崩落したためと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物・砂粒微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・砂粒微量
- 5 褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・砂粒微量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量, 砂粒微量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片21点（小皿5，焙烙13，火舎1），陶器片8点（皿2，碗3，徳利1，鉢2），磁器片15点（盃1，碗14），砥石3点，鉄滓3点が出土している。遺物はすべて，確認面から1.50mほどの深さの位置から出土し，完形まで復元できるものはない。これらの遺物はその出土状況から，破片が一括して投棄されたと考えられる。

所見 出土遺物から，近世（18世紀前半）には井戸としての機能を終えたものと考えられる。



第32図 第1号井戸跡出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表（第32図）

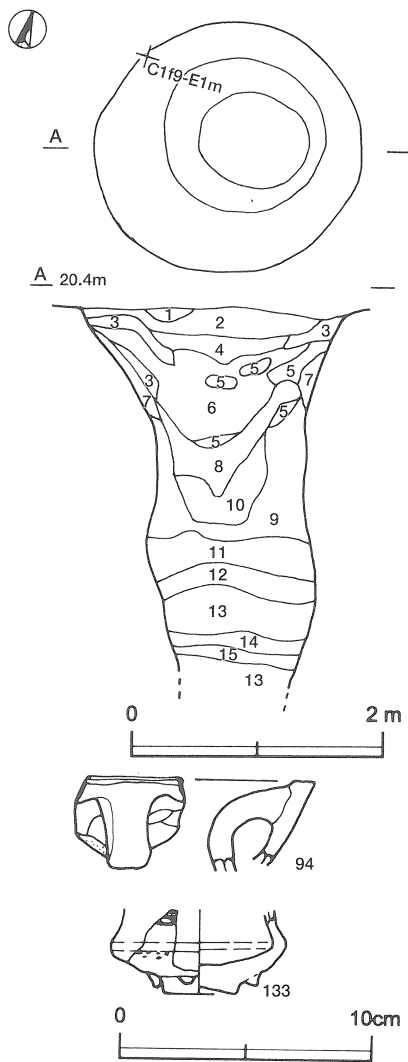
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
100	土師質土器	小皿	6.9	0.8	4.9	雲母・長石	橙	普通	内・外面クロコナテ 底部回転糸切り	覆土中	85%	
101	土師質土器	焙烙	[34.6]	5.4	[28.8]	雲母・長石	褐	普通	体部内・外面横ナテ 内耳2か所残存	覆土中	30% 体部外面煤附着	
102	土師質土器	焙烙	[33.4]	5.1	[27.2]	雲母・長石	にぶい橙	普通	体部内・外面横ナテ	覆土中	30% 体部外面煤附着	
107	土師質土器	火舎	—	(7.4)	—	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	内・外面ナテ	覆土中	5%	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	釉色	文様・特徴		産地・年代	出土位置	備考
133	磁器	猪口	[7.0]	4.6	3.2	灰白	明緑灰	内面に染付,文様不明		不明	覆土中	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	釉色	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
104	陶器	皿	[11.2]	3.2	5.2	灰白	透明	見込みに花鳥文を染付 貫入が入る	瀬戸・美濃 16C末~17C	覆土中	40%
105	陶器	鉢	—	(3.7)	[12.2]	橙	白	櫛引同心円文を施し、釉を流し掛け	肥前系唐津 17C中~後葉	覆土中	5%
106	陶器	德利	—	(8.7)	—	にぶい黄橙	オリーブ褐	灰釉を流し掛け	瀬戸・美濃 18C代	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
108	硯カ	(6.5)	(3.0)	0.9	(15.4)	粘板岩	角を面取り	覆土中	
109	砥石	(5.3)	4.0	1.8	(50.7)	凝灰岩	砥面1面	覆土中	

第2号井戸跡 (第33図)

位置 調査区南西部のC1f9区に位置し、台地の平坦部に立地している。



第33図 第2号井戸跡・出土遺物実測図

規模と形状 確認面での平面形は、径2.00mほどの円形である。

確認面から0.80mまでは漏斗状、それ以下は径1.20mほどの円筒状である。3.00mまで掘り下げた時点で、崩落の恐れがあり以後の調査を中止した。ローム層を掘り抜き、粘土層を掘り込んでいることが確認された。

覆土 15層に分層される。下層は水平に堆積し、上層はブロック状に堆積する土層が見られることから、人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 砂粒少量、ロームブロック・炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・砂粒微量
- 7 明褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 褐色 ロームブロック少量
- 11 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 12 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 13 暗褐色 ロームブロック少量
- 14 褐色 ロームブロック中量
- 15 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片11点（焙烙11）、陶器片6点（皿3、德利3）、磁器片1点（香炉1）、木材2本（長さ143cm・155cm）が出土している。土器片は覆土上層から出土している。木材は深さ3.1mほどの位置から、投棄された状態で出土している。いずれも杭として使用されたと考えられる枝を払っただけの木材で、加工痕は見られない。

所見 覆土上層から出土した遺物から、本跡は近世（18世紀代）には廃絶されていたと考えられる。

第2号井戸跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
94	土師質土器	焙烙	—	(3.6)	—	雲母・長石	褐灰	普通	体部外面横ナア	覆土中	5% 外面煤付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	釉色	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
133	磁器	香炉	—	(3.4)	2.8	灰白	透明	外面に染付,文様不明 有三足,鼎形	不明	覆土中	

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期不明及び性格不明の方形竪穴遺構2基、土坑64基が検出されている。以下、検出された遺構と遺物について記載する。

(1) 方形竪穴遺構

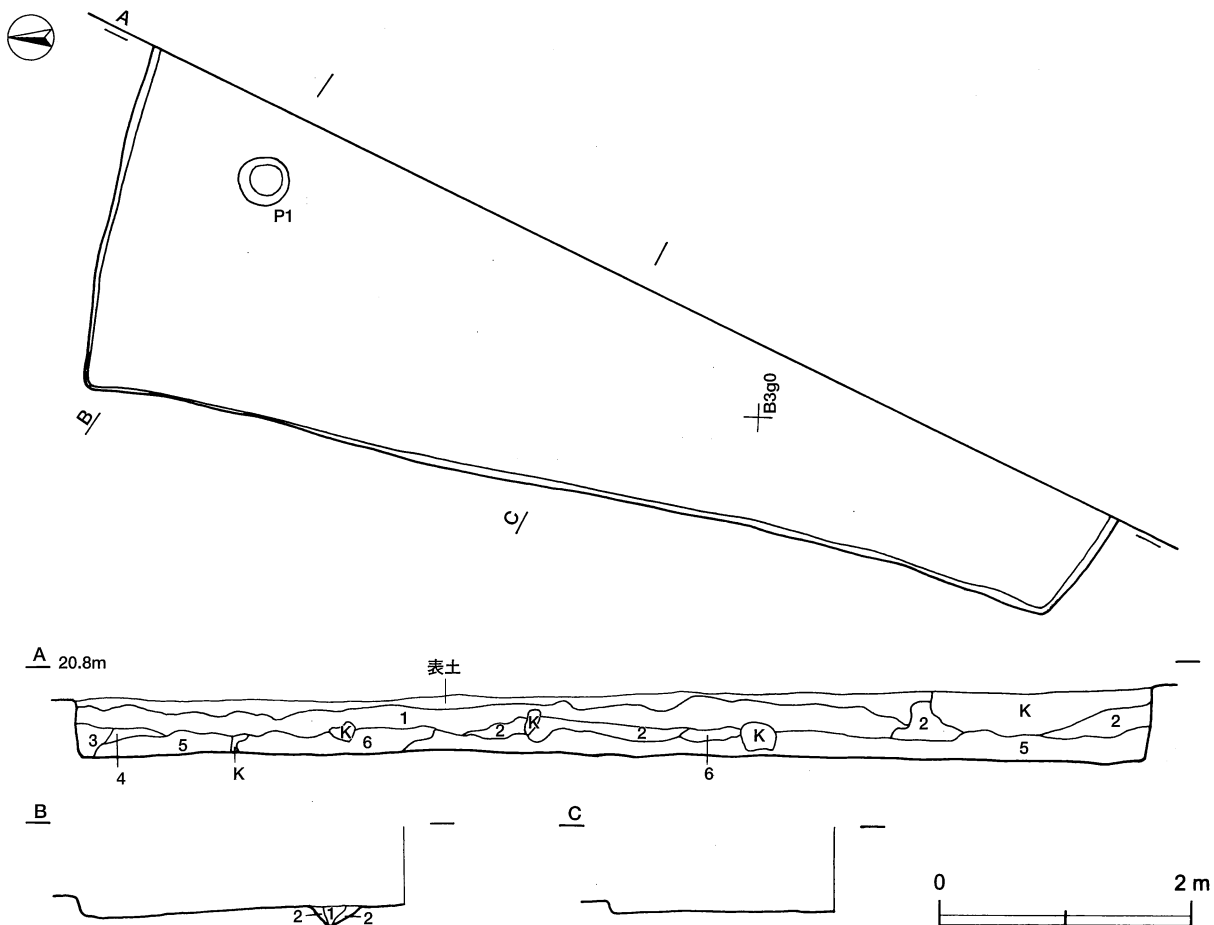
第1号方形竪穴遺構（第34図）

位置 調査区東部のB3f0区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 東部が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認できた東西軸は2.60mで、南北軸は8.30mである。平面形は方形もしくは長方形と推定され、南北軸方向はN-15°-Eである。壁高は8cmほどで、ほぼ直立している。

床 地山のロームを平坦に掘り込み、床面としている。確認できた範囲内では、硬化面及び壁溝は検出されていない。



第34図 第1号方形竪穴遺構実測図

ピット P1は深さ15cmで、北西コーナー寄りに位置している。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

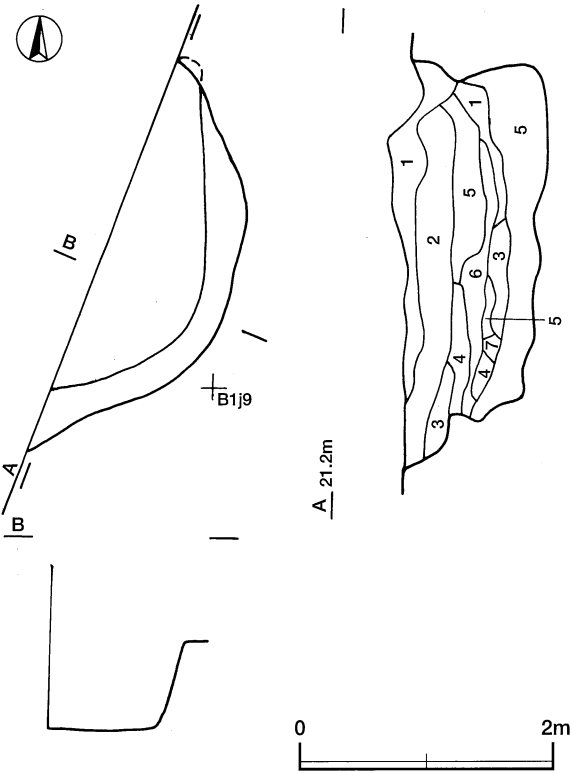
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片5点(坏・碗類3, 甕・甑類2)が出土している。

所見 本跡は、住居跡と判断できるだけの要件がないため、方形竪穴遺構とした。しかし本跡の西5mには、ほぼ同規模・同形状の第7号住居跡が位置しており、本跡が住居跡である可能性は否定できない。遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、本跡に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第3号方形竪穴遺構 (第35図)



位置 調査区西部のB1i8区に位置し、台地の平坦部に立地している。

確認状況 西部が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認できた東西軸は1.05m, 南北軸は3.30mである。平面形, 主軸方向ともに不明である。壁高は130cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 地山のロームを平坦に掘り込み, 底面としている。確認できた範囲内では、硬化面は検出されていない。

覆土 7層に分層される。各層ともしまりは弱く、ブロック状に堆積しており、人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量 (第1層より粘性あり) |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |

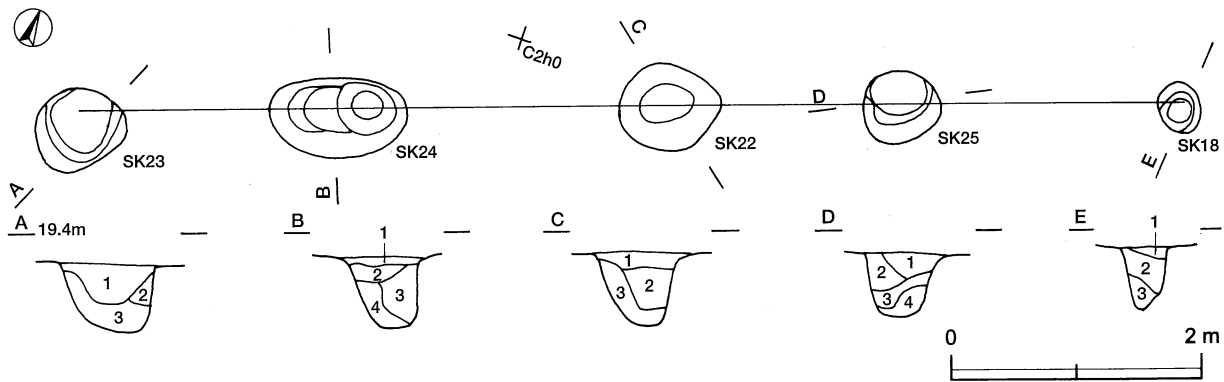
遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第35図 第3号方形竪穴遺構実測図

(2) 土坑

時期及び性格不明の土坑を、実測図(第36~39図)及び一覧表で掲載する。出土した遺物の中で特色のあるものについては実測図(第40図)を掲載し、解説は観察表で記載する。なお、調査区南部に位置する第18・22~25号土坑は、ほぼ等間隔で一列に並ぶため柱列の可能性はある。



第36図 第18・22・23・24・25号土坑実測図

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 炭化物少量, ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 炭化物・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第23号土坑土層解説

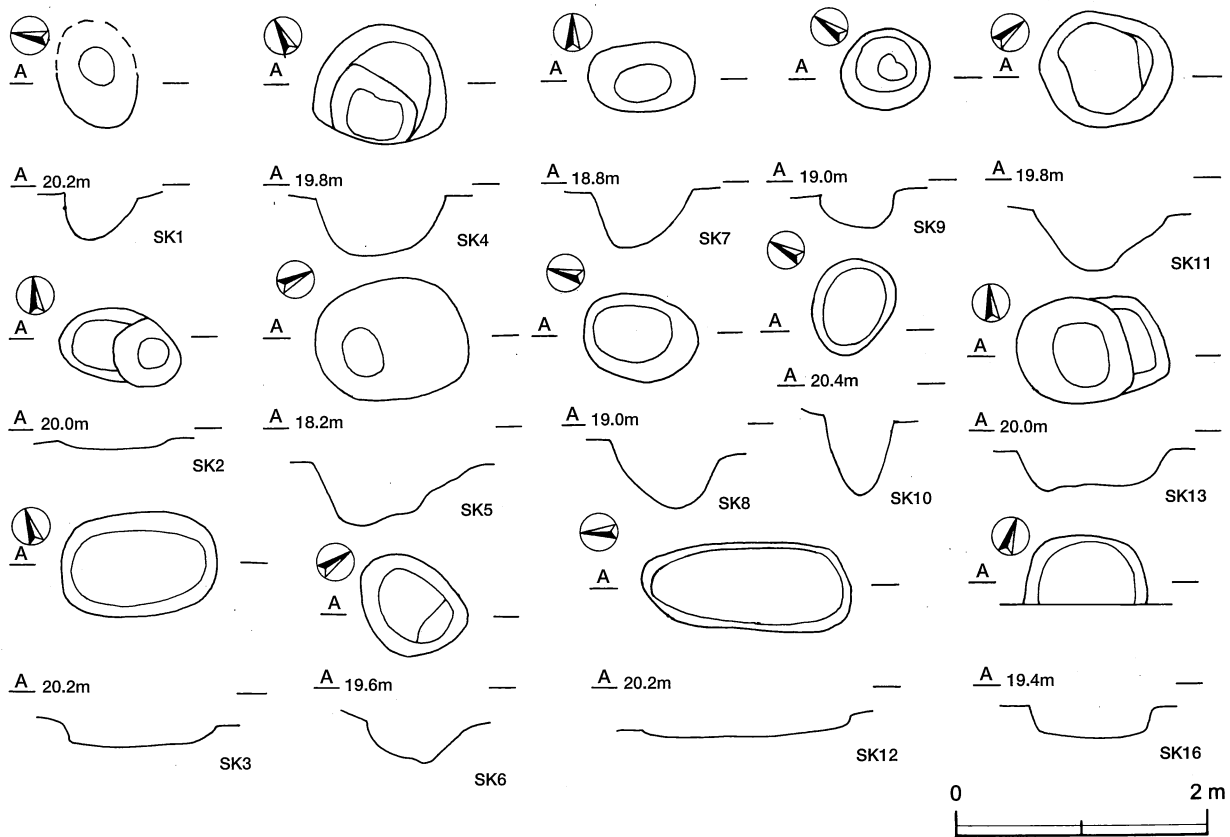
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第24号土坑土層解説

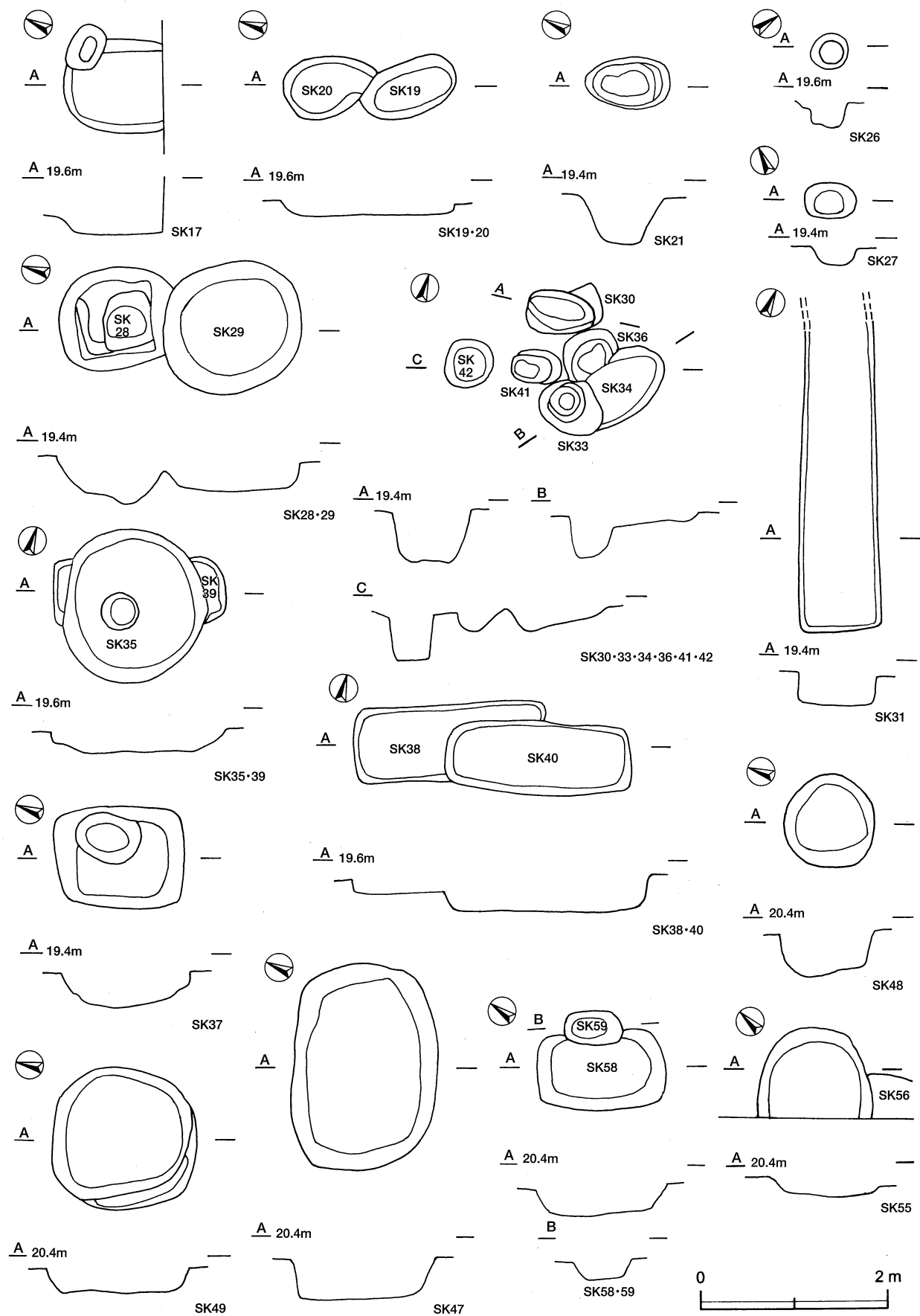
- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第25号土坑土層解説

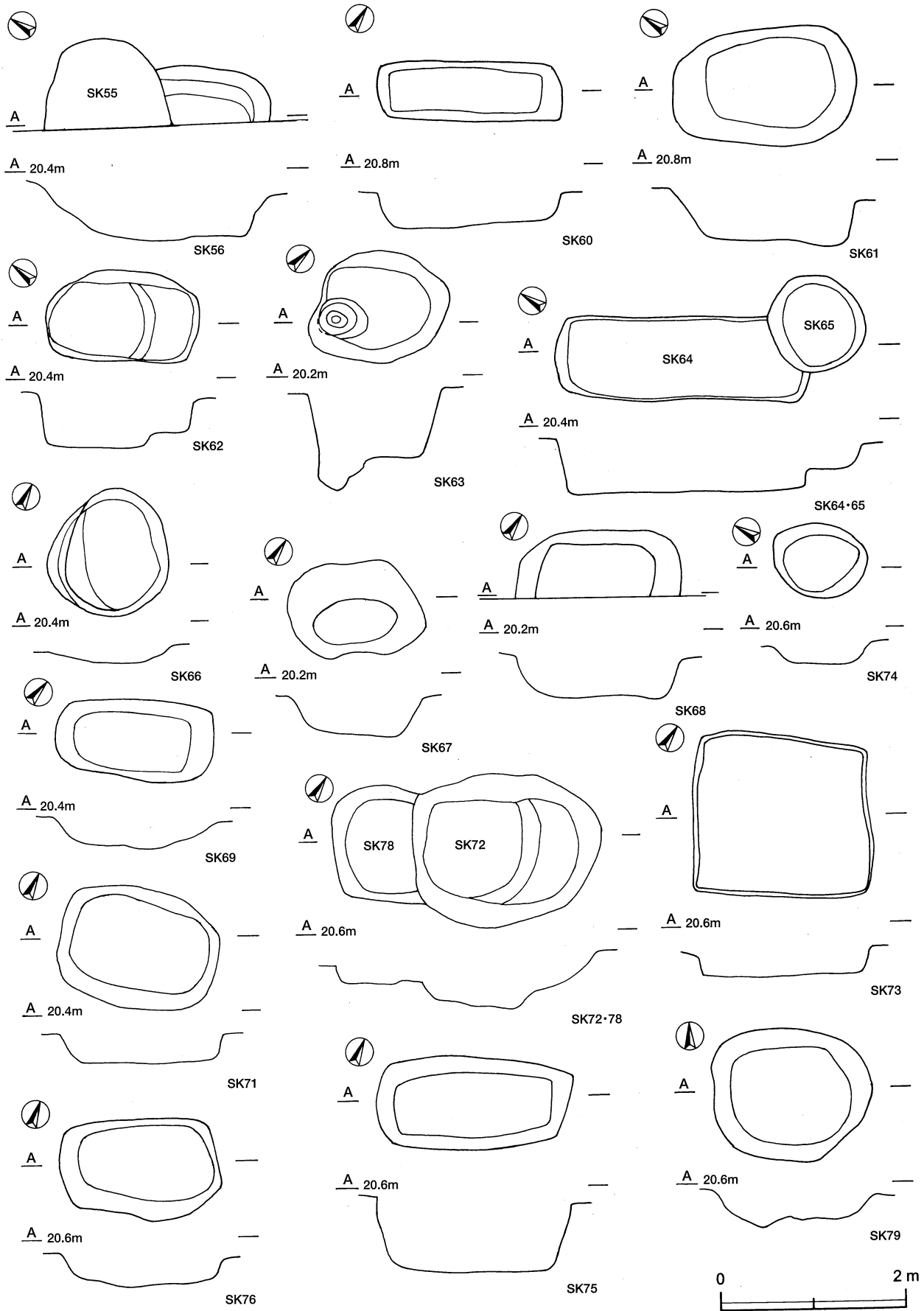
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量 (第1層よりしまりあり)
- 4 暗褐色 ローム粒子少量



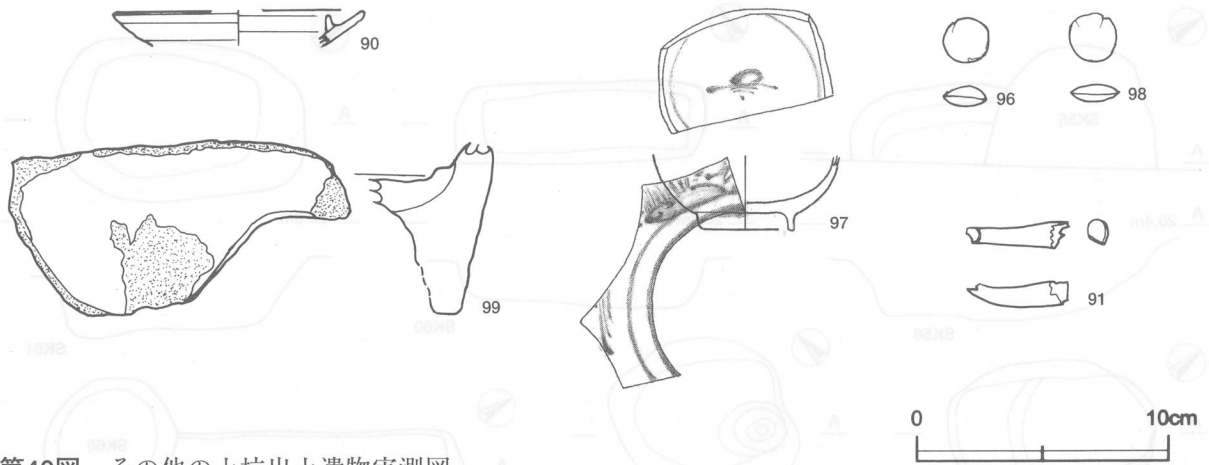
第37図 その他の土坑実測図 (1)



第38図 その他の土坑実測図 (2)



第39図 その他の土坑実測図 (3)



第40図 その他の土坑出土遺物実測図

第29号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	釉色	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
90	陶器	灯明受皿	[9.8]	(1.4)	—	—	灰褐	透明	油溝半月状	信楽系, 19C代カ	覆土中	5%

第30号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
91	煙管	(4.1)	1.0	1.1	(2.5)	銅	雁首部, 火皿部分欠損	覆土中	

第58号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
96	基石形	(1.8)	(1.8)	(0.8)	(1.9)	土製	両面ナデ	覆土中	

第61号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	釉色	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
97	磁器	端反碗	—	(2.9)	3.6	—	灰白	明緑灰	体部外面に山水文, 見込みに鳥文様を染付	瀬戸・美濃系 19C代	覆土中	

第64号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
98	基石形	(1.8)	(1.8)	(0.8)	(2.2)	土製	両面ナデ	覆土中	PL14

第65号土坑出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	土師質土器	火舎	—	(6.8)	—	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	脚部貼り付け	覆土中	5%

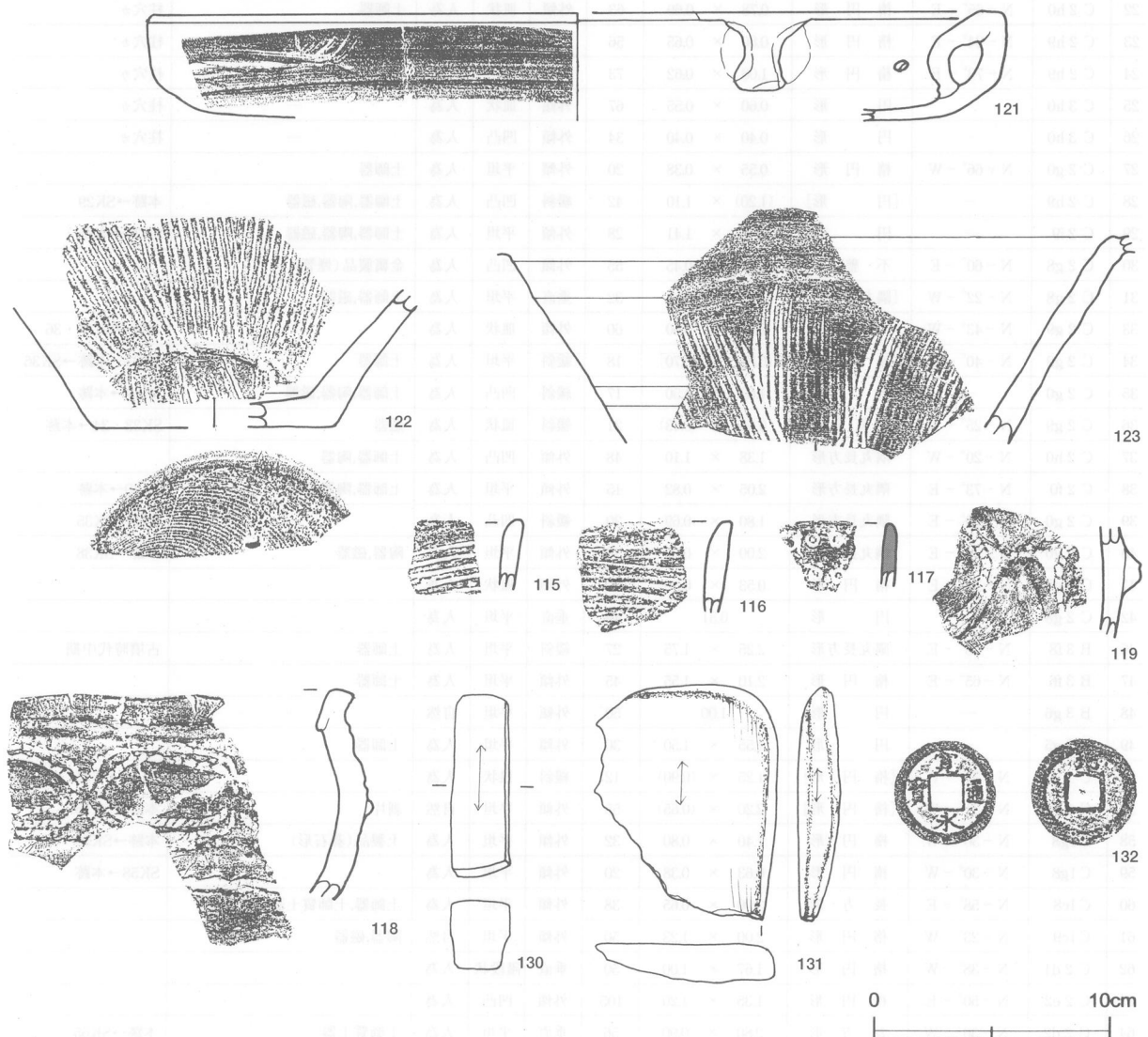
表2 土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	B 3 c6	N-68°-E	[楕円形]	(0.90) × [0.62]	29	外傾	皿状	人為	—	SI 2 → 本跡
2	A 4 j1	N-56°-W	楕円形	0.94 × 0.60	30	緩斜	平坦	人為	—	
3	A 3 i0	N-73°-W	楕円形	1.20 × 0.84	19	緩斜	平坦	人為	—	
4	A 3 g6	—	円形	1.05 × 0.97	60	外傾	平坦	人為	土師器	
5	A 3 f3	N-15°-E	楕円形	1.23 × 0.95	48	外傾	皿状	自然	—	
6	A 3 i2	N-60°-E	楕円形	0.90 × 0.76	41	外傾	皿状	自然	—	
7	A 3 g1	N-84°-E	楕円形	0.84 × 0.55	50	外傾	皿状	自然	—	
8	A 3 g1	N-10°-W	楕円形	0.90 × 0.70	50	外傾	皿状	人為	—	
9	A 3 g1	—	円形	0.70 × 0.66	32	外傾	皿状	自然	—	
10	B 2 d0	N-64°-E	楕円形	0.75 × 0.65	61	外傾	皿状	人為	土師器	SI 4 → 本跡
11	A 3 j2	N-36°-E	楕円形	1.07 × 0.91	42	外傾	皿状	人為	土師器	
12	B 2 b8	N-4°-E	楕円形	1.05 × 0.70	5	緩斜	平坦	不明	陶器	
13	B 2 b8	N-86°-E	楕円形	1.15 × 0.82	37	外傾	平坦	人為	—	
16	C 2 i9	N-23°-W	[楕円形]	0.97 × (0.57)	47	外傾	平坦	人為	—	
17	C 2 i0	N-23°-W	[楕円形]	(1.10) × 1.01	45	緩斜	平坦	人為	土師器	
18	C 3 g1	N-5°-E	楕円形	0.40 × 0.30	60	外傾	皿状	人為	—	柱穴カ
19	C 3 g1	N-28°-W	楕円形	1.02 × 0.58	20	外傾	平坦	人為	—	SK20 → 本跡
20	C 3 g1	N-23°-W	楕円形	1.05 × 0.70	17	緩斜	平坦	人為	—	本跡 → SK19
21	C 2 h9	N-24°-W	楕円形	0.97 × 0.55	56	外傾	平坦	人為	土師器, 土師質土器, 陶器	
22	C 2 h0	N-65°-E	楕円形	0.78 × 0.69	63	外傾	皿状	人為	土師器	柱穴カ
23	C 2 h9	N-24°-E	楕円形	0.80 × 0.65	56	外傾	皿状	人為	—	柱穴カ
24	C 2 h9	N-73°-E	楕円形	1.08 × 0.62	73	外傾	皿状	人為	—	柱穴カ
25	C 3 h0	—	円形	0.60 × 0.55	67	外傾	皿状	人為	—	柱穴カ
26	C 3 h0	—	円形	0.40 × 0.40	34	外傾	凹凸	人為	—	柱穴カ
27	C 2 g0	N-66°-W	楕円形	0.55 × 0.38	20	外傾	平坦	人為	土師器	
28	C 2 h9	—	[円形]	(1.20) × 1.10	42	緩斜	凹凸	人為	土師器, 陶器, 磁器	本跡 → SK29
29	C 2 i9	—	円形	1.46 × 1.41	28	外傾	平坦	人為	土師器, 陶器, 磁器	SK28 → 本跡
30	C 2 g8	N-60°-E	不整形	0.80 × 0.45	55	外傾	凹凸	人為	金属製品(煙管)	
31	C 2 g8	N-22°-W	[隅丸長方形]	(3.30) × 0.85	32	垂直	平坦	人為	土師器, 磁器	
33	C 2 g9	N-43°-W	円形	0.65 × 0.60	60	外傾	皿状	人為	—	本跡 → SK34・36
34	C 2 g9	N-40°-E	[楕円形]	(0.80) × [0.70]	18	緩斜	平坦	人為	土師器	SK33 → 本跡 → SK36
35	C 2 g0	—	円形	1.63 × 1.50	17	緩斜	凹凸	人為	土師器, 陶器, 磁器	SK39 → 本跡
36	C 2 g9	N-25°-W	[隅丸方形]	0.56 × (0.43)	21	緩斜	皿状	人為	磁器	SK33・34 → 本跡
37	C 2 h0	N-20°-W	隅丸長方形	1.38 × 1.10	48	外傾	凹凸	人為	土師器, 陶器	
38	C 2 f0	N-73°-E	隅丸長方形	2.05 × 0.82	15	外傾	平坦	人為	土師器, 陶器, 磁器	SK40 → 本跡
39	C 2 g0	N-69°-E	隅丸長方形	1.80 × 0.69	20	緩斜	凹凸	人為	—	本跡 → SK35
40	C 2 g0	N-78°-E	隅丸長方形	2.00 × 0.80	36	外傾	平坦	人為	陶器, 磁器	本跡 → SK38
41	C 2 g8	N-76°-E	楕円形	0.53 × 0.36	26	外傾	皿状	人為	—	
42	C 2 g8	—	円形	0.51	49	垂直	平坦	人為	—	
46	B 3 f8	N-73°-E	隅丸長方形	2.25 × 1.75	27	緩斜	平坦	人為	土師器	古墳時代中期
47	B 3 f6	N-65°-E	楕円形	2.10 × 1.55	45	外傾	平坦	人為	土師器	
48	B 3 g6	—	円形	1.00	50	外傾	平坦	自然	—	
49	B 3 g5	—	円形	1.55 × 1.50	30	外傾	平坦	人為	土師器	
55	C 1 g7	N-31°-W	[楕円形]	1.25 × (0.90)	12	緩斜	皿状	人為	—	SK56 → 本跡
56	C 1 g7	N-31°-W	[楕円形]	2.20 × (0.65)	55	外傾	平坦	自然	剥片	本跡 → SK55
58	C 1 g8	N-30°-W	楕円形	1.40 × 0.80	32	外傾	平坦	人為	土製品(基石形)	本跡 → SK59
59	C 1 g8	N-30°-W	楕円形	0.63 × 0.38	20	外傾	平坦	人為	—	SK58 → 本跡
60	C 1 c8	N-58°-E	長方形	2.00 × 0.65	38	外傾	平坦	人為	土師器, 土師質土器, 陶器, 磁器	
61	C 1 c9	N-23°-W	楕円形	2.00 × 1.23	50	外傾	平坦	自然	陶器, 磁器	
62	C 2 d1	N-38°-W	楕円形	1.67 × 1.00	50	垂直	階段状	人為	—	
63	C 2 e2	N-50°-E	楕円形	1.35 × 1.20	105	外傾	凹凸	人為	—	
64	C 2 d2	N-30°-W	長方形	2.80 × 0.90	56	垂直	平坦	人為	土師質土器	本跡 → SK65
65	C 2 d2	N-30°-E	楕円形	1.50 × 1.10	35	外傾	平坦	人為	土師質土器, 磁器	SK64 → 本跡

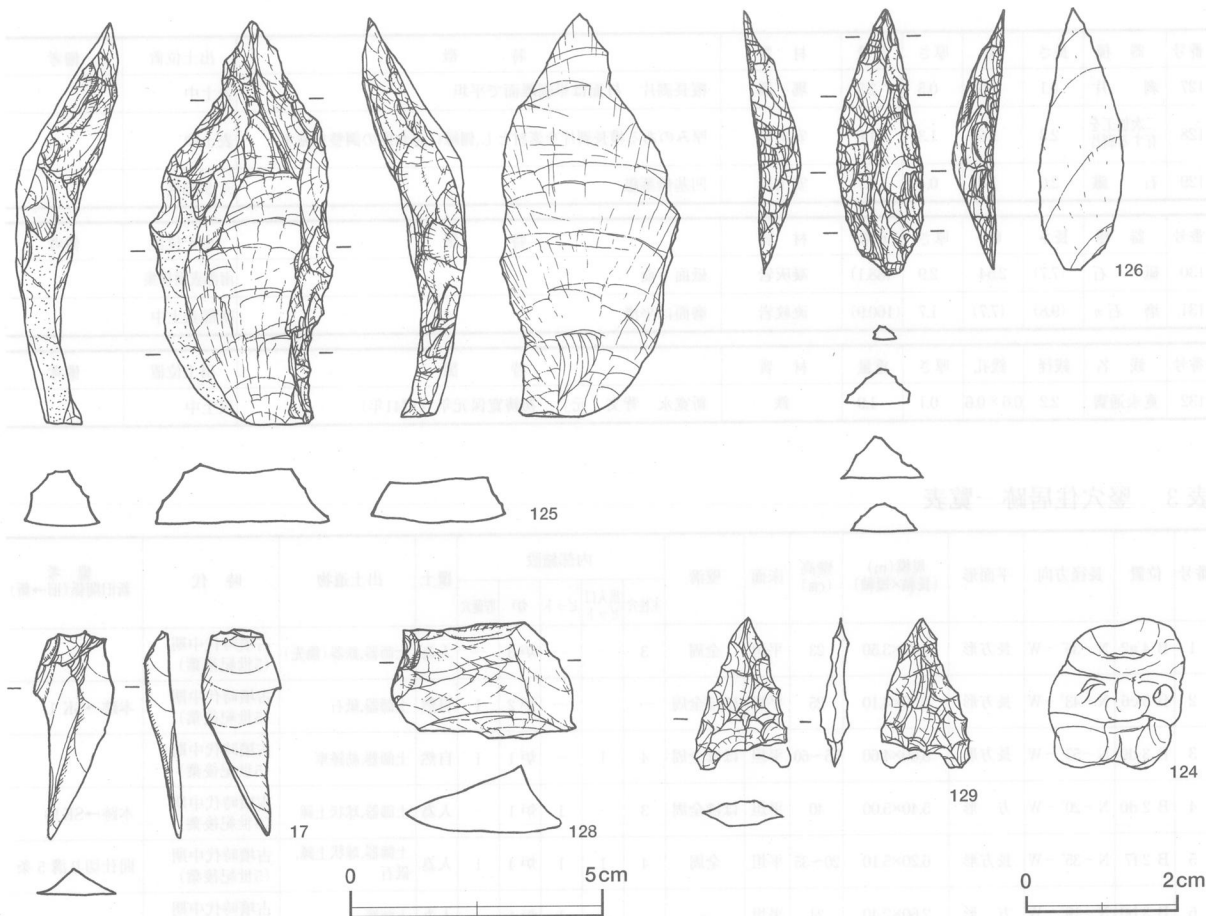
番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
66	C 2 f3	N-32°-W	楕円形	1.35 × 1.10	12	緩斜	皿状	人為	—	
67	C 2 f4	N-51°-E	不整楕円形	1.41 × 1.00	40	外傾	平坦	人為	—	
68	C 2 g4	N-52°-E	[楕円形]	1.74 × (0.73)	45	外傾	平坦	自然	—	
69	B 2 f1	N-60°-E	隅丸長方形	1.70 × 0.90	35	緩斜	皿状	自然	土師器	
71	C 2 d3	N-78°-E	楕円形	1.70 × 1.32	34	外傾	平坦	人為	土師器	
72	C 2 c3	N-60°-E	楕円形	2.05 × 1.67	46	外傾	凸凹	自然	土師質土器	SK78→本跡
73	C 1 c0	N-63°-E	方形	1.90 × 1.75	30	垂直	平坦	人為	土師器	
74	C 1 b0	N-23°-W	楕円形	1.00 × 0.80	20	緩斜	平坦	人為	—	
75	C 1 b0	N-70°-E	長方形	2.05 × 1.03	75	垂直	平坦	人為	土師質土器	
76	C 1 a0	N-70°-E	楕円形	1.70 × 1.10	34	緩斜	凸凹	人為	—	
78	C 2 d3	N-34°-W	[楕円形]	1.30 × (0.85)	27	外傾	平坦	自然	—	本跡→SK72
79	B 2 i1	N-0°	楕円形	1.70 × 1.45	38	外傾	凹凸	人為	—	

(3) 遺構外出土遺物

試掘、表土除去、遺構確認の段階で、遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。以下、特色ある遺物を抽出し、実測図(第41・42図)を掲載し、解説は観察表で記載する。



第41図 遺構外出土遺物実測図(1)



第42図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第41・42図)

番号	種別	器種	計測値	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考		
115	縄文土器	深鉢	(2.9)	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部に横走る沈線文	C 3区付近			
116	縄文土器	深鉢	(3.9)	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部に横走る沈線文	C 3区付近	PL14		
117	縄文土器	深鉢	(2.7)	雲母・長石・石英・繊維	にぶい黄褐	普通	口縁部に凹形刺突文	SI 5 覆土中	PL14		
118	縄文土器	深鉢	(8.9)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部に2条の杵状有節沈線文, 胴部に波状沈線文	SI 8 覆土中	PL14		
119	縄文土器	深鉢	(4.7)	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	「X」字状の粘土を貼り付け, 周囲に有節沈線文	SI 8 覆土中			
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師質土器	焙烙	[35.8]	4.6	[30.8]	雲母	にぶい黄橙	普通	体部内・外面横ナデ 内耳1か所残存 体部及び底部に補修孔	表土中	10% 体部外面煤付着
番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	釉色	文様の特徴	産地・年代	出土位置	備考
122	陶器	播鉢	—	(5.7)	[10.2]	淡黄	にぶい赤褐	11条1単位の播り目 底部回転糸切り	瀬戸・美濃 17C 後葉	表面採集	5%
123	陶器	播鉢	—	(8.9)	—	淡黄	にぶい赤褐	13条1単位の播り目	瀬戸・美濃 17C 後葉	表土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
124	芥子面	2.1	1.8	0.7	(2.1)	土製	人物を表現 裏面に指紋残存	A 2 e5区	PL14		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
125	角錐状石器	5.2	1.7	1.1	6.2	硬質頁岩	縦長剥片を素材とし, 両側縁部に主要剥離面側から急角度の調整を施す 平面形は柳葉形, 断面形は三角形を呈する	SI 7 覆土中	PL14		
126	角錐状石器	7.9	3.6	2.0	39.1	砂岩	背面に礫面を残す厚みのある縦長剥片を素材とし, 両側縁部に主要剥離面側から急角度の調整を施す 平面形は柳葉形, 断面形は台形を呈する	SI 5 覆土中	PL14		

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
127	剥片	4.1	1.6	0.5	2.3	瑪瑙	縦長剥片 打面は単剥離面で平坦	表土中	
128	二次加工を有する剥片	2.3	3.6	1.3	11.6	安山岩	厚みのある横長剥片を素材とし、側縁に急角度の調整を施す	表土中	
129	石鏃	2.0	1.3	0.4	0.7	安山岩	凹基無茎鏃	A 3 b5区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
130	砥石	(7.7)	2.54	2.9	(88.1)	凝灰岩	砥面1面	南部表面採集	
131	磨石カ	(9.8)	(7.7)	1.7	(160.9)	流紋岩	磨面は平滑	南部表土中	

番号	銭名	銭径	銭孔	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
132	寛永通寶	2.2	0.6×0.6	0.1	1.9	鉄	新寛永 背文「元」 初鑄寛保元年(1741年)	表土中	

表3 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	炉	貯蔵穴				
1	B 4 a2	N-36°-W	長方形	4.37×3.50	23	平坦	全周	3	—	—	炉3	—	人為	土師器,鉄器(鋤先)	古墳時代中期 (5世紀後葉)	
2	B 3 c6	N-43°-W	長方形	5.30×4.10	25	平坦	ほぼ全周	—	—	—	炉2	1	自然	土師器,砥石	古墳時代中期 (5世紀後葉)	本跡→SK 1
3	B 3 d9	N-53°-W	長方形	5.60×4.60	55~60	平坦	ほぼ全周	4	1	—	炉1	1	自然	土師器,紡錘車	古墳時代中期 (5世紀後葉)	
4	B 2 d0	N-20°-W	方形	5.40×5.00	40	平坦	ほぼ全周	3	—	1	炉1	—	人為	土師器,球状土錘	古墳時代中期 (5世紀後葉)	本跡→SK10
5	B 2 f7	N-35°-W	長方形	6.20×5.10	20~35	平坦	全周	4	1	1	炉4	1	人為	土師器,球状土錘, 砥石	古墳時代中期 (5世紀後葉)	間仕切り溝5条
6	B 3 b0	N-19°-W	方形	2.60×2.40	24	平坦	—	—	—	1	炉1	—	人為	土師器	古墳時代中期 (5世紀後葉)	
7	B 3 g7	N-14°-W	方形	7.80×7.40	12	平坦	—	—	—	—	炉1	—	不明	土師器	古墳時代中期 (5世紀後葉)	
8	C 3 a5	N-22°-W	方形	7.90×7.80	30~42	平坦	—	2	1	1	炉1	—	自然	土師器,須恵器,球状土錘, 籬羽口,アカニシ	古墳時代中期 (5世紀後葉)	
9	B 3 i5	N-37°-W	[長方形]	[6.00]×[5.00]	—	—	—	4	—	—	炉1	—	—	土師器	古墳時代中期	
10	C 3 b4	N-31°-W	[長方形]	[6.50]×[5.80]	—	—	—	3	—	—	炉1	—	—	—	古墳時代中期	

表4 方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	B 3 f0	N-15°-E	[方形もしくは長方形]	8.30 × (2.60)	8	直立	平坦	人為	土師器	
2	C 1 b8	N-34°-W	[長方形]	(2.70) × 2.20	70~120	直立	平坦	人為	土師器,土師質土器,陶器,磁器,砥石,古銭	近世以降
3	B 1 i8	不明	不明	(3.30) × (1.05)	130	外傾	平坦	人為	—	

表5 井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
1	B 2 h4	—	円形	2.30	(2.60)	上部漏斗状, 下部円筒状	自然	土師質土器,陶器,磁器,砥石	
2	C 1 f9	—	円形	2.00	(3.00)	上部漏斗状, 下部円筒状	人為	土師質土器,陶器,磁器,木材	

第4節 ま と め

市ノ台屋敷遺跡は、平成13・14年度に計7,279.01m²が発掘調査された。ここでは、当調査区から検出された遺構・遺物について概観を述べ、若干の考察を加えまとめとしたい。

1 旧石器時代・縄文時代

調査区内において、旧石器時代から弥生時代の遺構は検出されていない。旧石器時代の石器は、表土もしくは住居跡の覆土中から採集されたものである。採集された石器の内訳は、角錐状石器2点（硬質頁岩、砂岩）、剥片4点（安山岩1点、瑪瑙3点）である。角錐状石器はいずれも完存品で、橋本勝雄氏の編年¹⁾によれば下総地域Ⅱb期段階に属するものである。

縄文時代の遺物は、土器片、石鏃が採集されている。土器片は、早期中葉の田戸下層式土器、前期の黒浜式～諸磯a式土器、中期前葉の阿玉台式土器である。阿玉台式土器の破片は、そのほとんどが第5号住居跡の覆土中から出土しており、胎土・焼成の様相から同一個体の可能性が高い。採集された土器片が少量であることや、遺構が検出されていないことから、当遺跡周辺は居住の場ではなく狩猟の場などに利用されていたと考えられる。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡と土坑が検出されている。竪穴住居跡は、出土した土器の様相から2時期に分けることができる²⁾。第Ⅰ期は、和泉期の様相を引き継ぐ土器が出土している竪穴住居跡群で、第4・5号住居跡が該当する。第Ⅱ期は、須恵器蓋または身を模倣した土師器坏が出土する竪穴住居跡群で、第1・2・3・7・8号住居跡が該当する。

第Ⅰ期の竪穴住居跡群は、調査区のほぼ中央に位置している。平面形は長軸が5.40、6.20mの長方形もしくは長方形に近い方形である。第5号住居跡は調査区内で唯一、間仕切り溝を持つ住居跡である。

第Ⅱ期の竪穴住居跡群は、第Ⅰ期の竪穴住居跡群の東側に位置している。これらは、住居の規模・主軸方向などから、長軸が5.5m前後で、平面形が長方形の第2・3号住居跡、長軸が7.8m前後で平面形が方形の第7・8号住居跡、および第1号住居跡に分類することができる。第2・3号住居跡は内部施設として貯蔵穴を持っている。第3・8号住居跡は、馬蹄形状の出入り口施設を有している。これらの竪穴住居跡は出土した土器の様相から、第2・3号住居跡、第7・8号住居跡、第1号住居跡の順で、2軒を1単位として構成され、変遷していったと考えられる。

検出された竪穴住居跡のうち、半数の5軒は焼失住居と考えられる。当遺跡が立地する小野川流域の古墳時代中期の遺跡からは、焼失住居が検出される割合が比較的高く、当遺跡も同様の傾向と言えよう。焼土・炭化材の状況から、石野博信氏の「火災住居の類型分類」³⁾をもとに調査区内の焼失住居を分類すると、すべて外炭外焼型（外区に炭化材と焼土が遺存する）に該当する。また、竪穴住居跡から出土している土器は、焼失後の間もない時期に投棄されたと考えられるものが多く、石野氏の類型分類によれば、調査区内から検出された焼失住居は、第5号住居跡を除き、「住居中央部を火元とする意図的放火」に当てはまる。

竪穴住居跡から出土した遺物は、土師器の坏・椀・甕類が大半を占め、まれに土製品（球状土錘）、砥石が混じっている。出土した土器については、以下のような特徴が挙げられる。

- ・坏・椀類の多くは、赤彩されている。

- ・ 坏・椀類の割合が高く、高坏などの供献土器の割合は極めて低い。
- ・ 土器片は細片が多く、意図的に破碎されたと考えられる。

赤彩の目的について榎村宣行氏は、「牛久市ヤツノ上遺跡を見る限りでは、祭祀的意味合いが強い」⁴⁾と指摘している。さらに赤彩された土器が、人為堆積を示す焼失住居から破碎された状態で出土することについて、「集落を移るに当たって、土地神に土地を返す祭祀行為を示しているものと思われる」と述べている⁵⁾。調査区内で検出された竪穴住居跡で、焼失住居と考えられるのは前述したように5軒あり、うち2軒は人為堆積である。さらに第8号住居跡は人為堆積ではないものの、逆位で出土した土師器椀の中からアカニシが検出されており、祭祀的な行為がうかがえる⁶⁾。意図的に火が掛けられた竪穴住居や、遺物が破碎されて出土している状況を勘案すると、当調査区内の竪穴住居跡の検出状況は、牛久市のヤツノ上遺跡や中久喜遺跡などに見られるような祭祀行為に関連があると考えられる。当遺跡は、ヤツノ上遺跡や中久喜遺跡の上流域に位置しており、ほぼ同時期の遺跡であることから、同様な祭祀的な行為が行われたのではないだろうか。ただし、調査区内の竪穴住居跡から出土した赤彩された坏・椀類は、数量や磨耗の度合いから、祭祀的な意味合いを持つだけではなく⁷⁾、日常汁器としても使用されていたと考えられる⁸⁾。

砥石は、4点が出土している。出土した砥石は、すべて凝灰岩製でよく使い込まれている。砥面には細かい線条痕が観察され、金属製品の研磨を裏付けている。金属製品は、第1号住居跡から出土した鋤先1点だけであるが、砥石の使用状況や金属で削られた傷跡が残る砥石転用と考えられる土師器が出土していることから、ある程度の数量の金属製品が使用されていたと考えられる。

従来、炉に替わって竈が付設されるようになると、古墳時代後期と考えられている。この考えに従えば、当調査区から検出されている竪穴住居跡にはすべて炉が付設されているため、古墳時代中期に位置付けられる。また、前述したように須恵器蓋または身を模倣した土師器坏が出土していることを加味すれば、当調査区内における古墳時代の集落は、5世紀後葉の和泉期から鬼高期への過渡期の極めて短期間に営まれた単位集落と考えられる。

3 中・近世

中・近世の遺構は、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、井戸跡が検出された。第1号掘立柱建物跡は、遺物が出土していないため、その規模や柱穴の覆土の状況から中世以降の遺構と判断した。北側に近世以降と考えられる第1号井戸跡が位置するため、それと同時期の遺構と考えることもできる。その場合、第1号掘立柱建物跡が居住を目的とした建物跡、第1号井戸跡がそれに付随するものと考えられる。

遺物は、17世紀代から19世紀代の製品と考えられる在地産の土師質土器、瀬戸・美濃系及び肥前系の陶磁器が出土している。在地産の土師質土器は、調理具である焙烙が出土した遺物の大部分を占めている。陶磁器類では、染付椀・染付皿の割合が高い。また、当遺跡における江戸時代中頃の陶磁器類は日常雑品に限られ、江戸府内の遺跡にみられるような、上手物は出土していない。

当調査区内から検出された遺構・遺物や、所在地の字名が「屋敷」であることから、江戸時代中頃、当地は農民階層の屋敷であった可能性が高い。また、当遺跡の南方約500mには、同時期の遺構と考えられる井戸跡や土坑・溝跡が検出された樋の沢久保遺跡¹⁰⁾が所在しており、それとの関連も考えられる。

今回の発掘調査時まで、当地には住宅が建てられており、屋敷森であった所からは19世紀以降の製品と考えられる陶磁器類が多数採集されている。このことは、江戸時代中頃から現代まで当地が宅地として利用されていたことを示すものである。

今回の調査は市ノ台屋敷遺跡全体の一部分にすぎず、古墳時代の遺構はさらに台地上の東方に広がっている可能性が考えられ、周辺には中・近世の遺跡として周知されている遺跡が点在している。今後、当遺跡周辺の発掘調査が実施される際には、この調査報告が生かされれば幸いである。最後に発掘現場や整理作業で御指導・御助言を賜った方々に、改めて感謝の意を表したい。

註

- 1) 橋本勝雄「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—』茨城県考古学協会 2002年12月
- 2) 第6・9・10号住居跡は、出土遺物が少量であるために時期区分が困難であり、区分から除外した。
- 3) 石野博信『日本原始・古代の研究』吉川弘文館 1990年3月
- 4) 樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年7月
- 5) 註4に同じ
- 6) 深谷憲二・柴田博行「牛久東下根特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 隼人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集 茨城県教育財団 1996年6月
隼人山遺跡第36号住居跡からは、坏に高坏を伏せ、その中からアカニシが出土している。祭祀行為との強い関係が考えられると報告されている。
- 7) 樫村宣行・浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No342 1992年1月
両氏は「古墳時代後期において祭祀形態に変化が起り、従来の供献土器である埴や高坏が消滅し、代わって供膳具の中の坏・椀または坏・椀に脚を付けた高坏に彩色するか否かによって祭祀具と日常雑器とに分けて使用したものと考えられる」と述べている。
- 8) 同様のことが、中久喜遺跡でも指摘されている。(荒井保雄「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 茨城県教育財団 1993年9月)
- 9) 茂木悦男「樋の沢久保遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第186集 茨城県教育財団 2002年3月

参考文献

- ・樫村宣行・土生朗治・白石真理「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999年5月
- ・白田正子「古墳時代中期後葉における土器編年細分案—牛久地域を取り上げて—」『茨城県考古学協会誌』第8号 茨城県考古学協会 1996年7月
- ・瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇六』1998年3月

写 真 图 版



調査区全景



中央部
遺構確認状態



西部完掘状況

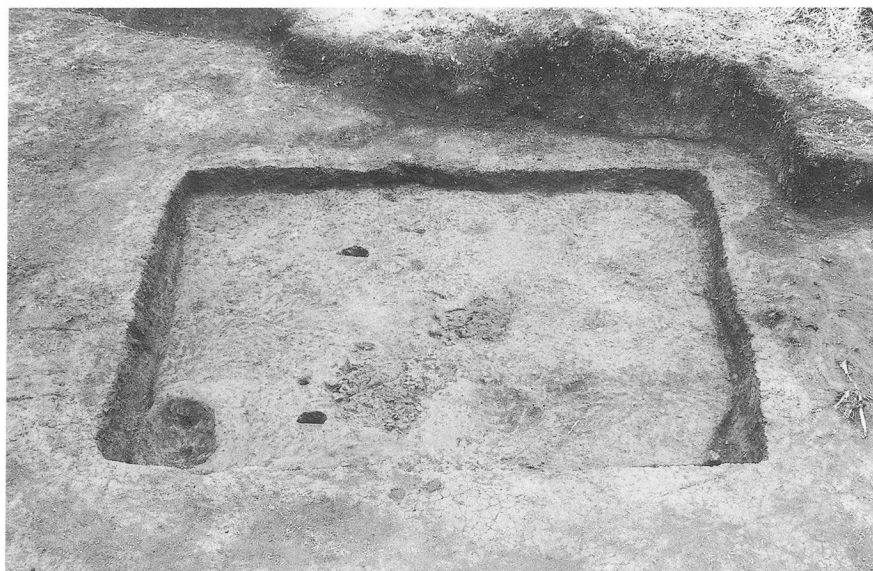
PL2



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況



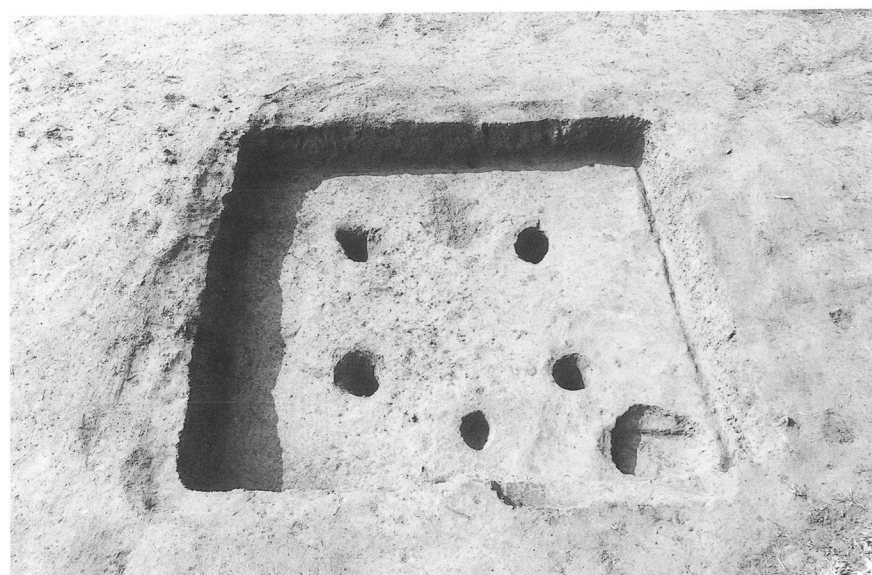
第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況

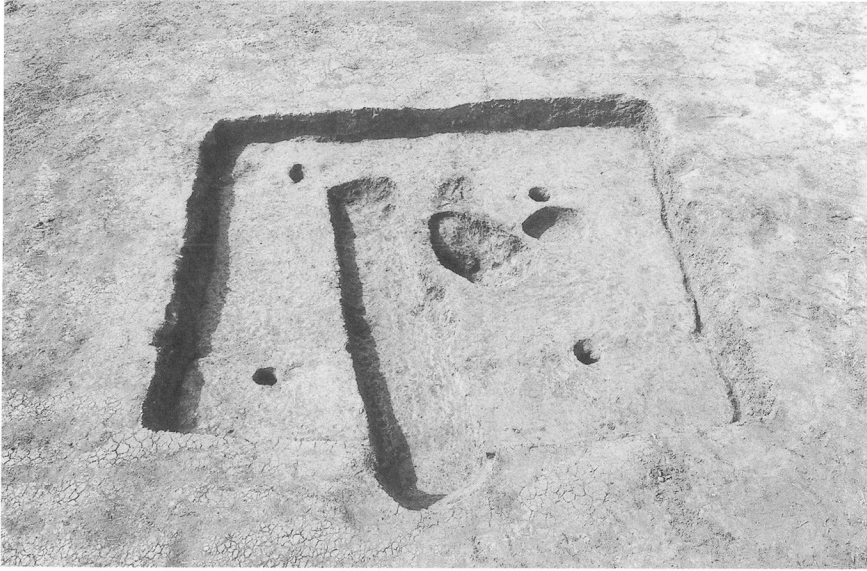


第2号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
完掘状況

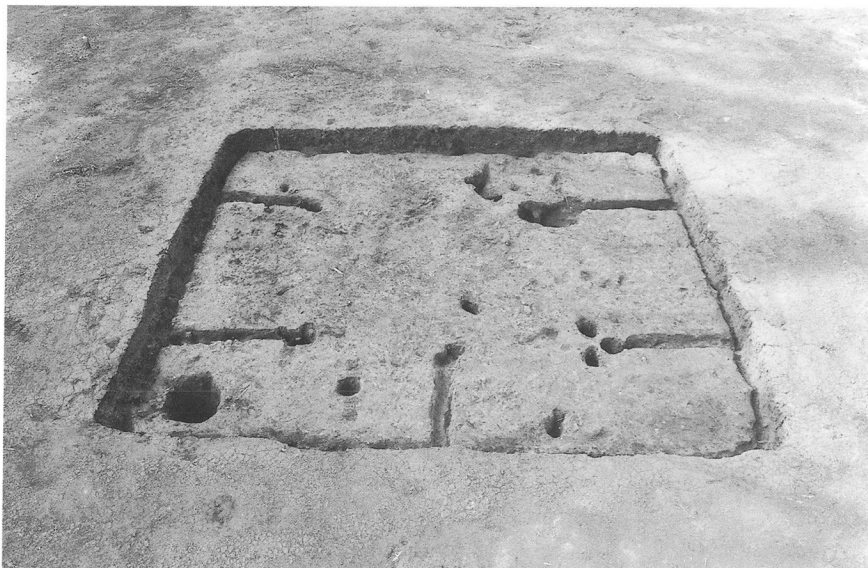
PL4



第4号住居跡
完掘狀況



第4号住居跡
遺物出土狀況



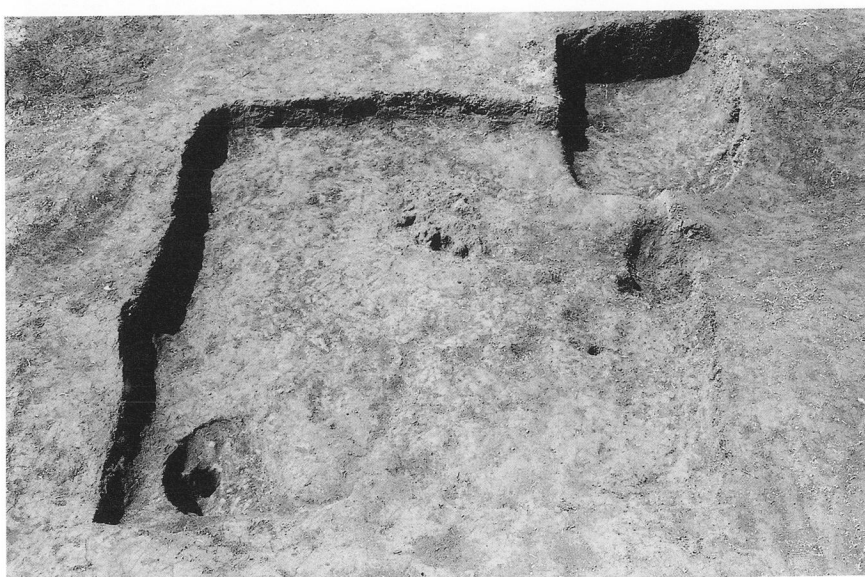
第5号住居跡
完掘狀況



第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
遺物出土状況

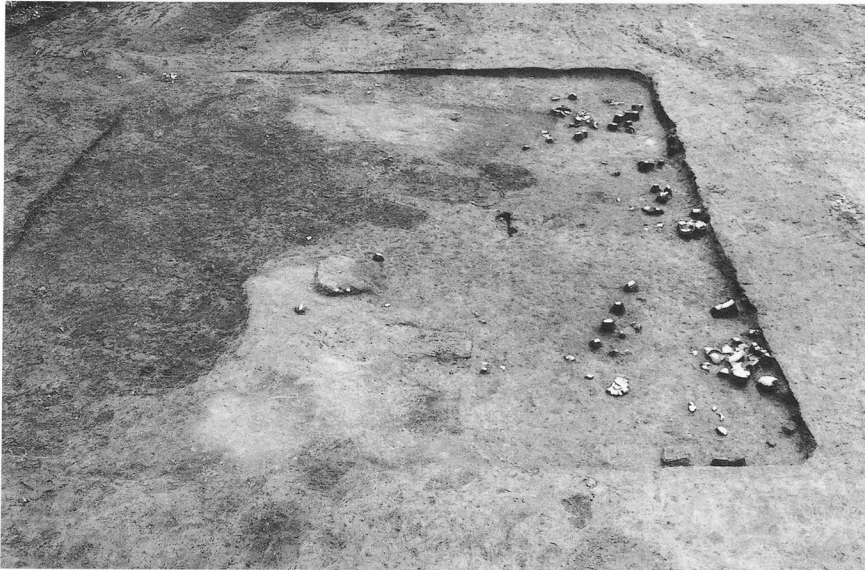


第6号住居跡
完掘状況

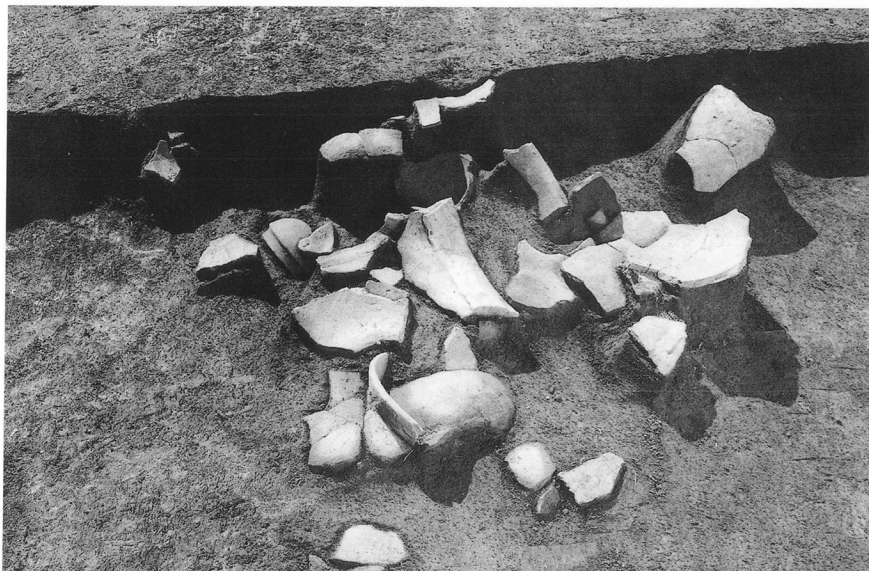
PL6



第7号住居跡
完掘状況



第7号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
遺物出土状況



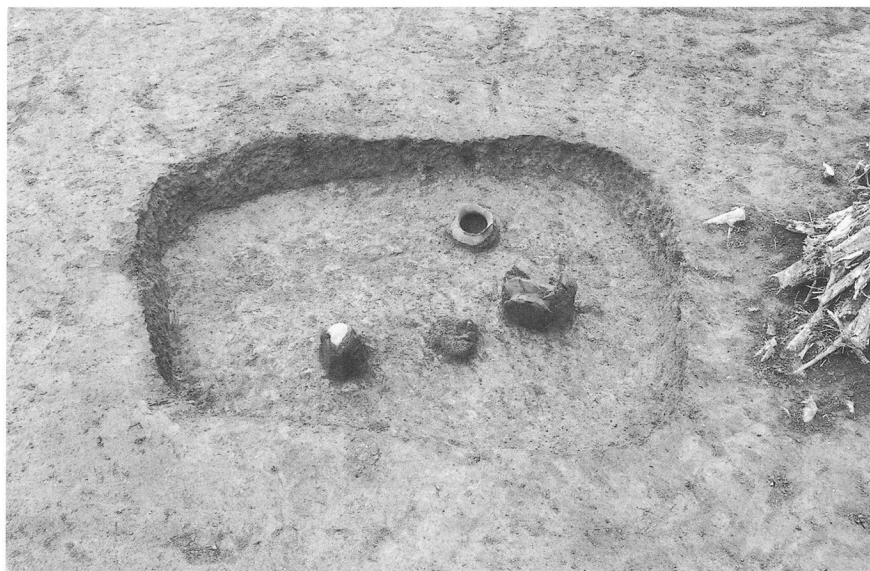
第8号住居跡
完掘状況



第8号住居跡
遺物出土状況



第8号住居跡
遺物出土状況



第46号土坑
遺物出土状況



第46号土坑
遺物出土状況

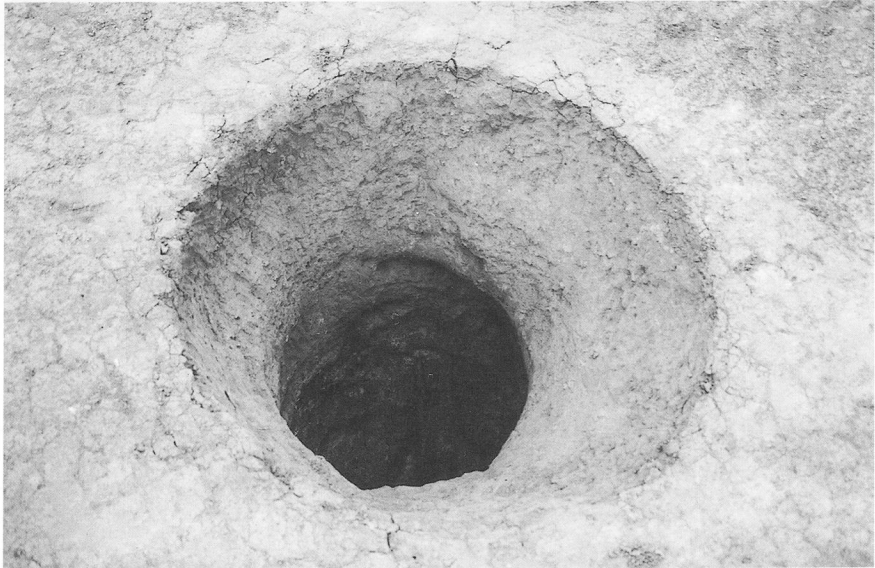


第1号井戸跡
完掘状況

第1号井戸跡
遺物出土状況



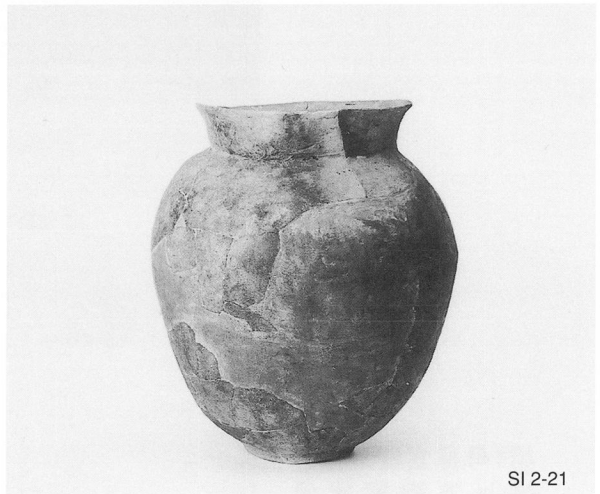
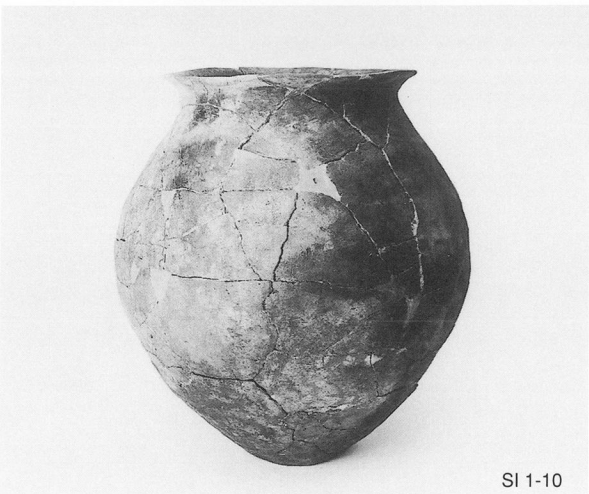
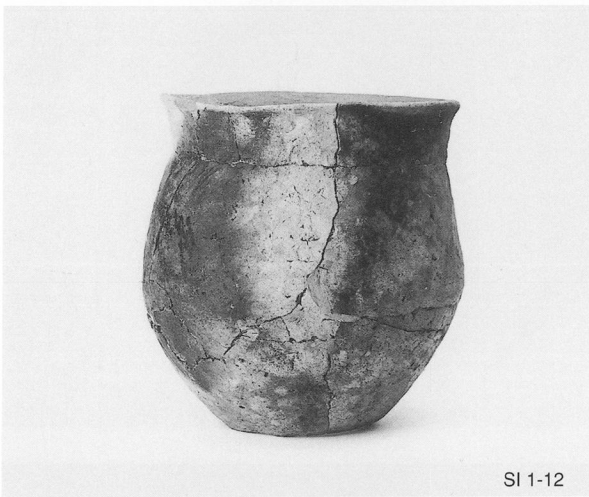
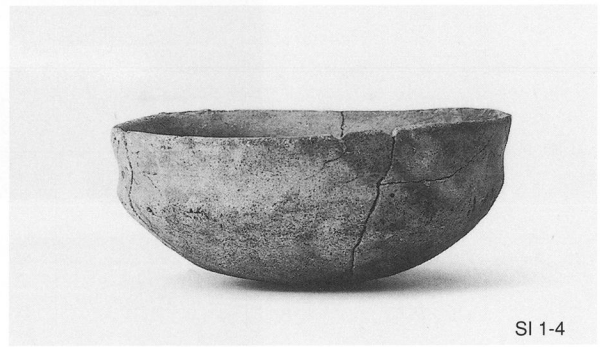
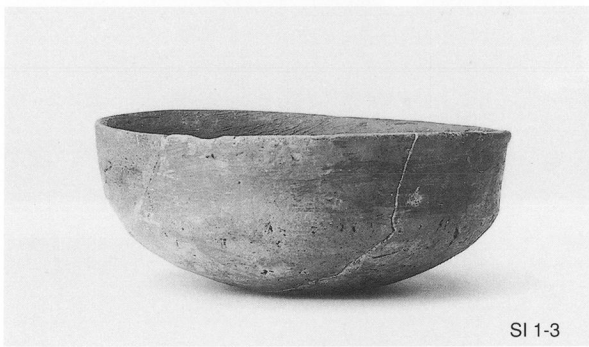
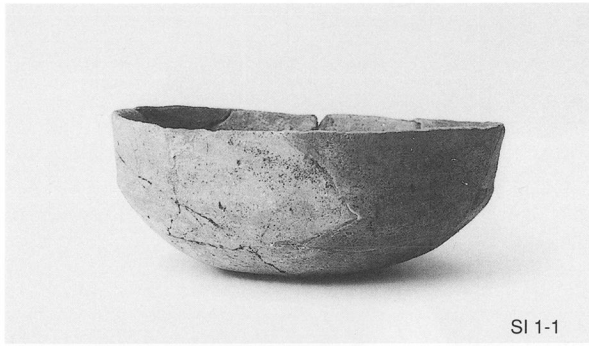
第2号井戸跡
完掘状況



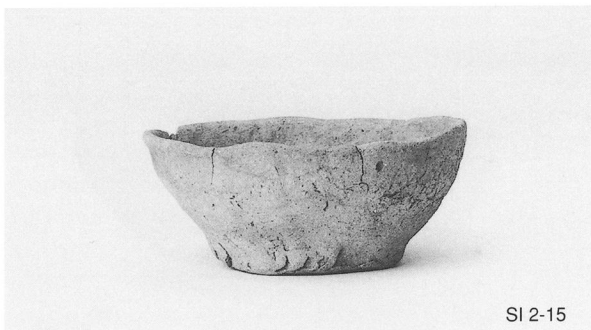
第1号掘立柱建物跡
掘り方完掘状況



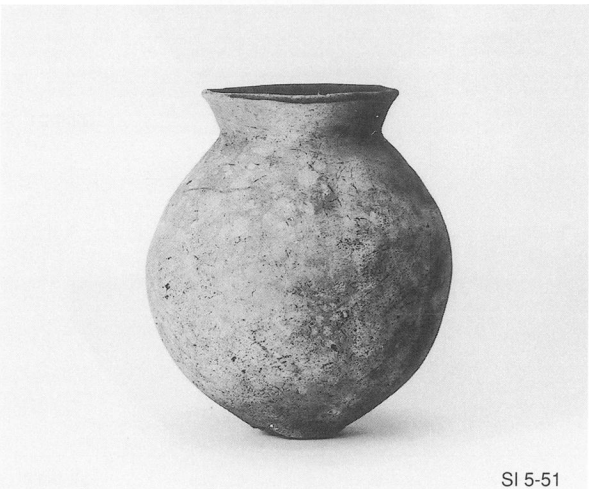
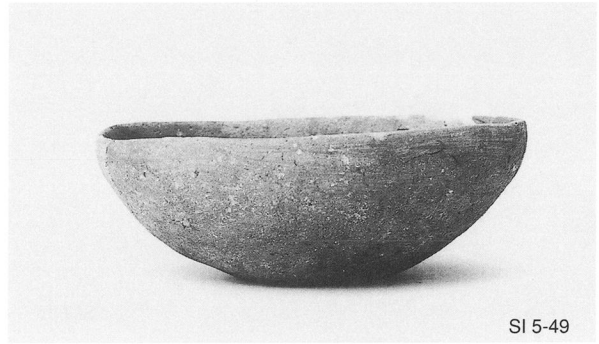
PL10

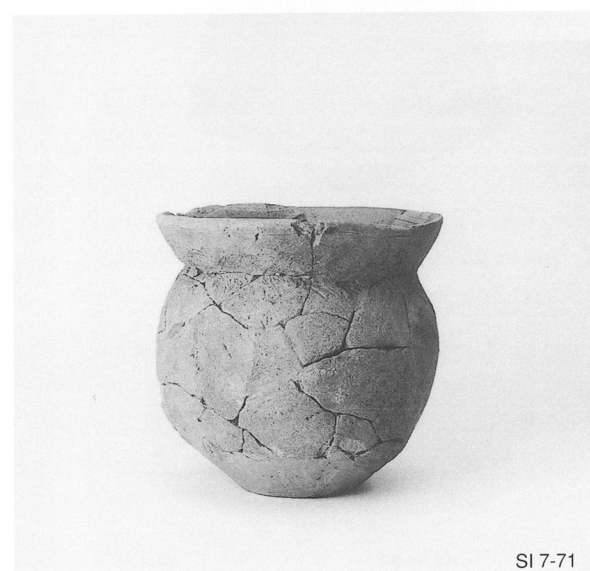
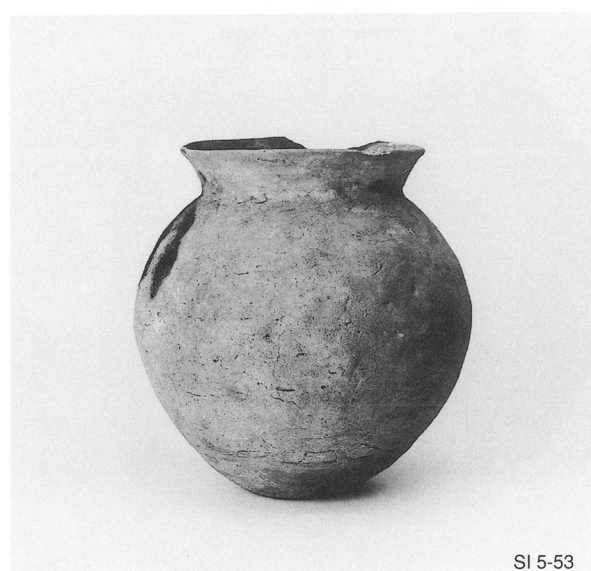
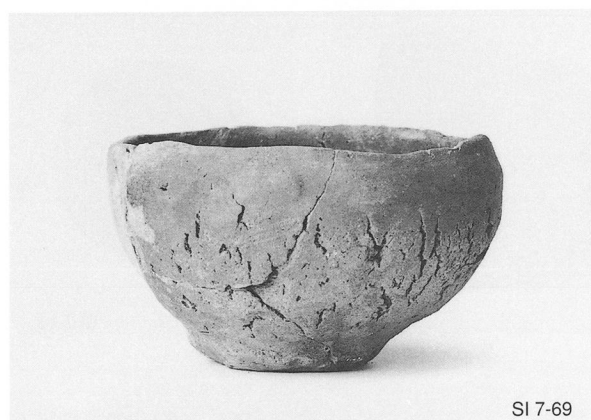
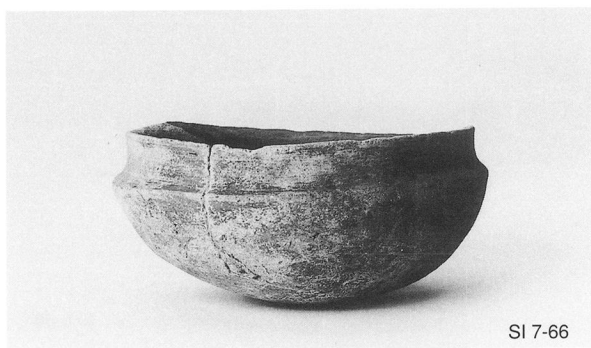


第1・2号住居跡出土遺物

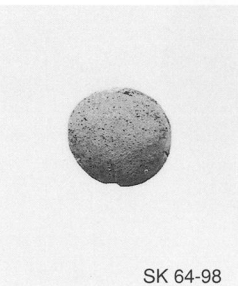
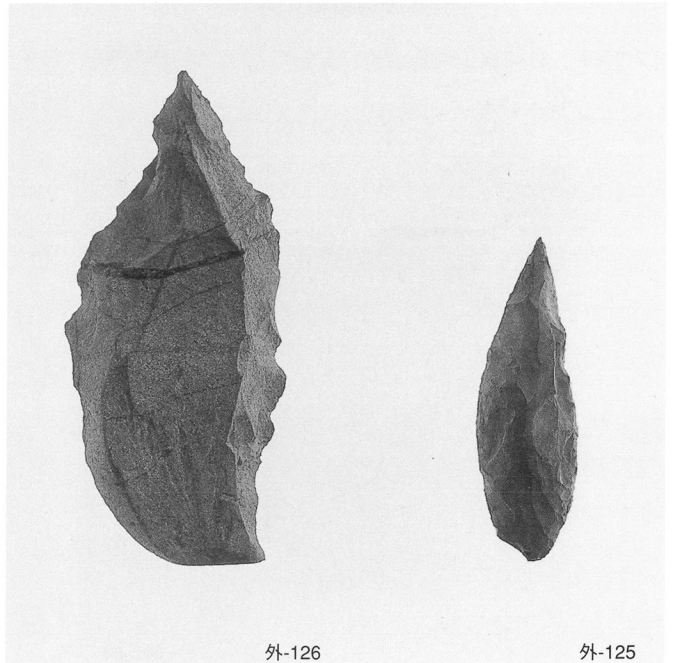
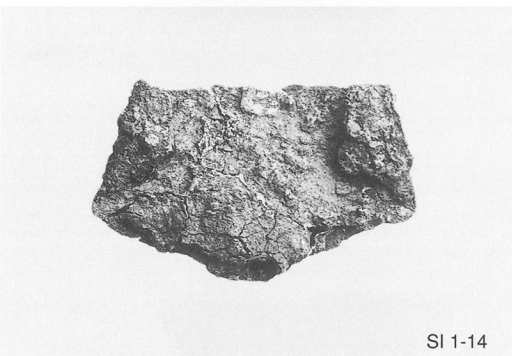
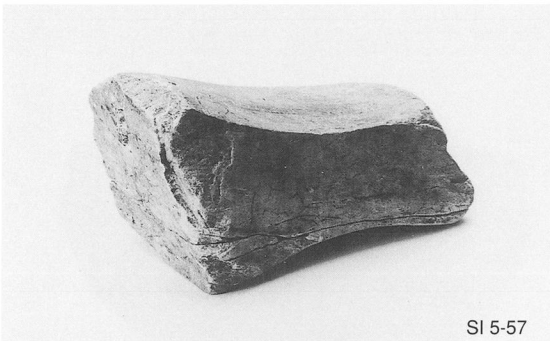
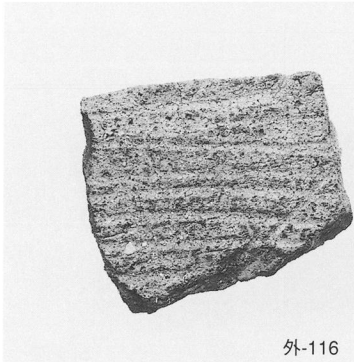


第2・3・4・5号住居跡出土遺物





第5・7・8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物・その他の出土遺物（縄文土器・旧石器・石器・鉄器・土製品）

茨城県教育財団文化財調査報告第198集

市ノ台屋敷遺跡

2003(平成15)年3月20日 印刷

2003(平成15)年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸市生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社

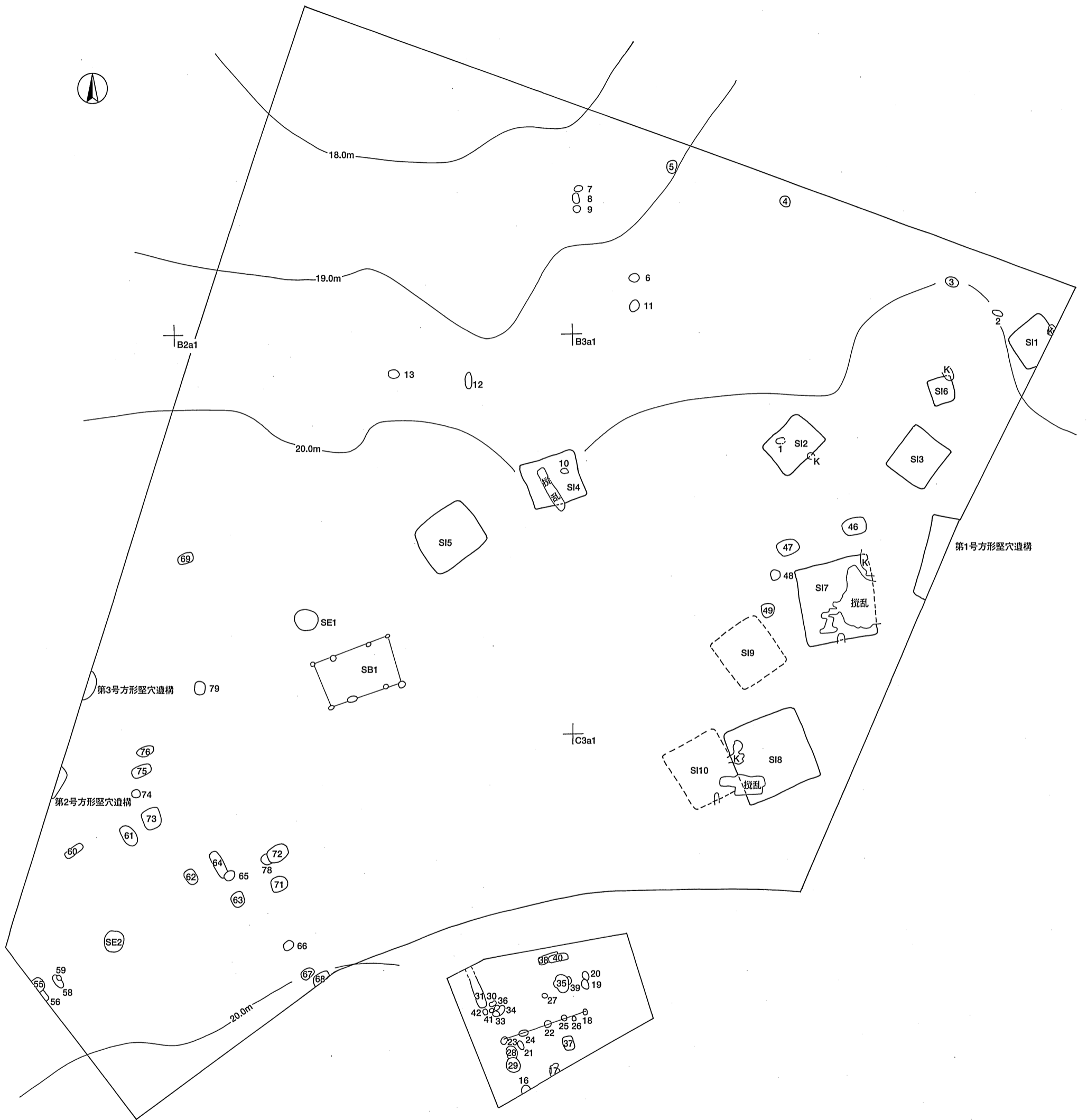
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2

TEL 029-231-4241

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第198集

市ノ台屋敷遺跡遺構全体図



付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第198集
市ノ台屋敷遺跡遺構全体図

